黄金のヴァンブレイス

岡村　としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄金のヴァンブレイス

【Ｎコード】
Ｎ１９０２Ｗ

【作者名】
岡村　としあき

【あらすじ】
黄金のヴァンブレイス。伝説の殺し屋。年齢不詳、性別不明。ただ一つはっきりしている事は、奴が仇であること。傷だらけの魂を引きつれ、アルフレッド・エイドスは復讐の旅を続ける。

一話　テンセイ

その日、僕は死んだ。見知らぬ男に家族を殺され、それを見つけた僕も胸を刺されて、死んだ。

その日は僕の誕生日だった。１６歳の誕生日。地味だし、招く友人もいないけど、家族がささやかに祝ってくれる１年で一番大切な日だった。

玄関を開けて靴を脱ぐが反応が無い。おそらく、僕を驚かせようと物影に潜んでいるのだろうと思い、おおげさにリビングを開けて逆に驚かしてやろうとしたが、それはできなかった。

リビングはめちゃくちゃに荒らされていて、僕はそれを発見する。テーブルの上の血塗れのバースデーケーキと、その横で頭から血を流した母。

自慢の長い髪が、数本束になって捨てられており、相当な苦痛を伴ったのだろう、顔は血と涙にまみれ、とても正視できなかった。

僕は逃げるようにソファに視線を向けると、バスタオルにくるまれた何かを発見した。乾いた喉でソファに近づき、おそるおそるバスタオルを剥がし、中身をさらけ出すと声を上げそうになった。

変わり果てた双子の弟と妹が、そこにいた。それぞれ両手で小さな包みを握り締め、離すまいとしっかりと握り締めている。僕はその包みが何であるかを知っている。

それは、彼らが僕に悟られまいと一生懸命貯金したお金で買った、

僕へのプレゼントだ。

「何だよ、これ」

そう、搾り出すのがやっとだった。同時に、湧き上がるドス黒い感情と家族を失った虚無感。その時、僕をつき動かしたのは殺意だった。

「殺してやる、犯人を殺してやる……」

台所から包丁を抜き取り、1階を奇声とも怒声とも解らない叫び声を上げて探し回る。トイレ、風呂場、和室、押入れ――。

1階のどこにも犯人の姿はない。なら……。

「2階……」

僕は階段を叩き潰すかの様に駆け上がり、階段から一番近い部屋、弟と妹の部屋のドアを乱暴にこじ開けた。

小学校に上がったばかりの彼らの部屋は、学習机が隣あって並べられており、その脇には二段ベッドがある。彼らはとても仲が良く、いつも僕を左右から引っ張るように、遊んでくれと懇願する。

だが、それももうない。彼らは下の階で……思い出したところでまた怒りが湧き上がった。床に放り投げられた赤と黒のランドセルを飛び越え、次の部屋を目指す。

僕の部屋だった。勝手知ったる我が城も、今や魔物が潜む洞窟も同然。だが、そんなものは恐怖の内に入らない。恐怖などという感

情は、僕の中に芽生えた殺意がすべて飲み込んでしまっている。

ドアノブを握り、ドアを右足で思いっきり蹴飛ばす。中を見て愕然とする。犯人の姿は、ない。室内も荒らされた様子はなく、僕が登校する前の状態そのままだ。ベッドの上に脱ぎ捨てたパジャマも、床の上に散乱する漫画雑誌もそのまま。

そもそも、犯人はまだこの家にいるのか？　頭に血が昇りきっていたせいか、僕は冷静な判断が出来ずにいた。そうだ。まずは救急車を呼ばなくては――。そう考えてドアノブに手を回した時。

突然、世界が揺れた。頭に強烈な鈍い痛みを感じ、前のめりに倒れこむ。誰かに殴られたのか？　背中に気配を感じ、僕はとにかく逃げ出した。逃げ出した？　さっきまであれだけ殺してやると目を真っ赤にしていたのに？

頭の中では警報が鳴り、逃げ出せと叫び狂い、体はそれに逆らうことなく一分一秒でも長く生を享受したいと、醜く這い蹲（はつくば）ることをよしとする。僕は……仇を取ることよりも逃げることを選んだ。選んでしまった。

急に怖くなった。生まれてこの方喧嘩もしたことがない僕が、初めて殴られた。初めて感じた激痛、初めて向けられた殺意は、僕のちっぽけな勇気を跡形もなく踏み潰し、嘲笑った。

後頭部に広がる痛みと吐き気を抑え、なんとか両親の寝室まで逃げ伸び、体をバリケードの様にして、ドアに体重を預ける。

すでに包丁は僕の手元にはない。殴られた拍子に手放してしまったからだ。そして、僕は聞いた。床を遠慮がちに歩く犯人の足音を。

死神の足音を。もう、逃げられない。

僕は目を閉じた。そして、ただひたすら待った。この命果てるときを――。

そして、その時が来た。僕が放り投げた包丁を使って男が僕を刺した。見知らぬ男だった。だが、それよりも刺された胸の痛みが僕の思考を無理矢理奪い、起き上がれないくらいの激痛が僕を包み込んだ。痛い、というレベルの話ではない。熱くて痛くて……のたうち回って、やがて僕の意識は途切れ、終わりを迎えた。

暗闇の中で僕は願った。『もう一度生を受けることがあるなら、あいつを殺したい――と』。

僕の意識は底の無い闇へと落ちて行く。やがて暖かい光に包まれたと思ったら、次の瞬間には暗い空間をさまよっていた。

その空間は僕だけが支配する僕だけの世界。暗いけどあたたかくて、でも恐れはない。誰かを感じて護られている。そんな安心感。ずっとここにいたい。そう思った。不意に光を感じ、僕はここを離れなければいけない事を悟った。光の向こうへと僕は押しやられる。

もう少しここにいたいと思う未練と、光の先への期待感。それらを胸に抱えたまま僕は光を目指す。

光の先には、それよりも眩しい笑顔があった。金髪の男性と、金髪の3人の少女達がまず目に入った。中年の女性が顔を近づけ、なにやら嬉しそうに話しているが、その言葉は日本語ではない。英語でもなく、僕の知らない言葉だった。

僕は、一体どうなってしまったのか？　その時の僕は理解が追いつかなかったが、やがてそれが新たな生を受け、新しい家族を手に入れたのだと知る。

僕は、生まれ変わったのだ。

二話　イセカイ

屋敷の窓に映る一人の幼児。僕だ。金色の髪と深い蒼の瞳。笑えば愛らしいのだろうが、窓に向かって微笑むほど僕はユーモラスじゃない。

僕は5歳になった。この5年、色々な事があったものだ。時が経つのは速い。新しい自分を受け入れ、こうして生きている。

生まれ変わり。というやつなのだろうか？　中国のどこかに前世の記憶を持って生まれてくる人がいると聞いたことがあるが、それと同じなのか検証する手立てはないので疑問は尽きない。そこで僕は、自由に歩けるようになってから一体ここが地球のどこなのか、現代なのか、過去なのか、自分なりに色々調べてみた。

と言っても、5歳の幼児に出来ることはほとんどなく、親兄弟から話を聞いたり、絵本レベルの本を読んで情報を得るくらいしか方法が無い。

その結果わかったことは三つ。一つ、ここは僕の知る地球ではない事。二つ、文明レベル的には中世ヨーロッパのそれと同じ（あくまで僕の主観だけど）。そして、一番大きな違いが三つ目。

『魔法』の存在だ。といっても僕が勝手に『魔法』と呼んでいるだけで、皆は『ルーン』と呼んでいる。ルーンは言葉に宿った力を引き出す技術で、地水火風にまつわる自然現象をはじめ、色々な事象を引き起こすことが出来る。

火を起こす時は、火のルーンを唱える。水が大量に必要な時は水

のルーンを唱え、水を生み出し、夏場なんかは風のルーンを唱えてエアコン代わりにしている。

ルーンは誰にでも使える技術というわけではなく、遺伝によるところが大きい。僕の生まれた家、エイドス家は特にルーンに秀でた家系だった。

「アル～おやつよ～」

一番上の姉、フィーナ姉さんが僕を呼んだ。アルフレッド・エイドス。それが僕の新しい名前。家族にはアルと呼ばれている。

「もう、こんな所にいたの？　せっかく私が焼いたパンケーキが冷めちゃうじゃない。何度も呼んでるのに……レイナやセレーナに全部食べられちゃうよ～？」

フィーナ姉さんが僕を抱っこして、強引にリビングに連れて行こうとする。僕は別に逆らうでもなく、それに従う。フィーナ姉さんは今年１８歳。僕とは１３年も年が離れている。もうすぐ隣の領主の息子に嫁ぐらしい。フィーナ姉さんは美人だし、料理の腕も申し分ない。相手の男はさぞや幸せだろうな、と僕は思う。

腰まで伸びた長い金髪と母譲りの整った顔立ち。僕は肩に抱かれ、金色のカーテンの様な長い髪に顔を埋める。優しくて、甘い匂い。恥ずかしいけれど、週に何回かは一緒のベッドで寝ている。色んなおとぎ話を子守唄代わりに聞かされて。

やがてリビングにたどりつき、僕はイスに座らせられる。わけではなく、二番目の姉、レイナ姉さんが僕をフィーナ姉さんから奪い取り、膝の上に僕を座らせた。

「ああ！　ちょっと、レイナ姉さんひどい！　アルは今日、私とおやつ食べるんだから！」

三番目の姉、セレーナ姉さんが顔をぷくぷくさせてかわいらしく怒った。

「アルは私が一番大好きなの、ねー？　アルぅ」

レイナ姉さんはやんちゃで、面白い家族のムードメーカー。いつも食事が明るくておいしく感じるのはレイナ姉さんがいるから。

セレーナ姉さんは、ちょっとワガママだけど、色んな細かいところに気が付く。僕の寝癖や、かけ忘れたボタンなどすぐに直してくれる。

三人とも僕の新しい大事な家族……。前世の事は忘れろと言われても、忘れる事が出来ない。けれども、今の僕にはこんなにも素敵な家族がいるんだ。

『この世界で幸せに暮らそう』。この5年で僕が出した結論だ。過去は戻ることは出来ないけれど、いつまでも引きずり続けるわけには行かない。

この世界に生まれ変わったのも、きっと神様が今度の人生は幸せに生きろというメッセージなのだと思うことにした。

「アル、また重くなったねー？　やっぱり男の子なんだねー」

レイナ姉さんが僕の右手をつかんでゆらゆらと揺さぶる。まるで

犬か猫のような扱いだ。というのも、姉達とは年が１０年以上も離れていて、フィーナ姉さんは１７歳。レイナ姉さんは１６歳。セレーナ姉さんは１５歳だ。

年の離れた弟がかわいい……というのもあるのだろうけど、それだけではない。僕を産んだ母。エレナ・エイドスは３６歳という若さでこの世を去った。僕を産んですぐの事だ。

母親の愛情を知らずに育った僕を不憫に思ったのだろう。過剰とも言えるくらい僕は過保護に育てられ、欲しい物があればなんでも与えられた。

前世の僕は長男だったので、末っ子かつ、美人の姉が3人もいるというのはとても新鮮だった。

「ちょっとレイナ姉さん！　アルを独り占めしないでよ！　アルは私の事が一番好きなんだから！　ね、アル～」

今度はセレーナ姉さんが僕をレイナ姉さんから奪い取る。

「セレーナもレイナもいい加減になさい！」

さすが長女。こういう時のフィーナ姉さんは頼りになる。

「アルは私が一番大好きなんだから、無駄な議論はおよし」

そういって、フィーナ姉さんがセレーナ姉さんから僕を奪い取った。

「んもう、じゃあさ！　アルに聞いてみようよ！　誰が一番好きか

！」

「望むところね」

「聞くまでもないでしょ？」

姉達の視線が僕に集まる。

「アルは、お姉ちゃんの中で誰が一番大好き？」

なんて厄介な質問してくれるのだろう。僕はしばし視線をさまよわせ意を決し口を開いた。

「みんなだいすきっ！」

屋敷の窓で練習したとびきりの笑顔を満開にしてそう答えた。これで姉達はケンカすることはないだろう。練習の成果を出せてよかった。僕はユーモラスな人間らしい。

三話　ルーンナイト

意識を集中する。燃え盛る火をイメージして、ルーンを唱える。右の手の平にボウっとサッカーボールくらいの大きさの火が宿った。

「やばい、やりすぎたっ」

慌てて火を消そうとするが、どうすればいいかわからない。

「アル、でかけるよー」

意識を集中しすぎたせいか、近くにレイナ姉さんが近づいていた事に気が付かなかったらしい。

僕は、手の平にくっ付いたままの火炎球を後ろでに隠し、振り返る。

「今日は家族で隣の町にお出かけするって言ったでしょ？　早く準備しないと置いてくよー」

「う、うん。待ってて！」

「みんな待ってるから早く……キャア！？」

レイナ姉さんが後ろを指差して、金切り声をあげる。そういえば、なんだか背中がやけに熱い。

「アル、すぐに離れて、お家が火事になっちゃう！」

「え！？」

振り返って後ろを見ると、屋敷が赤く燃えており、そこから黒い煙がもくもくと立ち上っていた。どうやら、僕の唱えた火のルーンが屋敷の壁を燃やしてしまったらしい。

レイナ姉さんが水のルーンを唱えて、屋敷の壁に放つ。瞬く間に鎮火し、住む所を失わずに済んだ。

「何だ、一体どうした？」

威厳のある低い声。振り返れば、長身の中年男性……ウォルフ・エイドス。僕らの父がそこにいた。

「父様。急に壁が燃えて……アル、大丈夫？」

「うん……その、僕……」

僕の背中を嫌な汗が流れる。父、ウォルフは普段は優しいが、起るとヤバイ。普通に拳が飛んでくるのだ。過去に何度かいいモノを僕はもらっている。

「アルフレッド……お前、火のルーンを使ったな？」

ぎくりと背筋を伸ばして、僕は生唾を飲み込んだ。どうやら、お見通しらしい。

「え、でもアルは5歳ですよ？　私なんか、１１歳の時に覚えたのに」

「どうだ？　違うのかアルフレッド？」

射抜くような視線。僕は耐え切れず、頭を下げて正直に認めた。

「このバカ者がっ！」

今日は拳ではなく、尻を２０回も叩かれた。おまけに家族で出かけるはずだった予定もキャンセルな上に、僕だけ晩御飯抜きというトリプルパンチだ。

まあ、屋敷の壁を焼いたのだから当然か。

「それにしても」

ロウソクの灯りで照らされた室内で、僕はベッドに体育座りして、膝の上にアゴを乗せ呟いた。

「ルーンってもっと大人になってから覚えるものなのかな」

「そうだよ」

ドアを開けて、レイナ姉さんが木のトレイに載せた食事を運んできてくれた。

「お腹空いたでしょ、アル？」

返事の前にぐ～とお腹が鳴ってレイナ姉さんは噴出した。ベッドの上に置いて、『内緒だからね』と言って人差し指を唇の前に立てる。

パンと、きのこのスープだけの地味な夕食であったが、昼から8時間も何も食べていない胃袋にはそれを拒む理由は無い。僕は一心不乱にパンをかじり、スープをすする。

「ルーンはね、もっと大きくなってから覚えるものなの。アルにはちょっと早すぎたかな」

そういってレイナ姉さんは、僕の口の周りについたきのこの欠片を指ですくい、ペロッとなめる。

「でも、アルにはルーンの才能があるわね。フィーナ姉さんも、セレーナも父様に一ヶ月教わって、マッチくらいの火が出せたくらいなのに。アルはお家の壁燃やしちゃうんだもん」

フフっと笑って僕の額を小突く。そして同時にこう言った。

「アルなら『ルーンナイト』になれるかもしれないね。ううん、きっとなれるなれる！」

「るーんないと？」

「そう、ルーンナイト。このエルドア王国に7人しかいない王様の盾にして、国の誉れ。最高の剣術とルーンの技術を持った騎士の事よ。エイドス家からも何人かルーンナイトを輩出しているわ。私達のお爺様もそうだったのよ」

「僕が、ルーンナイトに？」

「なれるよ、レイナお姉ちゃんが保障してあげるっ」

そういえば。近所の子供達が木の棒やらを持って、るーんないとごっこをしていたような気がする。憧れなのだ。少年達にとってルーンナイトは。

僕は本ばかり読んでいたし、子供の様に遊びまわるのは気が引けたので、同年代の友人というのもいない。だから、ルーンナイトに関してはまったく知識がなかった。

「父様、こっそり褒めてたよ。さすが『俺の息子だ』って」

「父様が？」

「うん。それに今日はお出かけできなかったけど、来週はお出かけできるみたい。よかったね、アル。欲しいものいっぱい買ってもらえるといいね」

レイナ姉さんは僕の頭をわしゃわしゃとなで、空になった食器をトレイに乗せると、僕のおでこにそっとキスをした。

「おやすみ、アル」

ドアをそっと閉める音と、おでこに残ったレイナ姉さんの唇の感触。その二つの5感すら置き去りにして僕の思考は一つの結論へと導かれていた。

前世で力が無かった僕は家族を守れなかった。けれど今は違う、僕には才能があってそれを活かせる場所があるし、目指すべき目標がある。

ルーンナイトになろう。家族を守るために。

僕は灯りを消し、ベッドに潜り込むとそう決心し、目を閉じた。

四話　トモダチ

翌日。昼食を食べ終えた僕は、川原で読書でもしようと思い、昼下がりの町を歩いていた。

十数分ほど歩いて、目的の場所に到着すると、そこにはすでに先客がいた。

赤く長い髪を左右で結って胸元に下げ、つぎはぎだらけの服を着た少女……僕と同じか少し上くらいの年齢だろうか？　気の強そうな目がギラギラと輝き、迂闊に手を出せば噛み付かれそうな雰囲気だ。

少女は木の棒を両手で持ち、一心不乱に縦に横に振っている。たぶん、剣の稽古でもしているんだろう。

関わると面倒臭そうだと僕は思い、少し離れた所に腰を落ち着かせ、父の部屋から拝借した本を広げる。しばらく本の内容に没頭していた僕であったが、唐突に本が宙に浮いてそれは中断された。

少女だ。赤毛の少女が意地悪そうに悪ガキっぽい笑顔を浮かべて僕の本を右手でつかみ、僕を見下ろしている。

「殴っていい？」

「はあ？」

一瞬で僕の頭の中は疑問符で埋め尽くされる。この女、想像以上にヤバいのかもしれない。

「あたしの剣術の餌食になってもらいたいんだけど」
「なるわけないだろっ！」
僕は素早く少女から本を奪い返し、一歩後ずさる。
一体、この世界の子供はどういう教育を受けているんだろう。とにかく、逃げなきゃ。僕には木の棒で叩かれて喜ぶような特殊な感性はない。
「ねー、ちょっとだけでいいからぁ」
強引に僕の肩をつかんで離さない。うんざりして、僕は振り向き言い放った。
「初対面の相手が、そんなこと許すはず無いだろ」
「じゃあ、明日ならいいの？」
「明日もダメ、明後日もダメ。だいたい君、なんなんだよ」
少女は、一つ咳払いをして両手を腰に当て、偉そうに胸を張った。
「あたしは、ロッテ。ロッテ・ルーインズ、未来のルーンナイトよ」
フフン。と鼻を鳴らし、また偉そうに腕を組んで目をつむるロッテ。
「あたしの練習台になれるのよ、きっとあんたは歴史の１ページに

名を残すわ。あんたの勇姿は未来永劫語り継がれるのよ」

「それって、何だか僕のほうが目立ってるんじゃないの？」

殴られて歴史の１ページに名を残せるなら、安いものだろうか？

それにしても、よく口の回る少女だ。本当に僕と同年代なのか？

「それに」

真剣な面持ちでロッテは僕を見る。

「あんたも、でしょ？」

「え？」

「転生」

その言葉に一瞬凍りつく。一体どうして？　何故彼女にはそれがわかるのか。

「傷だらけなのよ、あんたの魂。そういう奴は得てして、前世の記憶とルーンの才能を持ってる。もちろん、あたしもね」

右手の親指を立て、自分を指すロッテ。その表情は真剣そのもので、とても冗談を言っている雰囲気ではない。

「あたしには、魂の傷が見える。あんたの魂は相当ひどいわね、今まで見たことが無い位、最悪」

「……」

「あんたを一目見てピンと来た。あたしと一緒だって。この世界には、時折前世の記憶を持ったまま生まれる人間がいるみたい。でも、大人になるとみんな忘れちゃうみたいだけどね」

ロッテは小さな背中を向けて、また続ける。

「クソみたいな前世だったわ。生まれ変わってもご覧の通り、ゴミ箱みたいな家に生まれてマズイ飯の毎日よ。だからあたしは目指すの。ルーンナイトを。富と名誉を手に入れて、イイ男をモノにして、名前を残してやるのっ！　女だからなんて、誰にもバカにさせやしない。そんな奴は叩き斬ってやるわ！！」

しばし静寂が僕らを包み込み、川原に立ち尽くした。優しいそよ風が僕の頬をなで、ロッテの赤い髪を揺らす。ふいに、背後で物音がした。

振り返り絶句する。白い体色の四足獣が汚いよだれを垂らし、赤い双眸で僕らを品定めしていた。おそらく、『どちらがうまいか』。

姉達から話だけは聞いていたが、実際に目にするのは初めての事だった。

――『異形（いぎょう）』。この世界において人間の天敵ともいえる生物……『異形』。姿形は様々で、共通しているのは白い体色に赤い双眸を持つという事。

そもそもルーンとは彼ら『異形』を狩る為に体系付けられた技術で、もともとは戦闘技術だ。それを家庭でも便利に使えるようした物が一般的な物なのだが、騎士達は戦闘特化されたルーンを学び、

それを練磨し各々の個性に合わせて仕上げる。

僕の使える子供の遊びとはワケが違う。その子供の遊びが目の前の敵に通用するか――。考えるまでも無い。

「ロッテ、逃げろ！」

僕は背中を向けたままのロッテの手を掴み、一目散に走り出した。

「ちょっと、何？　愛の逃避行？　あたし、年上が好みなんだけど」

「後ろだよ、ヤバイのがいるんだ。逃げないと仲良くあいつの口の中でミンチだ！」

しかし、子供の脚力で逃げ切れるはずも無く、あっさりと追いつかれてしまう。

僕は舌打ちをすると、意を決した。

意識を集中する。燃え盛る火をイメージして、ルーンを唱える。右の手の平にブワっと自転車の前輪くらいの大きさの火が宿る。

昨日よりも、大きい炎。周囲には陽炎が浮かび、ロッテが熱さのあまり後ろに一歩後退する。

ヤツはそこを見逃さなかった。怖気づいたロッテを一直線に目指し、４本の足で駈ける。

勢いよく迫る捕食者に、尻餅をついて悲鳴をあげるロッテ。ロッテが危ない。僕は呼吸を整え、命を奪う決意を固める。

あいつを……焼き殺す。

僕はタイミングを見極め、右手を突き出した。

焦げた肉の臭いと、耳に残る断末魔。白い皮膚は跡形もなく焦げて、まずそうなバーベキューがそこに転がる。

「危なかった。ロッテ、大丈夫？」

「な、何なのよ、そのルーン？　おかしすぎよそれ！　あんた、前世で何があったの？」

僕は一呼吸置いて、ロッテの目を見た。

「地獄、かな」

ロッテはパンパンとスカートに付いた土を払い立ち上がると目を逸らし、川面に視線を移し、表情を後悔の色で染める。

「僕も、ルーンナイトになりたい。前みたいに、何もできずに死ぬより、力を身につけて守りたい」

小さな背中が少し揺れて、振り返る。

「あんたも私と同じなんだ……」

ロッテはまた悪ガキっぽく笑って右手を差し出した。

「ガビョウとか、仕込んでないよね？」

「仕込むか！　てか、この世界にはないでしょーがよ！　握手よ、握手！　友達になってやるのよ」

そっぽを向くロッテの右手をそっと握る。その感触に僕はロッテが本気でルーンナイトを目指しているのだと気が付いた。

とても女の子の手とは思えないくらい、デコボコでマメだらけだったからだ。

「わかった。友達だ。よろしく、ロッテ。僕はアルフレッド・エイドス。アルって呼んでよ」

この世界で始めてできた僕の友達。数年後、彼女は目標を果たし、女性初のルーンナイトとなる。

僕と敵同士になって。

五話　ウンメイノヒト

馬車に揺られること二時間。僕は家族に連れられ、隣の町へとやって来た。幸い、異形や盗賊に襲われることなく、無事にたどり着けた。

セレーナ姉さんが一番に馬車を飛び降りて、早く行こうと催促する。子供だなあ……。

「アルに早くおもちゃを買ってあげたいの！」

セレーナ姉さんは甘え上手だ。僕が生まれるまで長いこと末っ子をやっていたんだから、甘えるスキルが熟練している。僕をダシにするのはやめて欲しいが。

「セレーナ、走ったら転ぶわよ。ほら、アル。足元に気をつけて……そう、ゆっくりね」

フィーナ姉さんが先に下りて、僕の手を握ってくれた。ふいにフィーナ姉さんの後ろで派手な音と砂煙が巻き起こってみんな何事かと振り向く。

「いったあ～い」

セレーナ姉さんが何も無いところでずっこけていた。それを見てレイナ姉さんが豪快に笑い、父さんが頭を抱えた。今日は楽しいお出かけになりそうだ。

僕らは馬車を後にして町の中央通りを目指す。洋服屋に、レスト

ランに、ホテルに、本屋。武器屋なんてのもある。その中でも一際目を引いたのが『クレスト屋』だ。

文字通り、クレストという札を製造して販売しているのだが、このクレストというのが、ルーンを使うことが出来ない一般の人でも、ルーンを使えるようにする道具だ。

使えるといっても、用途は限られているし、威力その他はオリジナルであるルーンには遠く及ばない。ただし、誰にでも使えるという利点と、ルーン使用時の精神集中が不要な事から、ルーンを扱える人間でも何枚か所持しているらしい。

「アル、こっちだよお。ほら、おいで」

セレーナ姉さんに強引に手を引かれ、キレイな洋服が展示されている店に連れ込まれた。それからほどなくして、セレーナ姉さんの一人ファッションショーが始まり、暇を持て余した僕は、スキを見て店を飛び出した。

急いで飛び出したおかげで、人にぶつかってしまい、僕はハデに尻餅をついてしまった。

「ごめんなさい、僕、大丈夫？」

差し出された白くて細い右手。それを辿った先には、目鼻がくっきりと整った美しい女性。いや、少女か。立ち上がった僕よりも５０ｃｍ程背が高いので、大人だと勘違いしたのだが、彼女の身長は１６０ｃｍにとどくかどうかというくらいだ。

銀の髪は腰まで届き、エメラルドの様な瞳が僕を心配そうに見つ

めている。年齢はセレーナ姉さんと同じくらい。けれど、どことなく落ち着きがあって、出るトコも出てる。腰には剣を二本挿し、幼い顔立ちからは想像できないが、相当な腕を持っているのかもしれない。

「どこか、痛い？」

黙っていたのを、何か勘違いされたようで僕は慌てて弁解した。

「ううん、大丈夫だよ！」

「そう」

彼女は上品に微笑み、黒い外套を翻しその場を去ろうとした。

「あ、そうだ」

振り向いて、かがみこみ、僕の視線に合わせると、顔を近づける。

「この町に、左手が金色に光ってる人いるかな？」

「ううん、知らない。僕、ここじゃなくて隣の町に住んでるから」

「そう……ありがとう」

少女は残念そうに表情を曇らせ、消沈した。何だろう、彼氏でも探しているのだろうか？　僕は気になって聞いてみた。

「ねえ、その人、お姉ちゃんの彼氏？」

5歳のガキにこんなませた質問をされれば、ちょっと照れ隠しして、『ヤダ～そんなのじゃないわよ！』みたいなリアクションをするのだろうかと思っていたが、僕の予想は的を外れた。

「運命の人……かな」

ものすごくロマンチックな響きだ。けれども。その顔は恋に焦がれる乙女の顔ではなかった。僕は知っている。あの顔は復讐鬼の顔だ。

「ごめんね。私、その人を探して旅をしているの。名前は解らないんだけど、一部では『黄金のヴァンブレイス』って呼ばれてるわ。年齢も性別も解らない、ただ解っているのは左手に金色のヴァンブレイスを身に着けているという事だけ……って僕にこんな事話してもしょうがないね」

「お父さんに、聞いてみようか？」

「え？」

「僕のお父さん、この領地の領主だから、何か知ってるかも」

「本当！？」

「わ！？」

急に僕は両肩をつかまれ、驚いた。

「私はセイン・カウフ。お願い、あなたのお父様の所に案内して！」

六話　セイン・カウフ

セインさんが僕を見つめる。

「ウォルフおじ様がこの町に来ていたのね。よかったわ、ならあなたはアルフレッドちゃん？」

どうやら、僕の事や父、ウォルフの事を知っているようだ。それにしても、ちゃん付けはちょっとこそばゆいな。

「うん。アルフレッド・エイドスだよ。お姉ちゃんは、お父さんの知り合い？」

「ええ、私の家、カウフとあなたの家、エイドスは先代から付き合いがあるの。あなたのお父さんに助力を得ようとここまできたの」

「わかった、付いてきて、こっちだよ」

僕は店先で骨董品を品定めしていた父を見つけ、セインさんと引き合わせた。二人はなにやら、話し込み、時折父が深刻な顔をして頷き、セインさんが真剣な眼差しで何かを訴えていた。

「こら」

ポンと僕の後頭部に軽く握り拳が落とされ、慌てて振り向く。

「あ、セレーナ姉さん」

少しむくれた顔で、セレーナ姉さんが仁王立ちしていた。

「どこ行ってたのよ、心配したじゃない」

「ごめんなさい」

「もう、いいけどね。それよりアル。何か欲しいおもちゃはないの？　小難しい本ばっかり読んでないで、お外で友達と遊べるような物を何か買わなきゃね」

僕が家に引きこもって本ばかり読み、友達がまったくいない事を姉達は心配していたらしい。まあ、当然か。それにしても、おもちゃ……ね。ゲームやプラモデルがあるわけでもないし、物は限られてくるんだよな。

特に欲しい物があるわけでもないしな……けど、この様子じゃ何か選ばないと開放してくれそうにない。

「じゃあ、あれ」

僕は向かいの店の店頭に飾られていたクマのぬいぐるみを指差した。あれでいいや。適当に部屋の片隅にでも置いておこう。

「クマさんのぬいぐるみだね！　ちょっと男の子らしくないけど、かわいいし、いいね！　待ってて、お姉ちゃんが買ってきてあげるからね！」

そう言って背を向けるセレーナ姉さん、まるで我が事の様に嬉しそうにはしゃいで駆けていく。

「セレーナ、アルを連れて馬車に戻りなさい。緊急の用事が出来た、

すぐにここを発つぞ」

急ブレーキが掛かったようにピッタリと足を止めるセレーナ姉さん。ものすごく残念そうな顔で僕の手をつなぐと、とぼとぼと馬車に向かって歩き出した。

「ごめんね、アル。でも絶対買ってあげるから、しばらくの辛抱だからねっ」

力強く僕の手を握り直し、すさまじい勢いでつないだ手を上下にぶんぶん振る。別に気にしてはいないし、欲しくもなかったからなんとも思わないけど……。

馬車に戻るとすでにフィーナ姉さんとレイナ姉さんがいて、さらに何故かセインさんの姿もあった。

「あら、アルフレッドちゃん。私も馬車に同乗させてもらうことになったの。よろしくね」

そしてセインさんと僕ら家族を乗せた馬車が動き出す。車内は４人の少女達の笑い声でいっぱいになり、僕は居心地の悪さを感じ、目をつむって寝たフリをした。

いつしか、寝たフリのつもりが完全に寝入ってしまったらしく、全身に受けた衝撃で僕は最悪の目覚めを迎えた。

「な、何だ！？」

「アル、じっとしてて！　お姉ちゃんの側で静かにしていなさい」

「何が起こったの？」

僕の問いに、セレーナ姉さんが不安と恐怖で震えながら答える。

「盗賊よ、今、セインが外で戦っているの。あなたは絶対にここから出たらダメ！」

馬車の外に目を向ける。セインさんが二本の剣を抜き、構えていた。その視線の先には5人の男達がいる。

ボロキレの様な服と、ねっとりとした長い髪と汚い顔。そのどれもが黄色い歯をのぞかせ下品に笑っていた。得物は手入れの行き届いていない剣。

日の傾きかけた森の中で、殺し合いが始まる。初めて見る、人と人が命を奪い合う瞬間。

先に動いたのはセインさんだった。早い。有無を言わさず盗賊の一人を右の剣で腹を貫き、左足で後ろへ蹴り飛ばした。腹を貫かれた男は、噴水の様に飛沫（しぶき）をあげながら転がり落ち、生き物からモノへと変わる。

後は4人。4人はセインさんが何のためらいも無く仲間を殺す様子を見て、気を引き締め直したのか、やらしい笑みを消すとセインさんを包囲する。

今度は逆にセインさんが笑った。両手の剣をオーケストラの指揮者が持つ指揮棒の様に振るい、盗賊達の悲鳴が死のハーモーニーを奏でる。そして、辺りに散らばるのは盗賊達の死体のみとなった。

僕は息を飲んだ。その圧倒的な強さと、美しさに。いつしか日はすでに落ち、雲の間から顔を出した三日月がセインさんの横顔を美しく照らし出した。

ふいに、セレーナ姉さんが後ろから僕の肩を抱いた。

「セインはね、とっても強い子なの。カウフ家は王家を守る盾とも呼ばれていて、カウフ流双剣術は大陸で五指に入る最強の流派なのよ。あの子はカウフ家の当主の妹さんなんだけど……」

言葉を切って、窓から視線をそらして、また続ける。

「去年、賊に王家から授けられた宝剣を盗まれた上に、当主……セインのお兄様が殺されたの。それがきっかけでカウフ家はお家お取り潰しになってしまって……。セインはカウフ家の再興と、カタキを追っているのよ」

僕は悟った。もう、カウフ家は存在しないんだ。彼女の言う『黄金のヴァンブレイス』によって兄が殺され、財産もすべて奪われ残ったのは身一つ。

血にまみれた銀髪と美しい顔の少女が馬車に戻ってきたとき、僕はなんと声を掛けてよいものか迷った。

七話　クリカエサレルヒゲキ

朝日が部屋の窓から目に射し込み、僕は目覚めた。ベッドの中で軽く伸びをする。まず、左手を伸ばして次に右手を伸ばす。むにゅっという柔らかくて暖かい感触が右の手の甲に伝わる。

なんだろうこれ？　僕は右の手をグーからパーに変えてそれをまさぐる。今まで触ったことが無い不思議な物体だ。僕はそおっとその物体の正体を確かめるべく、枕の上で顔を９０度回転させた。

「――！！」

何故か僕のベッドにセインさんがいた。

じゃあ、僕の右手がふれているこれは何なのか？　何なんだろうね、これ……。

僕はセインさんのナイスなお山から、そっと手を離して再び状況を確認する。状況から考えて、セインさんが部屋を間違えたのだろう。まったく、おっちょこちょいな人だ。それにしても、いつまでもこの状態というのもなんだかマズイ気がする。

このまま部屋を出て行くべきだろうか？　それとも、ここで知らぬフリをして再びベッドに潜り込み、やり過ごすか。ベッドの上で考えていると、急にドアが開いて、フィーナ姉さんがやってきた。

「あら、アル。どうしたの？　わかった。怖い夢でも見たんでしょう。それでセインのベッドに潜り込んじゃったのね」

「え？」

部屋を見渡してようやく気が付く、ここは僕の部屋ではなく、隣の客間だった。

そうだ。部屋を間違えたのは僕だったのだ。

その後の朝食の時も、昼食の時も僕が起こした事件で食卓は盛り上がった。一生の不覚である。きっと１０年経っても言われるんだろうな。本人にも、家族にも。

「あれ？」

昼食を終えて、父と姉達がいないことに気が付く。さっきまではそこにいたはずなのに、もう姿が無い。使用人の一人に聞いてみても行き先を告げられなかったそうだ。

「アルフレッドちゃん」

セインさんが、腰をかがめ僕の視点に合わせて言う。

「私、これから少し町に出かけるね。夜には戻るから、もしおじ様達が帰ってきたら伝えておいてくれるかな？」

「うん、いってらっしゃい」

黒い外套を着込み、セインさんは出掛けてしまった。

僕は特ににやることもなかったので、自室に戻り、読書することにした。そして時は瞬く間に過ぎ去り、黄昏時を迎える。

馬車が表に止まる気配がして僕は部屋の窓から顔を出した。

「みんなで僕を除け者にするなんて……」

僕はちょっぴり家族達の悪口を心の中で呟くと、玄関へ向った。玄関を勢いよく飛び出して、門の外の馬車へと駆け寄る。しかし、一向に中から出てくる気配がない。

すでに馬車を降りてしまったのか。

そこに来て、僕の中に一つの答えが弾き出される。きっと僕を驚かすために隠れているんだ。セレーナ姉さんあたりならやりかねない。

僕はそっと馬車の窓を覗き込み、４つの人影を確認する。先手必勝。僕は思い切り馬車の扉を引いた。

――かい。赤い。赤くて赤くて赤い。ひたすらに赤い。そしてむせかえるような臭い。

車内は赤の世界だった。４人の家族は向かい合ったまま目を見開き、死んで、いた。

フィーナ姉さんも、レイナ姉さんも、セレーナ姉さんも、父さんも。みんな、死んでいた。そう、死んでいた。

フィーナ姉さんの金色の様なカーテンの長い髪は真っ赤。レイナ姉さんの勝気な顔は苦痛に歪んでる。セレーナ姉さんは最後まで抵抗したんだろう、損傷が激しかった。

父は生前の威厳を失い、それ以上を正視できない。僕をぶったその手も、頭をなでくれたその手も――動かない。

「何だよ、これ」

そう、搾り出すのがやっとだった。同時に、湧き上がるドス黒い感情と家族を失った虚無感。その時、僕をつき動かしたのはやはり、殺意だった。

車体を右の拳で思い切り殴りつける。その反動で扉によりかかっていた、セレーナ姉さんが地面に崩れ落ちた。セレーナ姉さんは何かを抱きかかえるようにして逝っていた。

そっと両腕の中のそれを取り出す。

ぬいぐるみだった。昨日、僕が適当に選んだクマのぬいぐるみだ。血だらけになったそれは、今もなお愛らしい目で僕を見ていた。首には手紙がくくりつけられており、それを開いて読んでみる。

『6歳のお誕生日おめでとう、私達のかわいいアルフレッド』

手紙の内容そのままのセリフが、ふいに僕の背後で発せられる。後ろを向くと、人がいた。

全身を赤いローブに身をまとい、表情はフードに隠れ、暗くてよく見えない。

『初めまして、アルフレッド・エイドス』

目の前の人物がそう言った。男のものとも女のものとも、若者とも老人とも判別できない声。体付きも、中肉中背でこれといった特徴は無い。ただし。

左手だけは違った。金色にきらきらと輝くそれは、一度目にしたら忘れることは無いだろう。

『私のプレゼントは気に入っていただけたかい？』

僕の体内の血液が沸騰するのがわかった。こいつだ。こいつがやったんだ。何のために？　そんなことどうでもいい！

意識を集中する。燃え盛る火をイメージして、ルーンを唱える。右の手の平にゴウっと学習机くらいの大きさの炎が宿る。

殺す。

こいつを、殺す。

僕は踏み込んだ、距離にしてたった3メートル。すぐに灰になる。燃えて燃えて燃え尽きろ！

右手を奴の腹に叩きつける。しかし――。炎は奴の体に触れた瞬間、まるで何事も無かったかのように消えてしまった。

「何で……？」

『……』

火がダメなら、他のでやる。僕は後退し少し距離を取った。

意識を集中する。吹き荒ぶ風をイメージして、ルーンを唱える。
僕の目の前を鋭いカマイタチが駆けてゆく。周りの木々をなぎ倒して、奴に迫る。

カマイタチは奴の目の前で打ち消された。

「何でだよ！」

ルーンが効かないのなら、物理的なダメージを与えるしかない。
僕は先ほどのカマイタチで倒れた木から、太目の枝を一本へし折り、構えた。

叩くんじゃない、突くんだ。あいつの目を。致命傷にはならないかもしれないけど、痛手になるはずだ。こんなまま……何もしないで引き下がれない！

再び僕は踏み込んだ。奴のフードで隠れた目を狙って右手の枝をレイピアの様に鋭く差し出す。

しかし、その前に僕は喉をつかまれ、おもちゃのように弄ばれる。

『お前の魂はイイ』

寒気がした。歓喜に満ちた狂気の声。ぐいっと顔を僕に近づけ囁く。

『お前は生かしてやる。お前の傷だらけの魂なら私を殺せるやもしれぬ』

何を言っているのか理解できない。

『必ず私を殺しに来い。私のかわいいアルフレッドぉ』

口元が醜くゆがみ、楽しそうにゲヒャゲヒャと笑い声をあげた。

「アルから離れろぉ！」

女の子の声がするのと同時、僕は奴の右手から解放され地面に崩れ落ちる。顔を上げて驚いた。

ロッテだった。ロッテが木の棒を構え、僕の前でまるで守るように立ちふさがっていた。

まずい。ロッテが……殺される。

「やめて、ロッテ。僕なんかほっといてよ！」

振り返りロッテはまたあの悪ガキっぽい笑顔を浮かべた。

「あたし達、友達じゃん」

ロッテは奴に向き直り、襲いかかろうとするがすでにそこに奴の姿はなかった。

「ちぇ、逃げられた～。命拾いしたわね、あのヘンタイフード」

「うん、命拾いしたよ……」

「それより、どうしたの、えらく散らかってるし、馬車がなんか…

…」

「近づくな！」

馬車に近づこうとしたロッテに僕は叫んだ。

「え、う、うん」

「あいつが、そうなんだ」

「え？　どうしたの、アル？」

「あいつが『黄金のヴァンブレイス』……。あいつは絶対に僕がこの手で……」

「ちょっと、アル。どこへ行くのよ！　お家は？」

「僕は、家を捨てる。もう、ここには何もないから」

「捨てるって、どこいくのよ！？　あたしと一緒にルーンナイトになるんじゃなかったの！？」

「そんなものはもう興味ない。守る人ももう、いないから」

「……あたし達、友達でしょ！！　友達を置いていくの！？」

「わかった」

僕の言葉にロッテは明るい笑顔を夜の闇に咲かせた。

「もう僕たちは友達じゃない。絶交だ」

僕の言葉はナイフの様に、夜の闇に咲いたロッテの笑顔を鋭く切り裂いた。

背後ですすり泣くロッテを後にして、僕は歩き出した。

こうして、僕の復讐の旅が始まった。

待っていろ、黄金のヴァンブレイス。いつか必ず僕がお前を……。

殺してやる。

八話　ハチネンノサイゲツ

一直線に駈ける。蹴り上げた砂埃を遥か後方に置き去りにして、僕は疾風の如く森の中を駈けた。腰に帯びた剣を抜き、目標に突き立てる。

鮮血。白い体色の双頭獣、グリセスと呼ばれるタイプの『異形』は片方の頭を潰され、苦痛でのた打ち回り、ギャアギャアと騒音を撒き散らす。

「うるさい奴だ」

僕は即座にもう片方の頭を首から切り落とし、命を絶った。横たわるグリセスの屍。それを確認するとその場を後にし、別の場所でグリセスを狩っていた師匠……セインさんと合流する。

相変わらずの腕だ。踊るように切り込み、瞬く間にグリセスの群れを駆逐する。息はまったくあがっていない。

「師匠。こっちの掃除は終わりました」

振り向き、肩口まで伸びた銀髪をなびかせると、明るい笑顔で僕に労(ねぎら)いの言葉をかける師匠。

「お疲れ様、アルちゃん」

その呼び方に僕は睥睨(へいげい)する。

「だから、ちゃん付けはやめてくださいってば。もう8年ですよ、

あれから」

そう、僕が復讐を決意して8年の歳月が過ぎ去った。僕は14歳になり、セインさんは23歳だ。家族を失ったあの日。僕はロッテと別れ、セインさんの元へ向かい彼女に事情を説明した。何も言わずに抱きしめられ、彼女は僕の『弟子にしてくれ』という申し出に深く頷き、僕らは旅に出た。

僕らは奴……黄金のヴァンブレイスの情報を集めながら各地を転々とし、用心棒まがいの仕事をして日銭を稼ぎ、腕を磨いてきたのだ。

剣の腕はまだ師匠には敵わないが、ルーンについては絶対の自信がついた。8年の歳月は復讐を原動力にして鍛錬に励んだから。

「あら、ごめんなさいね」

師匠は両手を胸の前で合わせ、ニコっと笑った。前言撤回……僕のルーンでもこの笑顔には敵わないだろう。

僕は苦笑し肩を空かせると、依頼主であるこの近くの村の村長に報告に向かった。

村に戻る途中、師匠がおもむろに口を開く。

「髪、伸びた所をみるとやっぱり姉弟ね。フィーナさんによく似てるわ」

僕は流れる小川の水面に映った自分の姿を見て、溜め息をついた。そして、思い出す。あの日の事を。

「僕は絶対に許しません。姉達の命を奪ったあいつを……」

「ええ。その為にも今は力を付けて、あいつの情報を集めることが必要よ。必ず私達の手であいつを……」

「はい」

そう答えたときだった。村から煙がもくもくと立ち上り、怒声や悲鳴の合唱が僕の耳を貫いた。

「何かしら？」

「お祭りってわけじゃなさそうですね……」

駆け足で村まで戻り、そこで僕らは目撃する。山賊らしき男達が家を焼き、奪った食料や酒を食い散らかし、村の男は殺され、若い娘は慰み者にされていた。

家畜は逃げ出し、畑は荒され、村人達の生活基盤は彼らによって破壊される。

悲鳴。また悲鳴。そして悲鳴。そこに混じる下卑（げひ）た笑い声。

「ひどいわね……」

「師匠。師匠は村長の身柄を確保してください。こいつらは、僕が」

師匠は頷き、駆け出す。が、途中で立ち止まり振り返って言った。

「気を付けるのよ、アルちゃん」

「僕なら心配ありません」

「そうじゃなくって……やりすぎないでね」

なんだそっちか。僕が頷くのを確認して師匠は村長の家へと再び駆け出す。その背中に一言。

「だから、ちゃん付けはやめてくださいってば」

改めて周囲を見渡し戦況を確認する。1，2，3，4……ざっと20人くらいか。女性に覆いかぶさろうとしていた粗末なモノをぶら下げる男の首をつかみ上げ、酒をガブガブ飲んでいたヒゲ面の盗賊に向かって放り投げる。

「何しやがる、てめえ！？　俺たちは泣く子も黙る山賊――」

テンプレセリフを吐いた男の股間を蹴り潰し、二度と悪さをできないようにする。途端、男は男の象徴たるモノを潰され、赤ん坊の様におぎゃあと泣いて動かなくなった。

「おい、お嬢ちゃん。泣いて謝ってお酌の一つでもすりゃ、許してやってもいいぜ～？　げひひ」

「僕は男だ。そんな趣味は無い」

酒瓶を持った男の顎を右足で砕き、小気味よい音が鳴って地面に伸びた。それを見た他の山賊がこちらに警戒を向ける。

僕は一つ息をして、言葉を放つ。

「死にたい奴から前に出ろ、僕が殺してやる」

九話　エモノ

僕の殺気に押され、全員が動かなくなった。まるで大地に根を生やしたように動こうとしない。村内はさっきまでの喧騒が嘘のように静まり返る。

「あ、相手はガキ一人じゃねえか！　行け、野郎ども！」

リーダー格らしき男が声を裏返して、周りの男達をけしかける。一人が前に出ると、また一人、また二人とこちらに向かってくる。赤信号は皆で渡れば怖くないという奴か。

「……お前からか？」

僕との距離が一番近い男に向けて、駆け出す。男は後ずさったが、リーダー格の男に尻を蹴られ、僕の前によろめきながらやってきた。剣を抜くまでもない。

腰を落とし、右肘を男のみぞおちに叩き込む。男はその場で腹を押さえて倒れた。

熱気を感じて前を見る。山賊の一人がルーンを唱え、野球のボールくらいの火をこちらに放った。ルーン使いがいたことは予想外だったが、問題ない。

すぐさま僕もルーンを唱える。小川の清流をイメージして、手の平から巨大な水柱を放つ。放たれた水柱は、火のルーンを飲み込み、そのまま男を数メートル先へと吹き飛ばす。

加減をしたが、それは相手に配慮しての事ではない。村への被害を最小限に抑えるためだ。奴らの様な悪にかける情けは無い。

「頭、ここは黄金のダンナに出てもらった方が……」

山賊の一人が頭、リーダー格の男になにやら耳打ちする。それを受けて頭も頷き、男達をまとめると引き上げて言った。『覚えてろよ！』と、これまたテンプレセリフを残して。

僕は肘を叩き込んだ男をつかみあげ、尋問を始める。

「アジトはどこだ？」

男は、顔を歪ませ僕をあざ笑った。

「へへ、頭悪いンで忘れちまったよ」

「そんな事は顔を見れば解る」

男の右の手首をつかみ、そこに握力を加える。男はみるみる脂汗を顔から垂れ流し、青い顔になった。

「アジトはどこだ？　早く言わないと折れるぞ」

もう少しで、折れる。腕が折れる痛みというのは、尋常な痛みではない。吐き気と熱と激痛、そして、腕を失う喪失感。それらを同時に味わうことになる。

「へ、へへ。教える、教えるよぉだから離してくれよぉ」

右腕を離すと男は僕の指跡が残った手首をさすり、口を開いた。
「村の裏山に少し大きめの洞窟があるんだよぉ。そこを3日くらい前から根城にしてるんだ」
「裏山か」
「けど、お前ぇ。死ぬぜ？」
「何？」
「俺たちには、心強い味方がいるんだよぉ。いひひひ」
男は狂ったように笑い出した。そしてその名を口にする。
「いひひ、伝説の殺し屋、黄金のヴァンブレイスだよぉ！」
男の顔面を蹴り上げて黙らせると、僕は空を見上げた。
「ようやく……ようやくか」
煙の上がっていた家々を水のルーンを使って鎮火させ、僕は裏山を目指し、歩き始める。
師匠には悪いが、あいつは僕の獲物だ。誰にも渡さない。絶対にこの手で奴を殺す。

十話　キリフダ

あの日の誓いを再び胸に裏山を登る。しばらく山道を歩いて、それをみつけた。

洞窟だ。入り口は3メートルくらいで、中を少し覗くと男だけの大所帯の為か、ゴミと少しすえた臭いがして軽く吐き気を感じる。清潔感とはあまりにもかけ離れ、生ゴミの日を思い出してしまい顔をしかめつつ、僕は外の空気を求め飛び出した。

さて、どうするか。このまま大地のルーンで地震を起こし、奴らを生き埋めにしてやるのがっ手っ取り早いが、あいつの面を拝みたい。

「おいおい、わざわざ殺されに来やがったぞ、このガキ、ひゃはは！　こっちから出向く手間が省けたってワケだ」

声のした方を振り返る。先ほどの頭とその後ろに30人ほどの山賊達。全員、剣や斧で武装している。

「お前ら、どうしてあの村を襲った？　一応理由くらい聞いてやる」

「あぁ？　楽しいからだよそりゃあ。最高だぜえ？　無抵抗な村人その1は、いい年こいてお漏らししながら、ガキみてえに四つん這いで逃げちまってよお。その背中についつい斧でグサっとやっちまったら。ぽっくりいきやがった。ありゃあ楽しかったなぁ、げひゃひゃひゃ！」

同時に山賊（クズ）どもの大合唱。

「村人その2は、抵抗したもんだから、目の前でそいつの母親を……げひゃ？」

斬った。右腕を失い、頭の時間は一瞬静止し、再び時間が流れ始めると滑稽な泣き声を上げ、赤い噴水となる。

「ひぎゃあああああああ！？　腕が、俺の腕が、な、ないいいいい！　おい、おいお前ら逃げるんじゃねええ、俺を助けろよぉぉ」

「もう一本、いっとくか？」

僕の問い掛けに頭はブルブルと涙をこぼしながら、『やめてくれ』と嘆願する。しかし、突然。苦痛から歪んだ笑みを振りまき、左手で後ろをさした。

「お、黄金のダンナぁ！　こいつだ！　俺たちをコケにした上に、俺の、俺の右腕をぉぉ」

振り返る。

8年前の記憶が鮮やかに蘇る。赤いローブ。顔はやはり、見えない。

「会いたかったぞ、黄金の……ヴァンブレイス！」

悪魔。山賊の一人がそう呟いた。指先を……僕に向けて。

知らないうちに僕は笑っていたのだろう。だが、本当の悪魔は目の前にいる。

「こいつを殺せばいいんだな？」

太い声で、奴……黄金のヴァンブレイスが頭に問いかけた。くすんだ金色の手甲に包まれた右手で僕を指差して。

「お前、逃げるなら今のうちだぞ。俺はあの伝説の殺し屋『黄金のヴァンブイレス』。謝るなら楽に殺して――」

「クククククク……」

例えるなら悪魔の笑い。もしくは、鬼の慟哭（どうこく）。

「こ、こいつ、何笑ってやがる。黄金のダンナ、早くぶっ殺して！」

「これが笑わずにいられるか。ようやく見つけたと思った運命の相手がこんなお粗末なニセモノじゃあ、笑うしかないだろう……」

意識を集中する。隆起する大地をイメージして、ルーンを唱える。鋭い土の槍が次々と地面から生え出て、瞬く間に山賊たちを串刺しにする。

「へぇ……。名前を騙るだけはあるんだな、いい仕事するじゃないか」

ニセモノは加減したとはいえ、僕のルーンを防いだ。それなりにできるらしい。

「や、やめろ！　俺はこいつらに頼まれただけであって、村の人間は一人も殺してない！　だから……」

しかし、技量差を実感したのか、尻餅を付いて動かない。

「そうだな」

「わ、わかってくれたか」

「そうだな」

「あ、ありがとう。もうこんな事からは手を引くよ、それじゃあ――」

ニセモノのローブをむんずとつかみ、洞窟の中に放り込む。

「奴の名を騙った時点でお前は罪人だ。お前には実験台になってもらう。この8年の集大成の」

意識を集中する。終わり無き苦痛と、凄惨な最後をイメージして、ルーンを唱える。僕の右手に黒い霧が立ち上り、周囲の鳥や獣は次々と僕の周りから猛スピードでかけ離れていく。

地水火風、そのいずれにも当てはまらない、僕だけのルーン。それは生と死を司る禁断の力。あいつを殺すために作り上げた切り札。

闇のルーン。

十一話　ヌルマユ

闇のルーンの発動。それを見たニセモノは叫ぶ。『やめろ！』、『来るな』、『許して』、『嫌だ』。拒絶、絶望、恐怖、謝罪。それらは闇のルーンにとってこの上ない特上のエサだ。右手に宿った闇は嬉しそうに波打つ。

闇のルーンは意志を持っている。まるで僕の負の感情を具現したように、敵の命を貪り、魂ごと食らう禍々しき存在。

その時ニセモノの目に何が映ったのか、僕には解らない。

闇を恐れたニセモノは火のルーンを唱え、僕に向かって火炎球を投げつける。だが、僕の右手に宿った闇がそれを喰らう。続いて、風のルーン。それによる突風もまた、闇が平らげる。まるでメインディッシュの前の前菜の様に。

僕はゆっくりと手の平をかざし、闇を操る。闇は瞬く間にニセモノへと迫り、我が子を抱く母の様に愛しく男を包み込む。そしてその中に一等星よりも眩く煌く光。魂を男から引きずり出す。

僕は右手に軽く握力を加える。闇も僕の手の動きに合わせ、光を包み込む。それだけだ。たったそれだけで、彼の魂は完全に破壊され、生物から生を奪い取り、『モノ』へと変える。

「成功だ……これなら、どんな奴が相手でも……」

変わり果てた男は、一言で言うなら抜け殻だ。肉体に外傷はなく、ある意味この世でもっとも残酷な殺し方とも言える。何せ、魂を壊

したのだから。

笑いが止まらない。如何に堅牢な鎧に身を包もうとも、如何に強かろうとも、如何に強力なルーンを扱おうとも、僕の前では無力。肉体ではなく、魂そのものにダメージを与える技。そしてルーンさえも無効化する攻防一体の武器。

これが闇のルーン。もっとも、僕自身まだこいつの力を１００％使いこなせているわけではないが。

異形を相手に実験を重ねてきた、それが今日。８年目にしてようやく完成をみた。１４歳の誕生日に贈られた、最高のプレゼントに僕は神に感謝する。

僕は喜びにうち振るえながらも、山賊達の屍を乗り越え、その場を後にした。

村に戻ると、入り口で師匠が怖い顔で仁王立ちしていた。

「アルちゃん。何か私に言うことがあるわよね？」

どうやら、すべてお見通しらしい。

「その様子だと、山賊達の用心棒だったアイツは外れだったのね？」

「……ええ」

「そう、よかったわ」

そのセリフと同時。僕の世界が揺れる。ぶたれたのだ。

「すみません、抜け駆けなんてマネして……」

僕はうつむいて、謝罪の言葉を口にした。当然か、師匠も僕と同じくらい黄金のヴァンブレイスを憎んでいるのだ。僕がヤツを殺した後、墓を掘り返してでももう一度殺そうとするだろう。

「そうじゃないわ」

空から一筋の雫が降った。一滴、もう一滴と。雲一つ無いはずなのに、雨が降り出した。そして、唐突に感じた人の温もりに僕は驚く。

「あなたは、私にとって家族なのよ？　この8年間、ずっとあなたの成長を見守ってきたんだから」

師匠が泣いていた。

「あいつの力を知っているでしょう？　絶対に一人で勝てる相手じゃないわ。ううん、二人がかりでも返り討ちに合うかもしれない」

『だから』と師匠は僕の顔を起こし、初めて出会ったあの日の様に僕と目線を合わせ、エメラルドの様な瞳から大粒の涙をこぼし、僕を見つめていた。

「だから絶対に、一人で無茶をしないで。あなたを死なせたくないから……でないと私、フィーナさん達にあの世で顔向けできない」

そうか、と僕は思い出す。この8年間の事を。ずっと一緒にいて、それがいつの間にか当たり前になっていて……怒られたり、褒めら

れたり、笑いあったりして、寝食を共にして……いつの間にか家族だった。

失って、また手に入れて、また失って。もういらないと思った。僕らは復讐者。互いに利用し合うだけだ。

……少なくとも僕は、6歳のあの日そう思っていた。下心しか無かった。あわよくば、師匠を犠牲にしてでも、と考えた事もある。けれど、師匠は違ったのだ。僕は自分が恥ずかしくなった。

「すみません。師匠」

熱いものがこぼれ落ちた。けれど、家族ごっこなんて所詮、ぬるま湯だ。憎しみの炎の前ではぬるすぎる。僕はそれでもあいつを許せないし、この憎しみの炎は決して消えることは無い。

けれども。

今だけはそのぬるま湯に浸かりたいと思った。今だけは……。

十二話　キレイナエガオ、キタナイエガオ

「この度はありがとうございます。グリセスだけではなく、山賊どもまで退治して頂いて……」

「気にしないでくれ。僕が勝手にやったことだ」

僕らは村長の家に招かれ、私室で村長と向かい合い、今回の件の報告をした。

「報酬の件ですが……その……」

「けっこうです」

師匠がピシャリと言い放つ。

「は？」

うわ、また始まった。

「いえ、お約束通りいただきます」

慌てて僕は即座に翻す。

「ちょっとアルちゃん！　困った人たちからお金を巻き上げるの！？」

「僕達もお金が無くて困った人たちなんです！」

師匠はお金に関して非常にいい加減だ。実は用心棒家業を始めてから、何度か無報酬のボランティアをした事がある。さらに致命的な事に、師匠はかなり金銭感覚がマヒしてる。

ボッタくられたり、孤児院に寄付したり、衝動買いしたり……その経験から財布は僕が預かることにしているのだ。

「で、ではお約束のグリセス討伐の報酬をお受け取りください」

「はい……確かに」

村長から報酬を受け取り、それをしっかりと勘定して確認する。師匠が隣で『ケチンボ』とか『守銭奴』とか何やら呟くが無視した。

「それと、ですな……もし、あなた方がよければでいいのですが」

「まだ何か？」

僕は鋭い目つきで村長を見据える。村長は萎縮して、『ひい』と年に似合わず可愛らしい悲鳴をあげた。金にならない事に興味はない。それが面倒ごとなら、なおの事。

「い、いえ。その……。先ほどの山賊の襲撃で、村の者が何人か犠牲になりまして……その者の中に、娘と二人で暮らしていた者がいたのです」

「それで？」

紙幣をうちわ代わりにして風を起こし、僕は涼を得る。傍目から見れば安い悪役だ。

「ええ。村は復興に追われ、とても子供の面倒をみている余裕がありません、そこで」

「私達がその子を引き取って養子にすればいいのね、お安い御用です！」

師匠が満面の笑みで答えた。いやいや……。

「師匠、子供一人養うのにいくらかかると思ってるんです？　僕らが生きていくだけでも精一杯なんですってば」

僕らを横目に、コホン。と一つ咳払いをして村長が続ける。

「この村から川沿いに2日ほど歩いたところにヴィーグと呼ばれるクレスト職人の街があるのですが、そこにその娘の父親の兄……伯父ですな。伯父夫婦に事情を説明して娘を預ってもらおうと思いまして」

「なるほど、ヴィーグまで僕らがその子を連れて行けばいいんですね？」

「はい」

「それくらいなら構いません。特に次の当てもなかったし」

「本当ですか？　いや、それはありがたい。リト、入っておいで！　旅の方がお前をヴィーグまで送り届けてくれるそうだ！　ああ、よかった」

その後の言葉を僕は聞き逃さなかった。小さな声だったが確かに聞こえたのだ。『これで厄介払いができる』、と。

この村長の気持ちも解らなくはない。この惨状から立ち直るには相当な時間と労力がかかるだろう。そんな時に子供の面倒など見ていられるはずもない。だが、気に入らないのも確かだ。

「失礼します……」

ドアを開けてそこから顔を出したのは、１０歳くらいの少女だった。少女は村長の後ろに隠れ、恥ずかしそうにこちらを見ている。

「よろしくね、リトちゃん」

師匠が微笑んで右手を差し出す。それにおそるおそる触れる少女の小さな右手。どことなく気弱そうな印象を受けた。

左右を赤いリボンで結った、肩口までの金髪。早い話がツインテール。ぱっちりした瞳が印象的な可愛らしい女の子だった。

「リト・アルバーブです……」

小さな声だったが、確かにそう聞こえた。少女、リトは僕の顔をじっと見つめ、笑った。まるで、失くしていたおもちゃがみつかった時のような無邪気な笑顔で。

「ん？」

けれどもすぐにその笑顔を引っ込めて、村長の後ろに隠れる。

「リトや。セインさんとアルフレッドさんだ。ヴィーグまでお前を送り届けてくれる事になった。この人たちの言うことをちゃんと聞いていい子にするんだぞ」

「はい、村長……」

リトはうつむいたままそう答える。

「出発はいつになさいますか？　できれば早くこの子を伯父夫婦の所に送ってやって欲しいのです。何せ、親を失ったばかり。寂しいでしょうからなあ」

笑わせる。村長の顔にはちゃんと書いてある。『さっさとここからいなくなれ』って。

確かに金にならない事は受けるつもりは無い。だが、親を失った子供のことなら話は別だ。それに、リトを村長（こいつ）から少しでも離したいと思った。

リトの顔にもちゃんと書いてある。『ここにいたくない』と。

「じゃあ、すぐにここを発ちましょう。まだ日が沈むまでには時間があるし、これ以上村人の方々にご迷惑をお掛けするわけにもいかないので」

「おお！　おおお、そうですか、よかったなあ、リト。さあさ、荷物はちゃんとまとめてあるな？　この手紙を持って伯父さんの所にお行き。そこで幸せに暮らすんだぞ」

村長は心底嬉しそうだった。よそ者と邪魔者を早々に追い出せて

さぞや胸がすっきりしたのだろう。こちらは腹が立って仕方がないが。

「師匠、行きましょう。僕らが長いことここにいると迷惑をかけるみたいです。村長さんのお仕事を邪魔しちゃ悪いですからね」

わざとらしく言い放つ。村長はそれを気にするでもなく、笑顔で僕らを見送った。笑顔にもキレイ、キタナイがあるのだと初めて知った瞬間だった。

村を出て数分。僕らは山道を歩いていた。リトを挟むように、師匠が右に、リトが真ん中に、僕が左に。

「……ありがとう」

唐突に、歩みを止めリトが誰ともなしにそう呟く。

「何がだ？」

僕はそう問いかける。

「村を、守ってくれて」

「いや……」

僕は、自分の気持ちに従っただけだ。それは正義感なんてキレイなモノじゃない。単純な殺意。許せないと思った。ただ、それだけ。

「当然の事をしただけだ」

偽らぬ気持ちを言葉にした。それが少女の耳にはどう聞こえたのか。少女の眼にはどう映ったのか。少女の心に何が芽生えたのか。僕には知り由もない。

少女は泣いていた。その涙の意味は解らない。きっと色んな意味があったのだと思う。彼女は解っているのだ。自分がどういう状況に置かれ、どういう扱いを受けているかを。

そっとその左手を優しく握り、手をつなぐ。

「ぁ……」

「僕はアルフレッド・エイドス。……アルだ。短い時間かもしれないけど、よろしくな、リト」

少女は笑う。そして太陽よりも眩しい笑顔で応えてくれた。

「うんっ」

僕らは三人で手をつなぎ、夕暮れの中を歩く。やがて夜が来て、野宿をすることになった。食事の用意をして、3人で輪になる。

「アルちゃん。また、山菜のスープ？」

「また、とは何ですか、またとは！　これだけリーズナブルで栄養満点の料理はないんですってば。文句言うなら食べなくてけっこうです！」

「はあい」

師匠はしぶしぶ承諾し、スープに口をつける。一体、どっちが子供なんだか。

「おかわりっ！」

リトはすっかり元気になり、早くも3杯目のおかわりをたいらげた所だった。

「お兄ちゃんって料理上手なんだねっ！」

「まあな」

それにしても、よく食べる子だ。これで4杯目なんだけど……。

「おかわりっ！」

育ち盛りだからな、仕方がないか。

「おかわりっ！」

13杯目のおかわりを申し出た彼女に僕は不安を覚える。食いすぎだろっ！！　何かで気を紛らわせないと、僕の分が無くなる！！

「あ！」

ちょうどいいところに野リスが目に入った。指先にパンくずを付けて、ちょいちょいとおびき寄せる。野リスはそれにつられて僕の指先にやってきた。

「ほら、リト。見てご覧。かわいいだろう？」

「かわいいっ！　リト、リスさん大好きっ！」

やっぱり女の子だなぁ。と僕は微笑ましく思った。

「焼いて食べたらおいしいもんねっ！」

そのセリフにブフっと水のルーンの如く口に含んだスープを、一直線に噴出した。

それを見て師匠が一言。

「あら、アルちゃん新しい遊び？　楽しそうね、私もやってみようっと」

僕は慌てて止める。

「師匠、乙女がそんなことしたらダメですってば！　リトも、リスさんを逃がしなさい！　かわいそうでしょ！」

これは当分たいくつしそうにないな、と僕は苦笑いして残りのスープに口をつけた。

十三話　ドウギョウシャ

翌朝。朝食の準備に取り掛かるため、リトに枯れ枝を集めるよう頼んでから師匠を起こす。ニ、三度顔をぺちぺち叩いてその上に、コップ一杯の水をスヤスヤと寝息を立てるその艶やかな唇の上に投下。……こうまでしても、起きない。

「アル兄ちゃん。これ、食べれるかなー？」

背後からリトの元気な声が響いて僕は振り返る。

「今度はなんだい？　野ウサギでも捕まえたの？」

そう言ってからリトの手元に目を向けると、視線が釘付けになる。クマ……かと思ったが、それはクマの様な大男だった。

「食べれない……と思うよ。失礼だけど、まずそうだし……」

男は気を失っているのか、リトに襟首をつかまれたまま、だらんとしている。旅人風の格好をしているが、全身スリ傷だらけで泥まみれ。おそらく、リトに引きずられてこうなったのだろうけど。

男を拾ってきた事にも驚いたが、クマのような大男を片手で引きずってきたリトにも驚いた。あの食欲の源はこのパワーか。

「ん……うぅ……」

男はうめき声をあげる。

「食い物を……たのむ」

袋からパンを取り出し、男に手渡すとパンはみるみると男の口に吸い寄せられ、消える。

「あー……。いや、死ぬかと思ったよ。やっぱ、いいオトコは早死にするのかねえ」

「はあ」

男は満足そうに空を見上げ一息つくと、自己紹介を始めた。

「俺はルヴェルド。ヴィーグへ旅の途中、路銀が底を付いちまって、飲まず食わずを気合で抑えてたんだが……この有様だ」

ルヴェルドは、あぐらをかき腕を組んでニヤッと笑う。年の頃は20代後半といったところで、無精ひげと眠たそうな目でこちらを見ている。……あまりいいオトコでは無い気がするが。

「僕はアルフレッドです。この子はリト。あっちで寝てるのが僕の師匠……セインです」

「そっか、アルフレッドくんよ。助かった助かった。おたく、将来俺に似ていいオトコになるぜ、絶対！」

こいつに似たら僕の将来はお先真っ暗だ。清々しい朝が一瞬でおじゃんになる。

ルヴェルドに暑苦しいほど接近されて、がっしりと握手。手を握ってすぐに気付く。――同業者だ。

おそらく、傭兵やら用心棒の類だろう。武器らしきものは何も持っていない所を見ると、素手で戦うタイプなのかもしれない。

「にしても、いい趣味してるねえ、おたく。巨乳の姉さんに、ツインテールの金髪ロリっ娘ねー。守備範囲の広いこと広いこと」

ニヒっといやらしい笑いを浮かべたルヴェルド。

「まあ、俺ぐらいいいオトコになりゃ、女も選び放題、向こうからよってくるってもんよ、ガハハ！　さあ、おいでお嬢ちゃん。俺の膝の上で旅の話でも聞かせてあげよう」

「いやだ、気持ち悪い」

リトは即答する。

「ふ、お嬢ちゃんにはまだ早すぎたかな。あと１０年もすりゃ、この魅力がわかるってもんさ」

ルヴェルドは両手を挙げ、肩を大げさに空かせた。

「ふぁー……あら？　アルちゃん、おはよぅ……。今日はなんだか、クマさんみたいにカワイイのね」

寝ぼけた師匠が、後ろからルヴェルドにむぎゅっと抱きついた。

「師匠、それは僕じゃありませんってば。川で顔洗ってきてください、あと、軽くショックです……」

川を指差し、洗顔を促す。眠気まなこをこすりながら、寝癖のついた髪をゆらし、師匠はこの場を去っていった。

「な、大人の女にゃ、いいオトコが解るんだよ」

鼻の下を伸ばしたいいオトコは左目を閉じ、右目を開けて僕にウィンクした。

ルヴェルドと僕らは目指す場所が同じであることから、一緒に旅をする事にした。どうしても、とルヴェルドがすがり付いて泣きじゃくるので、仕方なく、だ。

師匠とリトが手をつなぎ、前を歩いているのを眺めながら、ルヴェルドは口を開く。

「しっかし。かわいいなーリトたんは。ありゃ将来、美人ちゃんになるなー。まああのままでも俺のストライクゾーンなんだけどさ」

「ロリコン……ですか」

今度からリトをこの男に近づけさせないようにしよう。

「いいオトコの前に、年の差、身分の差は関係ないのさ。もちろん、性別もな」

僕に振り向き、片手で頬を触られる。途端、全身に寒気が走った。

「うそよ、うそ！　いいオトコは男に興味ないの。冗談よ」

「本当でしょうね？」

「本当だとも。いいオトコは嘘付かない、それと――」

急に走り出すルヴェルド。そして、リトに後ろから抱きつき、押し倒した。

「な、何してんですか！」

言葉と同時、リトがさっきまでいた位置を異形の鋭い牙が横切った。

そして、すぐさま四足獣タイプの異形が、数匹木々の影から姿を現す。あれは『バウ』と呼ばれるタイプで、５歳の時に僕とロッテが襲われた奴だ。

「おい、アルちゃんよ。飯のお礼だ。ここは俺に任せて、お嬢さん方と一緒に下がってろ」

ルヴェルドはルーンを唱え、地面に腕をめり込ませる。そして、一気にその腕を引き抜いた先には、石でできた巨大なハルバードがあった。

ルーンにはあんな使い方もあるのか。

バウの群れは引き寄せられるようにルヴェルドの周りを取り囲む。

「お前ら、夜の俺が相手じゃなくって良かったなあ。けど、昼間の俺もそこそこ激しいぜ？　全身全霊で愛してやるよ」

十四話　クレストメーカー

ルヴェルドが一歩踏み出し、巨大なハルバードを右手で軽々と振るう。

一瞬で数匹のバウの首が宙に飛び、大地に横たわる。だが、それに怯むことなく背後に回りこんだ一匹のバウが、ルヴェルドの右足に噛み付いた。

「おおうっと。残念。そこは俺の性感帯。むしろキモチいいわな」

ルヴェルドは噛まれているにもかかわらず、左手で噛み付いたままのバウの首をつかみ、遠慮なくひねり潰すと、引き剥がし、地面に放り投げる。

「おいおい、もっと情熱的に来いよ。お前らの愛はそんなもんか？しゃあない、俺のテクでさっさと逝かせてやるか」

なんというか、ルヴェルドは強いのだけど……リトの教育上好ましくない単語がいっぱい飛び交っている。

「ルヴェルドさんのテク……どんなものなのかしら、一度見てみたいわ」

「師匠、それ絶対本人の前で言わないでくださいね」

「あら、どうして？」

疑問符を一杯頭上に浮かべて師匠が無垢な瞳で僕を見つめる。

「どうしてもですってば！」

そんなやりとりをしている間に、ルヴェルドは残りのバウを一薙ぎして一掃する。右手のハルバードを手放すと土の塊となり、大地に還った。

僕はルヴェルドに歩み寄り、労をねぎらう。

「強いんですね。ちょっと……以外でした」

少し皮肉を込めて言ったのだが、ルヴェルドは僕の言葉を気にせず、豪快に笑い飛ばした。

「いいオトコは強い。これ、絶対条件な」

「はあ」

「気持ち悪いおじさん、助けてくれてありがとう！」

リトのお礼の言葉にルヴェルドは少し顔をしかめる。

「リトたん、せめて『気持ち悪い』は抜いてくんない？　俺、まだ２６だけど『おじさん』はガマンするからさあ」

リトはしばし、熟考して考える。

「じゃあ、クソジジイ？」

満開の笑顔で無邪気にばっさりとルヴェルドを切り捨てたリト。

「１０代女子って怖いぜ、２０代後半のヤロウはジジイ扱いか……」

ルヴェルドは、がっくり肩を落としてとぼとぼと歩き出し、僕らは再び旅を再開する。

その日の夜。再び野宿となり、僕らは夕食の準備に取り掛かった。

「アルちゃん。ルーン使って火を起こしてくれる？」

「はい」

師匠に言われ、焚き木に火を付けようとするが、リトがそれを遮る。

「リトがやるよー」

リトはスカートのポケットから、黄色い札……クレストを取り出す。

「おいおい、リトたん、このクレストけっこう値打ちもんだぜ。紙質もインクの質も、ルーンの精度も超１級だ。こんなもんどこで手に入れたんだ？」

クレストは、一般的によく使われる消耗品だが、等級が存在する。一般家庭で使われる５級と４級。業務用の３級。武器としても使用可能な２級。戦術兵器としての１級。

そして、戦略兵器クラスの威力を誇る超１級。

ルヴェルドの目が確かなら、リトはとんでもない物で火を起こそうとしている。

「リト、それはダメ！」

慌ててリトからクレストを奪い取り、事なきを得る。それにしても、一体何でこんな物騒なものをリトが……？

「リト、これどうしたの？　民間人じゃ入手不可能なレベルのクレストだよ？」

リトはにっこりと笑顔でポケットをまさぐり、同じ物を５つ取り出して言った。

「リトが作ったの！」

「え」

僕はしばし呆然とする。

「これだけの質のクレストを売れば、けっこうな額になるぜ？　リトたん、一生俺についてきな、俺と商売始めて一山当てようぜ！」

「うるさいよ、筋肉ダルマ」

またまた満開の笑顔で、無邪気にばっさりとルヴェルドを切り捨てたリト。

「ふ、それは褒め言葉と受け取っておくぜ。いいオトコは常に前向きなんだ」

涙目になって、その場から駆け足で『うわ～ん』と声を上げて去っていくルヴェルド。案外精神的にモロい人なのかもしれない。

「リトちゃんはクレストメーカーだったのね。えらいわね～」

師匠がリトを抱きしめてなでなでする。リトは嬉しそうにそれに従う。

ちなみにクレストメーカーとは、クレストを製造する職人の事を指して言う。今向かっているヴィーグもクレストメーカーの街だ。ルーンを文字として札に書き込むので、当然ルーンが使える事が前提となる。それを考えれば、リトのルーンの才能はかなりのものだ。もしかすると、彼女も僕やロッテと同じなのかもしれない。

「リトのお父さん、クレストメーカーだったの。でも、仕事中に事故にあって……それで、お母さんの実家に引っ越して畑仕事をしていたの」

「そっか……」

「でも、お母さん、病気で……お父さんも、山賊に……」

リトの瞳から大粒の涙がこぼれた。明るく振舞っていたが、父親の死からまだ立ち直れていないんだろう。

師匠はリトをそっと抱きしめ、髪を優しくなでる。僕はその場を師匠に任せ、ルヴェルドを探しに出かけた。

十五話　アイジョウノウラガエシ

しばらくして歩き回って、すぐに見つかった。ルヴェルドは川辺で無表情のまま月を見上げ、どこからか取ってきたのか木の実にかじりついていた。

「ルヴェルドさん」

「おう、アルちゃん。どした、俺の胸が恋しくなったの？　俺の胸はいつでも空いてるから、飛び込んできていいんだぜ？」

やっぱりこの人はそっちの気があるんじゃないだろうか？　僕は無言でルヴェルドの隣に立ち、同じ様に月を見上げる。

「リトたん、すげーよなあ。大したルーンの才能だわ、ありゃ。今の内にもっと仲良くなって、唾付けとなくちゃな～、ガハハ！」

「絶対無理だと思いますけど」

「……なんか俺の扱いひどくない？」

「普通ですよ、たぶん」

「あらそう」

「そういえば、戦いの最中。愛がどうのって言ってますけど、それも含めてあんまりヘンな事を、リトの前で言わないでもらえますか？」

「ああ、そりゃそうだわな。気ぃつけるわ」

「でも、何で愛がどうこうとか言うんです？」

「愛情の裏返しって何だ？」

「……憎しみ、ですか？」

「そう、それよ」

月を見上げるのをやめ、視線を下に落とし、ルヴェルドは暗くなった川面をみつめていた。

「まだ俺がガキのころ、頭ん中にゃそれしかなかったのよ。ちっとワケアリでな、どうしても許せない奴が一人いたんだわ。そいつはルーンも効かないバケモノみたいな奴でよ、赤いローブに身を包んだ、金に輝く左手の殺し屋」

「黄金のヴァンブレイス……」

「そうそうそれそれ。その黄金のなんたらには、一言では言い表せ無い位の借りがあるのよ。んで、ついにある時俺は、数人の仲間とあいつを追い詰めることに成功した。俺は気が狂うほど笑ったさ。そして、数人で殺しにかかった。結果――」

ルヴェルドはズボンの裾を上げ、右足をさらけだすと上着を脱ぎ、右腕を見せた。

「この有様」

義手と義足。それらは夜の闇で冷たく輝き、金属製であることがわかる。

「その、仲間の人たちは？」

「死んだ、俺が先走りすぎたせいで、全員、な」

ルヴェルドは裾を戻し、上着を羽織るとまた続ける。

「憎しみっていう感情が俺の理性を狂わせた。だから、俺は逆に考えることにしたのよ。愛情の裏返しが憎しみなら、憎しみの裏返しは愛情だろ？　俺は愛することにしたのさ、全ての敵を。自分の中の激情（バカ）を抑えるために。これ以上何も失わないために」

そして背を向け、歩き出し別れ際にこう言った。

「アルちゃんよ。お前の目はガキの頃の俺と同じだ。お前さんの過去に首を突っ込む気は無いが、覚えとけよ。お前もいつか俺と同じ道をたどる。何も失いたくなかったら、何も持つな。それでもお前が仲間を持つことと復讐の両方を願うなら、負の感情だけで戦うな、もっと周りを頼れ。以上、いいオトコのアドバイス。先に戻ってるわ」

川辺に一人取り残され、僕を静寂が包む。リトも、ルヴェルドも、それぞれ心に色々な物を抱えている。師匠も、僕だってそうだ。人間って奴は単純じゃない。改めてそう思う。

ルヴェルドも黄金のヴァンブレイスを追っていた。だが、負の感情だけで戦うなと言う。けど。

「僕は違う。僕には闇のルーンがある。この力なら、絶対に黄金のヴァンブレイスを殺せる。だから、僕は違うんだ」

負の感情は力だ。絶対に何も失うことなく、復讐を遂げてみせる。僕は心にそう決めると、皆のいる場所へと歩いて行った……仲間の元へと。

十六話　ダイナナセキ（前書き）

登場人物紹介

アルフレッド・エイドス

主人公。１４歳。前世で家族を皆殺しにされ、転生する。
その凄惨な事件は、彼の魂を深く傷付け途方も無いルーンの才能を得る事になった。しばらくは、転生先の新しい家族に愛され、幸せに過ごすが
『黄金のヴァンブレイス』に家族を皆殺しにされ、再び大切なモノを失う。
８年の歳月をセインと供に過ごし、剣術とルーンの技術を向上させ、ついには
その才能と、復讐心から地水火風以外の属性。闇のルーンを開発する。
生と死を司る禁断の力で、アルは復讐を成すことが出来るだろうか。

セイン・カウフ

２３歳。王家を守る盾、カウフ家の令嬢であったが、当主である兄を『黄金のヴァンブレイス』に殺され、王家から授けられた宝剣を盗まれたこと
で、カウフ家は取り潰しとなった。身一つになった彼女は単身、復讐をなそうとしていたが、幼いアルと出会うことになり、彼が家族を殺されて以降は時間を供に過ごしてきた。金銭感覚がマヒしており、けっこうな天然ちゃんである。
巨乳の姉さん（ルヴェルド談）

リト・アルバーブ

１１歳。山賊に父親を殺され、アル達とヴィーグを目指すことになった。
大食らいで、毒舌家であり。ルヴェルドには容赦ない。
父親からクレスト製造技術を受け継いでおり、クレストメーカーとしての才能は
戦略兵器レベルの超１級品クレストを作り出してしまうほど。
金髪ツインテールのロリっ娘（ルヴェルド談）

十六話　ダイナナセキ

二日間の旅もようやく終わりが見え始めた。小高い丘の上から目的地が小さく目に飛び込んできて、リトは歓声をあげる。

ヴィーグ。仮初の旅の仲間である僕らにとって、共通の目的地であり、ゴール地点。そこで僕らの旅は終わり、リトは伯父夫婦との生活に。ルヴェルドはそこで仕事を探すのだろう。

そして僕はまた続ける。復讐の旅を。

「なんとか無事にここまで来れてよかったなあ」

遠くにそびえるヴィーグの街をまるで手の平につかむように、右手でぐっと握り締めるルヴェルド。

「いいオトコのおかげですかね」

「お、解ってるじゃないの。アルちゃんは～」

「ムダに食費がかさんだし、でかい図体が邪魔でしょうがなかったけどね！　早くいなくなればいいのに」

リトが笑顔でいいオトコを言葉のナイフで刺した。食費に関しては、リトのほうが圧迫してくれてるんだけど、デカイ図体に関しては僕も同意見だ。

涙目になったルヴェルドが、師匠に『胸の中で泣かせてくれ』と懇願し、師匠はそれを哀れに思ったのか、そっと優しくルヴェルド

を包み込んだ、が。

ボキバキという何かが折れたり、砕けた音がしてルヴェルドは師匠の腕の中で泡を吹いていた。あれが、天国と地獄を同時に味わうという事か。

動かなくなったルヴェルドを放置して僕らはヴィーグに向かった。

「おいおい、何か大切な物、忘れてんじゃねーか？」

いいオトコが息を切らして、ヴィーグの門前で追いついてくる。

「首、大丈夫ですか？」

「いいオトコは首が丈夫。下の首はもっと丈夫なのよ」

フフン。と鼻を鳴らし、下半身を少し前に出すルヴェルド。

「下の首ってなーに？」

リトが小首を傾げて尋ねてくる。

「ちょっと、ルヴェルドさん！　昨日言ったじゃないですか！」

「あーごめん、ごめん。変わりに俺が説明してやるから……リトたん、下の首っていうのはね、男のた――」

言い終わる前に、ルヴェルドの首に手刀を叩きこむ。『ま』というルヴェルドの声と、地面に崩れ落ちた時の音が同時に僕の耳に届く。

「リト、男の魂のことさ。ルヴェルドさんは心も体も頑丈だって事を言いたかったんだよ」

「そっかー、ルヴェルドってそれしか取柄なさそうだもんねっ！」

「そうそう、ルヴェルドさんはバカで頑丈だからねー」

視線を下に向けると、地面に崩れたルヴェルドの顔面あたりから、水溜りができた。泣いてるんだろうか？

「アルちゃん。兵士さん達が中に入ってもいいってー、ルヴェルド（そん）さん（なの）放っておいて中に入りましょー」

通行証を提示しに行った師匠が僕らを呼んだ。こういった、検問とか入退出のチェックはすべて師匠に行ってもらう。男の僕が行くより早く終わるからだ。ちょっと師匠がかがんだだけで、面倒な書類の記入も『自分達がやっておきます！』と言って、勤勉な兵士さんが自ら進んでやってくれるので助かる。

「行こうか、リト」

リトは大きく頷いて、いいオトコを踏みつけて師匠の元に走る。水溜りが少し大きくなった気がするが、僕はそれを気にせず大きな体を踏みつけて、二人の元へ向かった。

門をくぐり、ヴィーグの空気を肌に感じる。クレストの本場だけあって、クレスト屋が多く立ち並び、それ以外にも宿屋や食料品の店も活気に満ちていた。

しかし。

突然、その活気がかき消される。街の人々は急に道を開けて、整列し頭を下げだした。一体、何なんだろう？

「おいおい、もちっと頭下げとけって、睨まれるぞ」

背後に立ったルヴェルドが涙の痕を拭いて、僕の肩を叩く。

「何？　何か始まるの？」

「ルーンナイト様だよ。ほれ、向こう見てみ。馬に乗ってエラソーにしてるだろ？」

ルヴェルドの指先には、白馬に乗った王子……とは、程遠いタコみたいに禿た頭と、筋骨隆々としたゴリラみたいな男が馬にまたがって、こちらに向かってきていた。

「ルーンナイト第七席ガイザー・ドルベン。あいつに睨まれたら、ステキな思い出と一生消えない体の傷が、もれなく進呈されるぜ」

第七席。ルーンナイトは全員で7人いるから、あいつは最下位者ということか。

「お馬さんだー。かわいいー！」

リトが無邪気に白馬に乗った、たこ焼きに駆け出した。

「リト！」

たこ焼きは馬を急停止させ、不機嫌そのものの顔でリトを睨みつける。

「なんだ小娘。ワシの道を阻むのか？　ワシの道は陛下に続いておる。その道を阻むとは……おい、オルビア」

「は」

たこ焼きの隣に控えていた女騎士が、前に出る。年は僕と同じくらいで、黒い長髪が左半分を覆う形で伸びており、凛とした美しさがあった。

「槍をよこせ。ワシを邪魔する事は、陛下への反逆と同義。この場で殺してくれるわ」

「は？　しかし、彼女はまだ年端もいかない少女。そのような事は……」

「だまれえぃ！」

たこ焼き――ガイザーはオルビアと呼ばれた少女騎士から強引に槍を奪い、オルビアの腹を左足で蹴り飛ばす。

「あの『ルーインズの赤毛猿』のように、ワシに刃向かう愚か者は、すべて処分してくれるわ！」

こいつ、本気か？

ガイザーは馬を降り、リトの前まで来ると槍を振り下ろそうとした。

十七話　アノコロノエガオ（前書き）

登場人物紹介

ルヴェルド

２６歳。『自称いいオトコ』。
旅の傭兵で過去に『黄金のヴァンブレイス』に戦いを挑み、仲間と
右腕、右足を
失っている。ルーンで自然界の物質を武器化する技術を持っており、
たぶん強い。
がっちりとした体型とその巨躯から、粗野な印象を抱きがちだが、
涙腺が弱いのか
リトの言葉のナイフであっさりと傷付いて泣き出す男。

黄金のヴァンブレイス

年齢不明。性別不明。全てが謎の存在。
ルーンがまったく通用しないなど、戦闘力面に関しても謎。

十七話　アノコロノエガオ

意識を集中する。草原を走る疾風をイメージして、風のルーンを唱える。靴底に風を収束。音を置き去りにして疾駆する。ガイザーの槍がリトを貫く寸前、紙一重でリトを抱き締め、その切っ先は空を切った。

しかし、まずかった。実はこんなルーンの扱いをしたのは初めてで、力を制御できずリトを抱いたまま猛スピードで走ってしまい、慌てて減速の為前方に風を展開したが、停止できず、露店の一つに突っ込んでしまった。

派手な音とともに露店が崩れ去り、土煙の中でなんとか目を凝らす。

「痛……リト、大丈夫か？」

腕の中に収まったリトを見下ろして、怪我がないか確認する。

「リトは、大丈夫だよ……」

「そうか、よかっ――」

安堵したのも束の間、後ろから髪をつかまれ、後頭部に激痛が走った。僕は思い切り頭を振りぬきそこから脱し、リトを押し出すと、なるべく遠くへと離す。頭にちりちりとした痛みが残り、地面を見ると何本か髪が抜け落ちていた。

「小僧。肉体強化（ブースト）系のルーンを使うとは、なかなかやりおる。だが、

そんなことはどうでもいい。小娘を助けたということは、貴様も反逆者……仲良く処刑してやろう。あの世で二人仲良く暮らすがいい……！」

後ろを振り向き、それが目に入る。ガイザーはゆでダコの様に顔を真っ赤にし、ルーンを唱えている。右手に収束した風はこちらを完全に捉えていた。今ならば、かわせる。しかし――。

僕の後ろには何十人という街の人がいるのだ。ここでかわせば彼らに当たってしまう。こいつは正気なのか？

「小僧、こいつをかわしてみろ？　お前のせいで無関係な街の人間が何人か死ぬよなぁ？　ひゃははは！　動かない人間（まと）ほど面白いオモチャはねえよなああ！？　しっかり死ねよクソガキぃ！！」

これがルーンナイト？　これが国の誉れ？　僕はこんなモノに幼いころ一時でも憧れを抱いたのか？　反吐が出る。

おそらく、ここで反撃すれば本格的に国家反逆罪だ。そうなれば黄金のヴァンブレイスを探す旅はできなくなる。

それでも。

それでもだ。

人の命をオモチャにするような、こんなクズを生かしたままにはしておけない。……殺意が芽生えた。

意識を集中する。終わり無き苦痛と、凄惨な最後をイメージして、ルーンを唱える。闇のルーンで魂を……壊す。

「おおっとぉ、すみませんねえ。ルーンナイトの旦那ぁ。うちのツレが大変な粗相をしでかして！　おら、さっさと謝れこのクズが！」

僕の前にルヴェルドが躍り出て、いきなり僕をどついた。その拍子に尻餅を付き、闇のルーンの詠唱は妨害され、未発動に終わる。

「なんだ、貴様は……？」

「へへへへ、ルーンナイトの旦那ぁ。ここは俺の顔に免じて許してやってくださいよぉ。ね？」

「貴様の汚い面など……む？」

ガイザーはルヴェルドの顔を見るなり、ゆでダコの様な顔を真っ青にして、かぶりを振った。

「お前は……まさか……いや、あの男は死んだはずだ。お前があの男のはずが……」

「まーご覧の通り、どこにでもあるような顔じゃごぜーませんからねえ。お気に召したのなら、１０分でも１時間でも見つめてくださいよ」

「……興が削がれたわ。行くぞ、オルビア」

「は」

白馬にまたがり、ガイザーはその場を去っていった。しかし、オルビアはそれを追わず、僕の側に駆け寄ってきて手を差し伸べてく

れた。

「すまない、少年。我が主が迷惑をかけた」

僕はオルビアの手を取り、立ち上がり彼女の目を見る。本当に申し訳なさそうな顔をしているので、先ほどまでの怒気もどこかへ失せてしまった。

ふと、冷静になる。あの時僕がガイザーを殺していたら、他の皆はどうなっていただろうか？　ルヴェルドが間に入ってこなかったら？　頭に血が昇りすぎた事に僕は今更ながら気が付く。

「いや……部下のあんたがまともな人間でよかったよ」

「ガイザー様は、かなり虫の居所が悪いのだ。普段でも……ここまでは……本当にすまない」

「原因は、今年の選定会か……」

ルヴェルドが後ろから僕らの会話に割って入った。

「そうだ。ルーンナイトは1年に一度、その資質を再確認する為、実戦形式の試合が行われる……それが選定会。去年は第六席だったガイザー様は、君と同じくらいの年の子供に選定会で惨敗したのだ。それも、少女にな」

「王都じゃ有名だもんな。強い上に美少女。その上、品行方正、純真無垢となりゃ……都会の男共も放っておくはずもなく、今じゃ騎士団は若い男の入団希望者で溢れかえってるって話だぜ？　まあ、ちょっとしたアイドルだな」

「つまり、その美少女様に負けたんでご機嫌ナナメってわけか。いい迷惑だな、あのタコも、その美少女様も」

「ロッテ様は何も悪くない！　同じ女として尊敬しているからな。何せ、女性初のルーンナイトなのだ」

その名前は、どこかで聞き覚えがあった。あの悪ガキっぽい笑顔が脳裏に浮かぶ。

「下の……名前は？」

「確か、ルーインズだっけ？　ロッテ・ルーインズ卿。俺もお近づきになってみたいねえ、ほんと」

十八話　イイオトコ、カガヤクトキ

「ロッテ……そうか……」

僕は軽く驚いた。驚いたといっても、彼女がルーンナイトになったのが、ではない。品行方正、純真無垢という彼女に似つかわしくない四文字熟語のほうだ。

初対面の相手に、木の棒で殴りかかろうとするような彼女だ。都会の男は皆だまされているんだろう。それとも、この8年で彼女の中の何かが変わったのか。

いずれにせよ確認する手立ては今のところ無いが。

「ん？　アルちゃんお知り合い？　なら、ぜひとも紹介してくれよ。こんないいオトコと釣り合うの、ロッテ様くらいしかいないぜ？」

「いえ、赤の他人ですよ」

そうだ。あの日、僕は友達を失った。いや、捨てた。そこに後悔はない。

しかし、どうしてだろう？　まるで我が事の様に誇らしく、そして、とても嬉しかった。僕はまた、ロッテに会いたいのだろうか？

でも、きっと……今の僕らが街中で出会っても、おそらくお互い気付かないだろう。復讐という影の道を歩いてきた僕。ルーンナイトになるという、夢。光の道を歩いた彼女。

僕らは違いすぎる。だが、それでいい。だからこそ、あの日あの時あの場所で僕は、彼女を捨て、影の道を歩くことを決めたのだから。ロッテは光でいいんだ。明るく輝くのが似合う。

僕は復讐者。影に生き、ひっそりと死んでいくだろう。光はいらない。それで、いい。

「それにしても、少年。君……」

オルビアが僕の下半身の中央をまじまじと見つめ、右の太ももに手を添えて言った。

「とても、いいモノを持ってるな」

「は、はあ？」

そして頬を赤らめて口を開く。

「毎日、やっているのか？」

「え？　な、何を？」

「自分も毎日寝る前にやっている。昨日も同僚と下半身に力が入らなくなるまで励んだものだ。とても、情熱的で刺激的な夜だった」

オルビアの言葉に、ルヴェルドは『ヒュウ』と口笛を鳴らして、下品な笑顔を浮かべた。オルビアの爆弾発言で、さっきまでの感傷にひたっていた僕が弾け飛ぶ。

「え、えっと？」

「そうだ。今夜、自分は大丈夫な日なんだが、よければ一緒にどうだろうか？　大丈夫。初めての時は痛く感じるかもしれないが、自分に任せてくれ。終わった後はあっけないものだが、きっと君も満足できる時間を過ごすだろう」

「おいおい、そんな話。昼間から堂々と……いいオトコも絡ませてくれよ、な？」

「3人でやるのか？　むぅ……いいだろう。自分が上になる、少年は彼の下半身をおさえててくれ」

「え、いいの！？」

ルヴェルドが素っ頓狂な声を上げて、『わーいわーい』と子供のように辺りを駆け回った。

「ぼ、僕は遠慮するよ……。その……まだ、早いと思うから、その……そういう大人な事は」

「大人な事？　自分が初めて経験したのは5歳の時、父親となんだが、早いのだろうか？」

「ごごごごごご5歳！？」

なんて鬼畜親父だ！

「わかった、確か……ルヴェルド殿。だったな？　今夜はよろしく頼む。汗を大量にかくと思うから、タオルを忘れないでくれ」

「おうおう！　夜の俺に乞うご期待！　いいオトコの輝く瞬間を、今夜君は目撃する」

なんか、えらく格好をつけたルヴェルドが親指を立て、サムズアップした。

「いや、助かったよ。一人でやると味気ない上に張り合いがないんだ。同性に頼んでも、みんな断るからな。あんなに気持ちいいのに、なんでだろうな？」

「さ、さあ？」

「それでは、ルヴェルド殿。まずは、ウォーミングアップとして、ヴィーグを２０週走って、その後、広場で腕立て伏せ１００００回だ。それが終わったら、腹筋と背筋を５００００回。うさぎ飛びは足を痛めるから、スクワットにしようか？」

駆け回っていたルヴェルドが急に足を止め、『ギギ』という音を立てて、首を４５度回した。

「あの……それって？」

「決まっているだろう。筋トレだ。健全な魂は健全な肉体に宿る。筋肉はいいぞ？　迸（ほとばし）る汗を弾き、盛り上がる上腕二等筋。まるで巨大な大陸の様な、大胸筋。さながら、絶海断壁のような、大腿四頭筋。想像しただけでも、こう、胸が熱くならないか！？」

「え、ええと？」

オルビアは天を仰ぎ、何やら恍惚の表情を浮かべ、口からおつゆ

をこぼした。凛とした美しさは、どこへいったのか。

「は、いかんいかん！　職務中についついやってしまった。自分の悪いクセだな。筋肉の事になると、どうも周りが見えなくなってしまうらしい。それではルヴェルド殿。今夜８時に広場で！」

オルビアはガイザーを追いかけ、『筋肉ヤッホー！』と歓喜の声を上げて走って行った。……一体、何なんだあの子は。

「アルちゃん。一緒にどう？　いいオトコは楽しみも悲しみも、おすそわけする性分なのよね」

「夜に期待してますよ、しっかり輝いてきてください」

僕らは、口をあんぐり開けて救いの手を求めるルヴェルドをその場に残し、少し遅い昼食をとるため、食堂に向かった。

十九話　ムイチモン

小奇麗なレストランよりも、大衆的な食堂の方がいい。なんてったって、安くて早いからだ。この前のグリセス討伐の報酬だけで、数日やりくりしなければならないのだから、慎重にもなる。

昼をとうに過ぎたというのに、ヴィーグ中央広場に程近い、小さな食堂は未だ人で賑わっていた。木製のテーブルに４人で着き、豊富なメニューとにらめっこする。

「リト、リトは何にする？」

「んー」

リトはメニューを見て、考え込む。そしておもむろに口を開いて、僕の度肝を抜いた。

「これ、全部っ！」

成長期の女の子はこんなに食べるものだろうか？　リトは食堂の全メニューを注文して、『デザート何にしようかなぁ』と、闇のルーンよりも恐ろしい呪文を詠唱した。

「リトちゃん、もっとたくさん食べていいのよ。いっぱい食べて大きくなってね」

師匠が笑顔でそれを遮るでもなく、助長させる。そして、その隣の席には『幸運のかぼちゃ』という、なんとも胡散臭いアイテムが鎮座していた。

「……師匠、ちなみにそれ何なんですか？」

「よくぞ聞いてくれました！　アルちゃんはお目が高いわね。これは幸運のかぼちゃと言って、持ってるだけで幸せが舞い込んでくるありがたいかぼちゃなの！　これがあれば、きっと私達の周りの困った人達が幸せになるのよ。素晴らしいと思わない？」

「いくらしたんですか？」

じーっと師匠の目を見つめる。師匠は笑顔のまま固まった。

「いくらしたんですか？」

今度は目を細めて、凝視。顔から健康的ではない汗を垂れ流して、顔色もみるみる悪くなって行く。

「えへへ」

「その笑顔にはだまされません」

師匠はうつむいて、その値段を口にする。僕は世界が終わるような眩暈（めまい）に襲われた。なにせ、報酬の半分がこれでぶっ飛んだわけだ。

「ああ……いつも通りだな……ちょっと目を離したスキに……」

頭が痛くなってきた。

「でも、あの露店商さん、５０％引きしてくれたのよ？　いい買い物をしたと思わなくちゃ、ね！」

「師匠はだまされてるんですってば！」

とたんにしゅんと落ち込む師匠。

「まあまあ、こんな美人のねーちゃんいじめたら、罰(ばち)が当たるぜ？アルちゃんよ」

「それじゃあ、ルヴェルドさん。このかぼちゃ、引き取ってくれませんか？」

とたんにルヴェルドが顔を引きつらせ、あさっての方を向いて下手な口笛を吹いた。そして、目を合わせず小さな声で呟いた。

「アルちゃん。世の中金が全てじゃない。俺たちには愛があるじゃないか。生活が貧しくても、心まで貧しくなっちまうなんて悲しくないか？」

「お腹が減れば、悲しいでしょ。愛で腹がふくれるなら、世界中を愛で満たしてくださいよ、もっと現実見てください」

泣きたくなった。そして、ルヴェルドの顔を見てふと思い出す。

「そういえば……ガイザーと……知り合いだったんですか？」

「ん？」

「ほら、僕を止めたとき、ガイザーがルヴェルドさんの顔見て、なんだか驚いてましたけど」

「あまりにも不細工だから、驚いたんじゃないの？　リトなら、生まれてきた事を後悔しちゃうかもっ」

これは、もちろんリトの言葉（ナイフ）。

ルヴェルドの瞳がどんどん水分で満ちていく。

「まだそっちの、かぼちゃさんのほうがかっこいいよね！　世界が破滅してルヴェルドと二人きりになったとしも、リトはかぼちゃさんと結婚しちゃうかも」

いいオトコ＜かぼちゃ。その辛すぎる現実にルヴェルドは砕け散った。

「どうせ俺なんて、俺なんて……うううううう！　なんだ、このかぼちゃ！　こうしてやる！」

かぼちゃを持ち上げて、叩き潰すところを師匠が慌てて阻止するが、また力加減を間違えて、ルヴェルドの頭にかぼちゃがめり込んでしまった。

「あら、ほら見て見てリトちゃん。ルヴェルドさん、かぼちゃの国の王子さまみたい」

「……」

リトはフォークを持つ手の動きを止め、小さく呟く。

「アルお兄ちゃんより、かっこいいっ！」

僕くかぼちゃの国の王子様。僕も少し泣きたくなった。

そして、さらに追い打ちをかけるように手渡された食事代の領収書を見て、僕は気絶した。金額が幸運のかぼちゃと同額……つまり、たった一日で僕らは無一文になってしまったのだ。

二十話　ボクハカゲ

僕は気絶からなんとか立ち直ると、すっかりやせ細った財布を右手に、食堂から出た。そこで当初の目的、リトの伯父夫婦の家に向かうことになり、皆そろって歩き出す。

「リトの伯父さんって、どんな人なの？」

元気に隣を歩くリトに、質問。お腹いっぱいになってご機嫌なのか、満面の笑みで答えてくれた。

「んー、とっても優しいのっ！　いっぱいご飯食べさせてくれるから！　あ……ご飯のこと考えたら、またお腹空いてきちゃった……うー……アルお兄ちゃん、リト、あれ欲しいなあ」

リトはクルクルと直火で炙られている豚肉を指差して言った。まだ食べるのか、この子は。

「リト、僕もリトの伯父さんに早く会ってみたいよ！　さあ、ダッシュダッシュ！　伯父さんの家で何か食べさせてもらおう、ね？」

「うん、そうだねっ」

これ以上何も食わせるか！　颯爽（さっそう）と走るリトの後を追い、僕らは伯父夫婦の家にたどり着く。

正直な感想、驚いた。街でも一番大きな家だったからだ。リトの伯父さんは、一体何をしている人なんだろう？　驚いていた僕の顔を見て、リトは自慢げな顔で胸を張って、教えてくれた。

「リトの伯父さんね、ヴィーグのクレスト職人で一番偉いのっ！しょーぎょーくみあいのりじちょーなんだよ」

「ヴィーグ商業組合の理事長か。そら、いい伯父さん持ったな、リトたん」

「知っているんですか、ルヴェルドさん？」

「そらな。クレストはこの国の主産業の一つだ。この国、エルドアにとっちゃ外貨を稼ぐ、重要な物資だからな。エルドア産クレストは高品質で、どこの国でも高く取引される。んで。ヴィーグはエルドア最大のクレスト生産拠点だ。そこの商業組合の理事長ってことは、な？」

金持ちってわけか。

「リト！？　こんなところでどうしたの？」

「あ、カリンおねーちゃん！　久しぶり！」

門の向こうから、少女の驚いた声が聞こえてきて、リトはその声の主の元へ駆け寄った。

その声の主へ目を向ける。顔のつくりなどはリトに似ているが、頭髪は青く、髪はサイドテールで腰までである。リトがちょっとお姉さんになった感じか。

「あの、私達……」

師匠が少女、カリンに事情を説明し、僕らは中に通されることになった。

カリンは伯父夫婦の娘で、リトの従姉妹らしい。そのカリンの案内でリビングに通され、僕らはテーブルのイスに腰掛け、この家の主を待った。

ふと、向いに座るカリンと目が合う。軽く微笑んで、僕をやわらかく見つめる。ちょっと恥ずかしくなって、僕は目をそらした。まるで、お見合いの席のようだ。

「待たせたね」

扉の前には、リトの伯父夫婦が柔和な笑みを浮かべて立っていた。優しそうな空気を持っている、眼鏡の向こうの瞳がそれをすべて物語っていた。

「リト、こっちにいらっしゃい」

伯母さんがリトの手を引いて、部屋から退出したのを見届けると、テーブルに着いた伯父さんは口を開いた。

「君がアルフレッド君だね？　私はリトの伯父、シャイド・アルバーブだ。リトの話と、村長さんのお手紙で、君の事は聞いている。この度は、本当にありがとう……」

「え？　いえ……」

「手紙を読んだよ。弟は……残念だ。だが、あの子が無事だっただけでも本当によかった」

シャイドさんは涙ぐみ、大粒の涙が頬を伝いテーブルの上をそれが濡らす。そうだ。リトのお父さん、この人の弟さんは亡くなったんだ。

「君が弟の仇をとってくれたことも手紙には書いてあるよ。リトは、自分の父親が目の前で殺されるのを見てしまったらしい。その時、家から包丁を持ち出したリトは、君が仇の山賊を討ったのを見ていたのだそうだ」

「そうですか……」

リトは……あの時、あれを見ていたのか。

「リトが取り乱さずにここまでこれたのは、君のおかげだと私は思っている。目の前で弟の仇を討ってくれた君は、リトにとってとても大きな存在なんだろうね」

もし、8年前のあの日。黄金のヴァンブレイスを、僕より少し年上の少女が討っていたら……僕にとってその人は言葉で言い表せないくらい、偉大で輝いて見えたろう。光の様に……。

三日前の夕方。村を出た時のリトの『ありがとう』はそんなにも重かったのだと、今更ながら気が付いた。そして僕はそれに、『当然の事をしただけだ』と答えた。僕は軽い気持ちでその言葉を使ったが、リトの胸には重くのしかかったのだろう。

今ならば、あの時の涙の意味がわかる。リトにとって僕は……光だったのだ。

「君は旅をしていると聞いた。これを……報酬だと思って受け取ってくれないだろうか？　決して大きな額ではないが、せめてもの私の気持ちだ」

シャイドさんが取り出したのは、グリセス討伐の報酬の倍はあろうかという金額のお金だった。

「いえ、けっこうです」

僕はそれを手で制する。

「受け取れませんよ。そのお金。子供の養育ってお金がかかるものでしょう？　それは、リトに使ってあげてください」

「アルフレッド君……」

本当は、喉から手が出るほど欲しい。でも、受け取れない。

僕は決して光なんかじゃない。勘違いをされては……困る。僕は影。お金を受け取らないのは、それを戒めるため。

無論、リトのためというのも理由の一つではあるが、理由の一つでしかない。

僕は光にはなれない。なってはいけない。

「なら、せめてしばらくここに滞在していってくれないか？　今、君がリトの前から消えたら……あの子はきっと耐えられないだろう。しばらくでいい、もうしばらく、リトの側にいてやってくれ！」

シャイドさんが懸命に頭を下げるのを見て、僕は複雑な気持ちになった。本当はすぐにでもここを発つべきなんだろう。これ以上は情が移る。この数日、リトに振り回されてばかりだったけど、楽しくもあった。リトの笑顔は眩しい……僕にとってもリトは光。けれど駄目だ。光は影を食う。

影は光に食われ……その姿をいつか消す。駄目なんだ、姉さん達の仇を取るまでは……思い出せ、あの日を。姉さん達はどんな風に殺された？　どんな最後だった？　あいつは……どんな風に笑った？　思い出せ。

僕は立ち止まってはいけない。けれども……旅費がないのもまた事実だ。この街で仕事をしつつ、黄金のヴァンブレイスの情報を集める……その為には……。

「シャイドさん、お願いがあります」

二十一話　ハツコイ

起床。朝食。出勤。仕事。昼休憩。仕事。帰宅。夕食。就寝。

そのサイクルに慣れるのに、一週間ほどかかった。不規則かつ、不安定な生活をこれまで続けてきたので、規則正しい生活というのもかなり新鮮だったけれど。

「おかえりなさい、アルくん。今日はどうだった？」

夕方。家に帰り、庭で花に水をやっていたカリンが僕を出迎えてくれた。

「ようやく、なれ始めた……かな？　ちょっと肩がこるかも、あの仕事」

「おじさんみたいな事言うのね、アルくん。大丈夫よ。お父さんが『アルフレッド君はクレストメーカーの才能ある』って、べた褒めしてたんだから。すぐになれちゃうって！」

「はは……ありがとう」

「お腹空いたでしょう？　リトがテーブルに着いてるから、一緒に座って待っててて、私もこれ終わったらすぐに行くから！」

「うん、わかった」

家の中に入り、自分にあてがわれた部屋へと向かう。荷物を置いて、リビングへ。リビングの扉を開けると、行儀悪く足をブラブラ

させていたリトがイスを倒して、僕の元にやってくる。

「おかえりなさいっ！　アルお兄ちゃん！」

「ただいま、リト」

『おかえりなさい』、『ただいま』。長らく無縁だったその二つの単語に僕は、胸がしんみりとした。

僕は、クレストメーカー見習いとして、住み込みでシャイドさんの職場で働かせてもらう事にした。

シャイドさんからお金は受け取れない。けれど旅費を稼ぐために、仕事をしないといけない。シャイドさんの願い……リトの事も気がかりでもあった。でも、立ち止まってはいけない。

しばらく、この街で働いてリトの心が落ち着くまで、シャイドさんの家で供に過ごし、クレストメーカー見習いで得たお金を旅費に充てる。

これなら、クレストの製造技術も盗めるし、シャイドさんの職場には、地方や都会から来るお客さんもたくさんいるので、情報を得るにはうってつけだったからだ。

たくさんメリットはある。宿泊費もかからないし。これが今の僕の、答え。

「今日の夕食ね。リトもお手伝いしたんだよー。顎（あご）が砕けるくらいおいしいんだからっ！」

「あはは。そんなにおいしいんだ？　楽しみだよ、リトのお手伝いした料理」

顎……大丈夫かな？

リトは元気に明るく笑う。やはり眩しい、この子の笑顔は。

だから、ごめんリト。あと少ししたら、僕は行くよ。もう二度と会うことはないかもしれない。でも、君の事は忘れないからね。

心の中で、リトの眩しい笑顔に手を合わせ謝罪する。いつここを出るか。笑顔の裏で僕はここを発つ時のことを考えていた。『大丈夫、どこにも行かない』なんて、平然とウソを付きながら。

別れは告げない方がいい。後ろ髪を引かれる。突然いなくなる事にリトはどう思うだろうか？　もしかしたら僕を恨むかもしれない。むしろ、その方がいいのか。

その感情が生きる力になってくれれば、僕はいくらでも悪になる。リトが、元気でいてくれるなら。

「お待たせ、アルくん。セインさん、それこっちに置いてください」

「はーい」

カリンとエプロンドレス姿の師匠が、次々と料理をテーブルに乗せて行く。師匠はこの家でメイドさんとして働いている。中々……いい。僕の見立ては間違っていなかったようだ。

師匠もルーンを使えるので、一緒にクレストメーカー見習いをや

ってもよかったんだけど、昼間はリトの側にいてもらう事にした。この家のメイドをしてもらえば、仕事にもなるし、リトの側にいてもらえる。まさに一石二鳥だ。けれど、半分は僕の趣味だったっていうのは師匠には内緒。僕にとっては一石三鳥だったりする。

「ルヴェルド。ちゃんと生きてるかなー？」

「うーん、殺しても死なないから大丈夫だよ、きっと」

ルヴェルドは『仕事がある』といって一週間前に別れたままだ。その日の夜、中央広場で大きな男が『筋肉バンザイ！』と奇声をあげていたと小耳に挟んだが、おそらくいいオトコのことであろう。オルビアと何があったのだろうか。

ちなみにこの『怪人筋肉男』は、後にヴィーグの都市伝説として脈々と人々の間で語り継がれていく。

ほどなくして、シャイドさん達もテーブルに着き、料理と家族がそろった。

「じゃあ、みんなでいただこうか」

その言葉を皮切りに、電光石火のごとくフォークやスプーンがテーブルの上を飛び交う。テーブルの上には団体のお客さんでも来るのかと思うくらいの料理が並べられていた。

「おや、アルフレッド君。遠慮しないでいいんだよ？　もっと食べなさい」

「アルくんは男の子なんだから、もっと食べなきゃ、はい」

「このミートパイは、おばさんの得意料理なのよ。お口に合うといいのだけど」

「アルちゃんの大好きなパンケーキ、デザートに作ったの。黒く焦げちゃったけど、味は大丈夫だから、色々気にしちゃだめよ？」

「アルお兄ちゃん、これリトの作ったお料理だよっ！　たくさん食べて顎砕けてね！」

「いえ、僕は……」

大量に盛られた僕の皿。５人から一斉にそれぞれ料理を盛られて、僕の皿は無法地帯と化す。一番上に乗った黒い化石が師匠のパンケーキだろうか？　師匠が瞬きするコンマ何秒かの瞬間に、皿から排除せねば……命が危ない気がする。

シャイドさんが肉の塊を一瞬で葬り去り、カリンが魔法のように魚介スープを皿から消し、おばさんが数斤のパンを蹴散らした……アルバーブ家の面々は恐ろしいくらいのカロリーを摂取している。リトの食欲は遺伝だったのだろう。シャイドさんもカリンも、リトに負けない程の食料を平らげる。僕は顎が砕けそうになるくらい咀嚼（そしゃく）して、満腹感と供に夜の風を感じるため、庭に出た。

夜空に散りばめられた星を見上げ、重く息を吐く。あの一家の食事に付き合うと身が持たない。師匠はなぜかタメを張っているが、旅に出た時胃袋が大きくなっていたらと思うと、少し鬱（うつ）になった。

「アルくん。ここにいたんだ？」

振り返るとカリンがそこにいた。涼しげな眼差しで微笑んでいる。
「リトに聞いたんだけど……アルくんってさ……旅、してるんだよね、何で？」
「……人を探してるんだ」
だが、その返事はカリンの興味を引いてしまったらしい。
「え、なになに？　もしかして、恋人！？」
「……運命の人、かな」
あの日初めて師匠と僕が出会ったときの様に、師匠がそう言った様に、僕もカリンにそう言った。
「そう……なんだ」
カリンは少し、いたずらを咎められた子供のような顔をした。きっと、あの時の僕もこんな顔をしていたんだろう。
「じゃあ」
カリンは少し前に出て、僕との距離を縮める。
「旅が終わったら……どうするの？」
「え？」
終わったら、か……考えたことも無かった。

「……考えてなかったな……」

「それなら……」

もう一歩。カリンは前に出る。

「ここに、戻ってこない？」

「ここに？」

「うんっ」

カリンの笑顔が近くで咲いた。夜であるというのに、庭で咲き誇る花々よりも鮮やかに、力強く、眩しく、美しく咲き誇っている。僕は、その笑顔に一瞬心を奪われてしまう。僕の荒んだ心を包み込むかの様な、その笑顔。彼女もまた、誰かを照らす光か。

「お父さん、アルくんの事すごく気に入ってるの。注文が立て込んで忙しい時期だったけど、アルくんのおかげで納期、間に合いそうなんだって」

「そっか、役に立ててよかったよ」

「クレストメーカーとしての才能、すごくあると思う。だから、全部終わったらヴィーグに戻ってきなよ。私……待ってるから」

カリンの瞳が少し潤む。優しい風が吹いて、彼女の髪を少し揺らし僕は目を逸らした。僕の中に芽生えつつある感情を、ごまかすために。

全てが終わったら……ここで暮らすのも悪く無いかもしれない。なにより、僕の頭にさっきのカリンの笑顔が焼きついたまま離れない。

カリンの『待ってるから』は……どういう意味か？　いや、考えるのはやめよう。今の僕には、邪魔な感情だ。今は。

「そうだね、考えておくよ」

僕は、素っ気無く当たり障りのない返事をした。背を向けて、その場を去る。

「アルくん、おやすみ！　また、明日ね！」

「おやすみ、カリン。また明日」

灯りの無い、暗い部屋で僕はベッドの上に転がり、天井を見上げる。天井に浮かんでは消える、カリンの笑顔。それをかき消すため、まぶたを閉じる。また浮かんでは消える彼女の笑顔。

「カリン……」

生まれ変わって、初めての恋。１４歳の僕は、未来の僕に何を見出すだろうか。将来。全てが終わったら……どうする？　やりたい事は何？　なりたい職業は？　夢はある？

未来への不安と、初恋と……色々な感情がごちゃまぜになったまま、僕は次の日を迎えた。

二十二話　ソラノアクマ

次の日。午前中の仕事を終え、昼食にありつこうと外に出ようとした時。作業場の入り口でシャイドさんと誰かが言い争っている声が聞こえた。

「帰ってくれ！　もう話し合う事など無い！　ガイザー様にもそう伝えてくれ！　……お前達との関係もここまでだ」

「理事長……ガイザー様のお言葉、確かに伝えました。それでは、私はこれで」

騎士らしき男が、シャイドさんに背を向け帰ろうとするが、その背中にシャイドさんが怒鳴りつける。

「二度と来るな！　もう私は決めたんだ、お前達の事は陛下に包み隠さず全て暴露させてもらう！」

男が振り返り、冷たい視線をシャイドさんに向けた。

「……本気ですか？」

「本気だ……」

一瞬その視線にシャイドさんはたじろぐが、毅然とした態度で男と対峙する。

「いいでしょう。あなたの考えは解りました。……せいぜい後悔しなさい」

今度こそ男は去っていき、シャイドさんがその背中を怖い目でいつまでも睨み続けていた。一体何だったんだ？

「シャイドさん……？」

声をかけた瞬間、シャイドさんの背中が大きくのけ反り、驚いた顔でこちらに振り返った。しかし、それも一瞬の事で、すぐに平静を装っていつもの優しい瞳で僕を見る。

「ああ、アルフレッド君か。今日はもうあがっていいよ。ここ最近、よく頑張ってくれてるからね、午後と明日はお休みをあげるから、のんびりしなさい」

優しい笑顔。さっきまでの怒声も怒りに震えていた体も、どこにもその面影はなかった。

「はい、ありがとうございます」

「私はちょっと用事が出来たから、これで失礼するよ」

シャイドさんが作業場の奥に消えた後、僕はその場に立ち尽くした。シャイドさんは、何かを隠している……それが何かははっきりとは解らないが、悪いことの様な気がして、僕の胸にもやもやとしたものが残った。

「どしたよ、そんな落ち込んだ顔して、やっぱ俺がいないと寂しいか？」

ふいに、能天気な声をかけられて僕はその声の主に目を向けた。

「ルヴェルドさん……？」

「よ、いいオトコ参上。しばらくぶりねー、アルちゃん。ちょっと時間ある？」

「ええ、これからお昼ご飯に行こうかなって、思ってたところです」

「そっか、ちょうどいいや。この前皆で昼飯食った食堂にでも行くか。たまには俺がおごっちゃうよ？」

「え？」

「ちょっと臨時収入が入ったもんでね」

僕はルヴェルドと、リトが全メニューを平らげたあの食堂へと赴き、あの時と同じ席に着いた。今度は二人だけなので、少し寂しい気がする。

「ルヴェルドさん、何か動きがぎこちないですね？」

まるで、油の切れたロボットのように鈍重な動きのルヴェルドを見て、僕は尋ねてみた。

「筋肉痛なのよ……オルビアちゃん、ハンパない……」

オルビアとの筋トレは相当なもののようだ。一週間以上経ってまだこの状態とは……あの時断っておいてよかったと胸をなでおろす。

「それより、何か用だったんですか？」

「ん、そうそう。明日空いてる？　俺とデートでも、どうよ？」

ニカっと白い歯を見せて笑うルヴェルド。

「気持ち悪いんでけっこうです」

即答。やっぱり、この人はそっちの気があるんじゃないだろうか？

「じょ、冗談よ、冗談。実は、異形狩りの仕事が入ったんだけどさ。ちょーっと手を貸してほしいのよね。これがまた、空を飛んで厄介なヤツなんだわ。ああ、もちろんちゃんと分け前は払うぜ？」

「空を飛ぶ異形……もしかして、ガルダですか？」

「ん、それよそれ。ガルダちゃん。どうもそいつが最近、街を出てすぐの所に巣を作っちまったらしくてな。繁殖されたら厄介だし、その駆除が目的なわけ。セインちゃんも呼んで、３人で仲良く焼き鳥パーティーと洒落込もうじゃない」

空を飛ぶ異形、ガルダ。お目にかかったことは無いが、何度かその噂を耳にしたことがある。鳥のような姿を持ち、４枚の翼で上空から旅人を鋭いくちばしで突き刺し食らう、空の悪魔。そいつの巣が出来たとなれば、厄介な事になりそうだ。

少し体もなまっていた所だし。ちょうどいい。どうせ、休みをもらっても一日中寝てしまうだろうし。

「引き受けますよ、ルヴェルドさん。どうせ暇ですから」

「お！　そういうと思ってたよ、愛してるぜ、アルちゃん！」

この人に愛されたら、ようするにそれは憎まれたってことだろうか？

「あ、いや、言葉通りだぜ？　アルちゃんはいい子でかわゆいし」

言葉通りでも気持ち悪いんだけど……。

「ところでルヴェルドさん。ヴィーグについてもっと詳しく教えてくれませんか？　例えば、シャイド理事長の事とか」

「ん？　あー。そうな……。ヴィーグがエルドアのクレスト生産拠点ってのは、この前の授業で教えたよな？」

「はい」

そんな授業、受けた覚えは無いけど。

「この街はそれだけ重要な場所なわけだ。外敵からの脅威……異形やら、敵国の工作員から守るために、ルーンナイトがここの領主をやってる。ルーンナイトがここにいるってだけで敵の兵士は裸足で逃げ出しちまうもんさ」

「そのルーンナイトがガイザー、ですか」

「そ。ガイザーがここの領主になったのが5年前。今の理事長、シャイド・アルバーブが理事長になったのも5年前。偶然……かねえ？」

「においますね」

「え？　俺、臭い？　三日に一度は風呂はいってるんだけどなー」

毎日入れよ。

それにしても……ガイザーとシャイドさんは何か接点があるのだろうか？　さっきの会話の内容から察するにシャイドさんは何かをガイザーに強要されていた？

いや、何の情報も確証も無いまま考えていても、仕方が無いか。

「他には？」

「んー。あくまで噂なんだが……」

ルヴェルドは言葉を切り、周囲を警戒しひそひそと小声で僕に話す。

「1級品クレスト……戦術級のヤツをだな。ガイザーは国に黙って密造して、それを裏ルートで他国に売りさばいて私腹を肥やしてるっていう、噂があるんだが……おーっと。何の確証もない、ただの噂だぜ、真に受けんなよ？　俺が知ってるのはそれくらいだな、あとはアルちゃんのご想像にお任せするわ」

噂。しかし、火の無いところに煙は立たない。噂の中に真実もあるはずだ。

「そんじゃ、アルちゃん。明日の朝8時に街の門に集合。セインちゃんには俺から伝えとくから」

「わかりました」

その後、ルヴェルドと少し世間話をして昼食を終え、店の前で別れ僕は帰宅した。

廊下を歩いていると、カリンが前からやってきてばったりと出会う。

「あれ、アルくん？　お仕事、終わったの？」

「うん。午後と明日、休みをもらったんだ」

「そうなんだ……じゃあ、明日私がこの街を案内してあげようか？　まだ、この街の事あんまり知らないよね？」

カリンが満面の笑みでそう提案するが、どうすべきか迷った。

「ごめん……明日、他に用事があるんだ。悪いんだけど……」

僕のその一言でカリンはしゅんと落ち込む。……悪いことをしてしまったか。けれども、約束は守らなくてはいけない。ガルダを狩る事はこの街の人々の安全……引いてはカリンの為にもなるのだし。

ガルダを狩るのは早いほうがいい。けれど、カリンと街を歩く時間はまだこれからつくれるはずだ。

「街の外に、異形が巣を作ったらしいんだ。放っておいたら危険だから、明日狩る事になったんだよ。だから、ごめん……今度ちゃんと時間を作るから」

「そう……仕方ない、ね。私もその異形の話は知ってるから……。でも、アルくんが異形狩りなんて、危険じゃない？」

「僕の事は大丈夫。旅で鍛えてるから」

そう言って僕は右の力コブを見せ、笑顔を作る。

カリンもそれを見て、くすりと笑う。

「わかった、明日がんばってね」

「うん。任せて！」

僕は部屋に戻り、ベッドに寝転ぶといつの間にか寝入ってしまい、目を覚ますと夕食の時間になっていた。しかし、夕食の時間になってもシャイドさんは姿を見せることはなかった。

ガイザーとシャイドさんの接点。それは、もしかしたら触れてはいけない闇の部分だったのかもしれない。しかし、あくまで噂は噂なのか……。

ガイザー・ドルベン。あの男は危険だ。もし、噂が本当で、昼間の出来事がシャイドさんがガイザーと袂を分かつ為の宣言だったとしたら……。シャイドさんは……。

僕はベッドの上で昼間の出来事を思い出し、あれこれと推測してみたが、答えは出ない。答えが出たところでどうしようもない。子供の僕が出る幕じゃないのかもしれない。それに、シャイドさんは全てを暴露すると言っていた。

きっとシャイドさんが、自分自身でケリを付けるのだろう。今日はきっとガイザーと手を切る為の準備をしているのではないか？もし、僕に出来る事があるのなら……シャイドさんには仕事を教えてもらったし、衣食住も与えてくれた。

恩がある。短い間だったけど、家族だった。力に……なりたい。そこまで考えて、僕は重くなったまぶたを閉じ、眠りに落ちた。

翌日。

ルヴェルドと約束の時間が迫り、僕と師匠は家を出る。家の門を出ようとした時、カリンが僕を呼び止めた。

「アルくん、ちょっと待って！」

カリンは余程急いでいたのか、パジャマにカーディガンを羽織っただけのかっこうで息を切らして、玄関の前に立っていた。

「すみません師匠。先に行ってください。すぐに追いつきますから」

師匠には先に行ってもらい、カリンの元へ向かう。

「カリン、どうしたの？」

「これ、持って行って……お父さんみたいにうまくは作れなかったけど、きっとアルくんを守ってくれるから」

カリンが手にしていたのは黄色い札……クレストだった。

「これは？」

「守護のクレストだよ。一度だけ、衝撃から身を守ってくれるの。大地のルーンが刻まれていて、衝撃を感知するとクレストが硬い石に変化する仕組みなの」

「ありがとう、もしかしてこれ、カリンが？」

「うん。私もお父さんの手伝いで、クレストを作ったことがあるんだけど、あんまり才能ないから……うまくいかなくて」

カリンの目を見ると、少し充血していてまだ眠そうだった。徹夜してこれを作ったのか……。

「そういえば、伯父さんは？」

「帰ってきてない。けど、よくあるんだよ？　たいていお酒飲んでそのままお店で寝ちゃってるのがパターンだから、気にしなくていいよ」

帰ってきていない？　少し胸に不安が募るが僕はその不安を打ち消す。シャイドさんだって、大人の男だ。昨日、強気に出たのも、何か勝算があったからに違いない。

だから僕は、その不安を胸の奥にしまいこんでカリンに笑顔を見せた。

「行ってくるよ。大丈夫、ちゃんと退治してくるから。だから、カリンは待ってて。次の休みがもらえたら、僕に街を案内してよ」

「うん、今度は絶対だからね！」

「約束する」

カリンに笑顔で見送られ、僕は歩き出した。『行ってらっしゃい』、『行ってきます』その二つの言葉が僕らの間を飛び交った後に……。

二十三話　オルビア

街の門で僕と師匠を待っていたのは、ルヴェルドだけではなかった。

「おはよう、少年。今日は自分の依頼した仕事に同行してくれて助かる」

ルヴェルドの横で腕立て伏せをしていた少女騎士。オルビアがキラキラ光る汗を弾いて、爽やかに笑った。同じ汗でもルヴェルドのとはえらい違いだ。

「へっくし！　あー朝は冷えるなぁ。いや、誰かこのいいオトコの噂でもしてるな、こいつは？」

ルヴェルドがにへへと薄気味悪い笑みを浮かべる。

「ふう、こんなものか。朝は腕立て伏せに限るな！　見てくれ、このパンパンに張った大胸筋を！」

オルビアが胸当てを外し、僕に近寄り、胸を前に出す。……本人は大胸筋と言っているが、どこからどう見ても、女性のふくよかな胸だ。

「ふふ、少年。この筋肉、羨ましいだろう、触ってみるか？」

「は、はあ！？」

師匠ほどではないが、大きくて形もイイ。男のロマンがそこにあ

ると言っても過言ではない。

「遠慮しなくていいぞ。なんなら叩いてくれても構わない。叩いて筋繊維を断裂させ、筋肉痛を起こしてだな……」

オルビアの筋肉談義が始まり、やがて彼女は一人で違う世界に旅立った。

叩けと言われても……いや、叩きたいけども。むしろこっちが頼みたいくらいだが……。

『じゃあ俺が』とよだれを垂らしたルヴェルドが、その魔の手を未知のフロンティアへ伸ばそうとするが、オルビアはそれを拒み、逆にルヴェルドの胸に正拳を打ち込んだ。

「ルヴェルド殿。心地いいだろう、筋肉痛は？　あ、そうだ。今夜も一緒に熱く燃えようではないか！　この前のあれはすごかったぞ！　自分もさすがに壊れてしまうかと思うくらいの衝撃だった」

筋トレの話のはずなのに、何でこんなにエロく聞こえてしまうのだろうか？

「おっと、いかん。まただ……筋肉の話になると周りが見えなくなる……そこが自分のチャームポイントでもあるのだがな」

『ワハハ』と笑って胸当てを装着し、オルビアは騎士の顔になる。チャームポイントだったのか。

「さて、残念だが筋肉の話は置いておくとしよう」

別に残念ではないが。

「君達も知ってのとおり、ガルダの巣を叩き、討つ。民間人を守る事が騎士の仕事なのだが、今回はいかんせん相手が悪い。本来ならば君達も民間人。心苦しいのだが、ルーンを扱える騎士はヴィーグには自分とガイザー様しかいない」

「任せとけって。ガルダは仲良く四等分だ。皆でおいしくいただこうじゃないの」

ルヴェルドが舌なめずりして、獰猛な犬の様に吼える。僕なら迷わずダンボールに詰め込んで、雨の日に捨てるような犬の顔だ。

「うむ。存分に腕を振るってくれ。報酬は弾もう。場所はここから小一時間ほど歩いた森の中だ。気を付けてくれ、ヤツは獲物を見つけると空から襲ってくる。常に頭上に気を配るように」

「わかったわ」

僕と師匠は力強くそれに頷く。そして僕ら4人は街の門を出て、ここに来たときとは逆の方向の道を歩き、森を目指した。しばらく歩いて、目的地に到着する。

「これは……」

巣はもぬけの空だった。辺りには何の気配も無い。

「エサを調達しに行ったか？」

「エサ……って何を食べるんです、オルビアさん？」

「人間だ」

「まずいわね。被害が出ないうちに討伐しないと……」

「へっへっへっへ」

ルヴェルドが不敵に笑い、一同を見渡す。

「策ならあるぜ」

「ほう？　何だ、筋肉で釣るのか？」

筋肉から離れようよ。

「囮だよ。ガルダは若い女の肉が好物なんだ……」

そう言ってルヴェルドは師匠を見る。

「何だ、自分の筋肉ではダメなのか？」

オルビアが不服そうに顔をしかめる。

「あの、私ですか？」

「セインちゃん、服を脱げ」

ルヴェルドの顔が、下心一杯に笑う。

「いや、何で脱ぐ必要あるんです？　普通に歩いてるんじゃダメな

んですか？　別に反対ってわけじゃないんですけど」

反対しろ、僕！　師匠のピンチじゃないか！

「へ、考えてみろアルちゃん。目の前に裸のおねーちゃんがいたら、どうする？　俺なら迷わず突撃するね」

「いや、ガルダはあなたじゃないでしょ」

「なるほど、一理あるな」

オルビアが妙に納得した顔で頷く。

「筋肉を見たら食いつかずにはいられないだろう。悲しいかな、それが本能というものだ」

「いやいや、ガルダはあなたじゃないでしょ」

「決まりだな」

「え、そんなの師匠が承諾するわけ――」

ふと見れば師匠が上着のボタンを3つほど外し終わったところだった。

「ダメですってば、師匠！」

「だって、暑いんだもん。ちょうどいいかなーって」

「嫁入り前の若い娘が人前で素肌さらしちゃいけませんってば！」

「チ」

ルヴェルドが背後で舌打ちしたのが聞こえた。

「なら、自分の筋肉の見せ所か」

今度はオルビアが胸当てを外し、臨戦態勢になりつつあったのを僕は止める。

「チ」

ルヴェルドが背後で舌打ちしたのが聞こえた。いいオトコはくだらない所にやたら知恵が回るらしい。

ジト目でルヴェルドを睨むと、ふいに辺りが暗くなった。そして、頭上から何かが落ちる音が僕の耳に届く。

「師匠、オルビアさん、離れて！」

一瞬の事だ。僕のセリフが終わるか終わらないかの間にルヴェルドは、白い物の下敷きになった。２メートルほどの体長に４枚の翼。こいつが……空の悪魔、ガルダ。

「ルヴェルドさん！」

「なかなか……グルメじゃないの、ガルダちゃんってば。若い女よりいいオトコをご所望みたいだぜ？」

仰向けに倒れたルヴェルドに、鋭いくちばしが突き付けられ、ル

ヴェルドは右手……義手でそれを食い止める。そして、ルーンを唱え左手を水平に伸ばすと、そこに風が収束し緑色のボウガンが精製された。

風の武器化。ルヴェルドは左手のボウガンを零距離で腹に打ち込むと、ガルダは悲鳴を上げてのけ反った。

「俺を殺すにゃあ、愛がたりねーな。ガルダちゃんよ、お手本を見せてやるぜ、俺の愛がお前の心臓（ハート）を貫く……！」

「4対1か……囲むぞ、早々にケリをつけるんだ」

「いや」

「繁殖しちゃったみたいですね……」

頭上からさらに3つの影。僕を一直線に狙ってきた。

意識を集中する。草原を走る疾風をイメージして、風のルーンを唱える。靴底に風を収束。音を置き去りにして疾駆する。

一匹目のくちばしが空を切った瞬間、彼の目に映ったのは首を落とされた自分の体。思考する間もなく、彼の命は絶える。高速で動く僕の動きを捉えることはかなわない。リトを助けたときに使ったこの技術も、今ではすっかりサマになるくらい使いこなせている。

二匹目が爪で僕をえぐろうと低空で迫る。素早く、右横へ回避。木々の間を縫うように走り、風と一つになる。木の枝を伝い、そこから跳躍し、ガルダに肉薄する。思考する時間を与えない。

火のルーンを唱え、顔面に火炎をバーナーの様に放射する。空中で焼け焦げ、先日師匠が調理した黒い化石。もといパンケーキのようになって地面へ落ちる。

「あと、二匹」

二十四話　デュアルキャスト

残りの二匹はそれぞれ、師匠、オルビアに狙いを付けており、二人の戦いは始まっていた。ルヴェルドは二人の戦う姿を見て、口元を歪ませ笑っていた。視線の先をたどると、縦横無尽に揺れる二つの果実に行き着く。……仕事しろよ、いいオトコ。

オルビアがルーンを唱えて、左右の手に火を宿す。ガルダは火を恐れずにオルビアの腹部にくちばしを突き立てようとするが、オルビアはよけない。くちばしはオルビアを貫く。……はずだったのだが。

「噂ほどでもないな、ガルダのくちばしというのも、これも日々の筋トレのおかげか」

……どうやら、オルビアの腹筋で止まっているらしい。

オルビアは左右からガルダの頭を挟むように、手の甲を合わせ、ガルダの頭を潰した。

「これが筋肉の力だ、少年。素晴らしいだろう？」

筋肉、筋肉と言っているが、オルビアの体はどこからどう見ても、年相応の少女の体つきだ。決してムキムキマッチョなんかじゃない。一体どこにあんな力が……。

オルビアの動きに目を奪われている間に、師匠が左右の剣でX字にガルダを切り裂き、ガルダの体を4分割した。

「へへ、見たか、俺たちの力を！　今日もいいオトコが伝説を作っちまったな、フ」

「何もしてないでしょ、あなたは」

「皆、怪我はないな？　一応、巣を焼き払ってそれで仕事は終わりだ。念には念を入れておかないとな」

巣に近づき、中を覗いた師匠が小さく声をあげた。

「アルちゃん、これ見て……」

師匠に手招きされ、中を覗く。中には割れた卵の殻が４つあって、いずれも最近孵化したのか殻はキレイだった。

「４つの卵の殻……」

「さっき襲ってきたガルダは４匹……」

「まさか」

その不安は現実の物となった。突風が吹き、僕らは吹き飛ばされる。木の幹に体を叩きつけられ、よろめきながら顔をあげると憤怒の眼で僕らを睨む白い巨鳥……ガルダの親がいた。

先端が鋭利に研ぎ澄まされた４枚の翼と、さっき殺したガルダと比較にならないくらいの巨躯。ケタ違いの怪力で木々を薙ぎ倒しながら僕に迫ってくる。さっきのガルダは雛だったのか。

体に走る痛みを押さえこみ、僕は立ち上がろうとするが、それよ

り早くガルダの爪が僕を襲った。

しかし、ルヴェルドが風のルーンで作ったボウガンを前足に連射し、動きを止めた。そのスキを見て僕は後方に退避する。

だが、すぐにガルダは僕に向かって走り出した。ルヴェルドのボウガンを受けたはずの前足には傷一つ付いていない。

「俺の愛を受け止めやがったか……」

ルヴェルドは舌打ちする。

「自分に任せてもらおう」

オルビアが火を纏った拳をガルダの脇腹に打ち込んだ。しかし、ガルダはそれをものともせずにそのまま直進を続ける。

「く、なんという筋肉だ」

筋肉負けした事に相当ショックだったらしい。オルビアは唇を噛んで顔をしかめる。

このガルダは、ルーンによる攻撃にも、物理的な攻撃にも強力な耐性をもっているらしい。思ったよりも厄介な相手のようだ。

迫り来るガルダを、風のルーンを唱えて靴底に風を収束し、駆け出す。攻撃をかわすことは容易い。しかし、奴を倒す決定打がない。

「仕方が無いか」

未だ殺気に満ちた瞳で僕を見つめるガルダに向かって一人小さく呟く。

少し本気を出さざるを得ないようだ。ただし、闇のルーンは使わない。いや、使えないと言ったほうが正しいか。

僕の怒りや、悲しみといった負の感情をトリガーにして発動しなければならないからだ。今の僕にそういった感情はない。

ここは別の手で行こう。

意識を集中する。燃え盛る火をイメージして、火のルーンを唱える。右手に学習机ほどの大きさの火を宿す。

意識を集中する。吹き荒ぶ風をイメージして、風のルーンを唱える。左手に暴れまわる小さな台風を宿す。

――準備は整った。

「……二重詠唱（デュアルキャスト）……彼は、一体……」

オルビアが驚嘆して口を大きく開けた。

左右に宿った、火と風。僕はそれを伴ってガルダの前に出る。二重詠唱（アルキャスト）。２種のルーンを同時併用する事で威力を二乗化させる。闇のルーンを生み出す過程で、８歳の時に得た技術だ。

祈りを捧げるようにして手を組み合わせ、それを前へと突き出す。火と風は一つになり、炎の嵐と化し陽炎を引き起こし前へ進む。

炎の嵐はガルダを包み込み、彼の帰るべき家である巣ごと火で葬り去る。物言わぬ炭と化したガルダだったものは煙をあげ、灰になって崩れ落ちた。

「やるね～アルちゃん。ホレそうだわ」

ルヴェルドが無精ヒゲをさすって、僕にウインクをする。

「二重詠唱（デュアルキャスト）は、ガイザー様でも、滅多に使うことがない。ルーンナイトクラスの実力がなければ扱いきれず、力を暴発させて腕が吹き飛んでしまうような技術だぞ。君はそれをどこで……」

……そんなにすごい事だったのか、二重詠唱（デュアルキャスト）って。まあ、師匠の前でルーン使う事はほとんどなかったし、剣しか教わってなかったからルーンは独学だ。

「やはり、筋肉か」

「は？」

「どんな筋トレで会得したのだ！　言え、さもなくばヴィーグ中のダンベルを買い占めて、今後君は一切ダンベルで筋トレできなくなるぞ！　恐ろしいだろう！？　それでもいいのか？」

どんな脅しなんだ。

オルビアは未だ納得する様子を見せなかったが、師匠がお腹が空いたというので、僕らは街に帰還することにした。

二十五話　カイコウ

歩き始めて数分が立ち、僕はオルビアの横に並んで歩き、声を掛けた。

「オルビアさん、ちょっと聞きたいことが」

オルビアは振り向き軽快に答える。

「何だ、少年。筋肉の事か？　効果的なトレーニングを積めば君も――」

「え、いや」

３０分くらいして、ようやく話の腰を折る事ができて、本題に入ることが出来た。

「シャイド・アルバーブ理事長。あなたから見て、どんな人ですか？」

「理事長か……。あの人は尊敬できるいい人だ。筋肉を見れば解る」

「は、はあ」

結局そこなのか。

「ガイザー様と理事長はよく仕事上顔を合わせることが多いので、自分もそれに付き添うのだが……そうだな。最近、ガイザー様は忙しくされている。一週間くらい前からか……ああ、ちょうど君たち

と出会ってからくらいだな。最近では自分に行き先も告げずに外出なさるから、困っているのだ」

ガイザーは影で何かをしている。それは確実か。しかし、部下であるオルビアも何も知らないのでは、これ以上の情報は聞きだせそうに無い。

「ありがとう、オルビアさん」

「気にするな。自分は少年の事を気に入ってるからな。特にその、大腿四頭筋がすばらしい」

「そ、それはどうも……」

「む」

急にオルビアが立ち止まり、地面に目を向ける。その視線の先には一輪の可憐な花が咲いていた。

「リリアンの花、ですね」

「よく知っているな、少年。自分はこの花が大好きなんだ」

そういって、そっと花に手を伸ばし、優しく摘んで花を見つめる。

花を愛でる少女。その姿はなかなかサマになっていって、花も恥らう乙女と形容してもいいだろう。というか、筋肉筋肉と連呼しなければかなりモテると思うのだが。

「少年。これを君にあげよう」

「え！？」

オルビアは僕の眼を見て、そっと微笑み、リリアンの花を僕の鼻先に差し出した。……リリアンの花言葉は『永遠の愛』。カップルがプロポーズの際に婚約指輪と一緒に贈るのが、一般的なのだが……。それを僕にということは？

リリアンの甘い臭いが僕の鼻腔を付きぬけ、思考をマヒさせる。受け取るべきか、否か。

「君の事を考えると……ぜひとも受け取って欲しくなって……迷惑だろうか？」

オルビアの目は真剣だった。

「いや、その、そんな突然言われても……」

「いらないのか？　だが、自分はそれが欲しい」

オルビアは視線の先……リリアンの向こう側、つまり僕の唇を見てそう言った。

オルビアの端正な顔が僕に迫る。鼻先がすりあうんじゃないかと思えるぐらい近づいて、僕は眼を閉じた。そして――。

むしゃむしゃ、ごっくん。

コミカルかつ、可愛らしい音がして、目を開けると、オルビアがリリアンの花を咀嚼していた。

「うむ、美味だな」

オルビアは『永遠の愛』を胃袋に流し込んで、満足げに頷いた。

「この花には、筋肉を作るために必要な栄養素がふんだんに含まれている。君にもぜひ摂取してもらいたい食物なのだが……一緒にどうだ？」

やっぱりオルビアはオルビアだった。花より団子というが、花より筋肉なのだろう。

僕はその後もオルビアの栄養学を聞くハメになり、ようやく開放されたと思ったら、ヴィーグに到着していた。

「ふう、疲れたなあ。さっそくメシにしようぜ。この前、うまい肉料理の店を見つけたんだよ」

「あら、おいしそうですね。オルビアちゃんも一緒にどう？」

「肉か。動物性たんぱく質の摂取も必要だな。しかし、自分は今回の件を報告しにいかなければならん。悪いが、ここで失礼する」

「あら、残念」

オルビアは右手を上げ、街の中に消えて行った。それと入れ替わるように、リトが買い物籠をぶら下げて僕らの元にやってきた。

「アルお兄ちゃんっ！　お帰りなさいー！」

僕に走ってそのままの勢いで飛びつくリト。少しよろめきながらも僕はその小さな体を受け止める。

「ただいま」

その様子を見て、ルヴェルドがリトに言う。

「リトたん、ただいま。さあ、俺の胸においで、一週間ぶりの再会の喜びを分かち合おうじゃないの」

「臭いんだよ、ジジイ。加齢臭ぷんぷん巻き散らかしてないで、川に飛び込んでおぼれろよ」

一週間ぶりのナイフに、案の定ルヴェルドは泣き出した。一週間ぶりだけに、ナイフどころの切れ味ではない、チェーンソーだ。

「アルお兄ちゃん、伯父さん帰ってきたから、お家でお昼、皆で食べよう！」

「そっか、シャイドさん帰ってきたんだ。うん、家に帰って食べようか」

「うんっ」

「リトたんと昼食か。これは心踊るどころじゃないぜ」

リトはルヴェルドの顔をじーっと見て、笑顔で答えた。

「いいよっ、じゃー、レックスと同じメニュー御馳走してあげるね！」

「お、マジか！　ひさしぶりにマトモな飯にありつけそうだな」

ルンルン気分のルヴェルドには申し訳ないが、レックス（犬オス4歳）と同じメニューなんだよ、君は。

僕らは、昼食をとるため帰宅した。家にたどり着くと、門の前に小さな影を見つけて僕は眼を細めた。

誰だろう？　カリンだろうか？

近づいてみて、それが一体誰なのかわかった。

ずっと会いたかった。ずっと会いたかった。ずっとずっと――。

脳裏に焼きついていたあの日が蘇る。僕から新しい家族を奪い、殺してみろと笑ったあいつだ。

赤いローブ。金色の左手。フードで見えない顔。今にも笑い出しそうな口元。

「黄金の……ヴァンブレイス……」

ニタニタと不気味に笑って、左手を僕に向ける。間違いない、この存在感。この殺気。先日戦った、ニセモノなんかとは違う。本物だ。

前に出ようとした僕よりもルヴェルドが先に出て、出鼻をくじかれた。

「久しぶりだなあ、黄金のなんたら……探したぜぇ」

ヤツは笑いを止め、つまらなさそうに言った。

『何だ、お前は？』

ルヴェルドはルーンを唱え、右手を地面にめり込ませ、左手を空高くかかげた。

そして、右手を引き抜くとバウを薙いだあのハルバードが具現され、また左手にはさっきの戦いで見せた緑色のボウガンがあった。

二重詠唱――ルヴェルドは二つの武器を構え、もう一歩踏み出す。

「なら、こっちの方が解りやすいか？　元ルーンナイト第三席、ルヴェルド・ジーン。お前を愛してやまない男だよ」

二十六話　ケツイ

ルヴェルドが元ルーンナイト……それも、第三席。普段のふにゃけた表情ではなく、針の様な視線と、引き締まった口元は、いいオトコと呼んでいいかもしれない。

『あぁ』

ヤツは思い出して、楽しそうにげひゃげひゃと笑い出した。

「俺のお袋と妹……俺をかばって死んじまった部下達……俺の妻になるはずだったフィーナの所に……すぐに連れて行ってやる……地獄で詫び入れやがれ」

フィーナ。姉さんの……名前？　そこで僕は幼い頃の記憶が唐突に蘇った。『ジーン』という名字に聞き覚えがあったからだ。

エイドス家の治める領地の隣……そこはジーン家が治める領地であった。フィーナ姉さんは１８歳の誕生日を迎えると同時。隣の領主、ジーン家の長男と結婚するはずだったのだ。

「８年前、お前に殺されたエイドスの娘達……フィーナは俺の婚約者だった。お袋と妹の命だけじゃ飽き足らず、俺からまだ奪いやがるのか、テメぇは！」

やっぱり……ルヴェルドはフィーナ姉さんの婚約者だったのか。

「一つ教えやがれ。６年前、誰の差し金で俺を罠にはめやがった？」

『決まっているだろう？　お前の事が大嫌いな人間だよぉ』

「……なるほどな。やっぱガイザーだったか。これではっきりしたぜ。お前をぶっ殺したら、次はガイザーのハゲだ。あいつがお前のような薄汚い殺戮者とつるんでるなんて事がバレりゃ、それだけでスキャンダルだからな」

ルヴェルドが左手のボウガンで素早く撃つ。ガルダで見せた時とは比べ物にならないほどの弾速で、風の弾が黄金のヴァンブレイスに迫る。

着弾までの数秒間の間にルヴェルドは距離を一気に詰めて、ハルバードの斬撃でボウガンの射撃に威力を上乗せする。

黄金のヴァンブレイスは左手でそれを受け止めるが、衝撃で庭の中を転がり土にまみれた。立ち上がる所を師匠が後ろから二本の剣で突いたが、それを紙一重でかわし、屋根の上へと逃れる。

『これはセイン嬢。美しくなられて……お兄様の死体はちゃんと見ていただけましたかぁ？　芸術的だったでしょぉ？　人間で作ったミンチはぁぁあ？』

その言葉で師匠の顔が恐怖と悲しみと怒りで歪む。

僕は、下品に笑うヤツ目掛けて剣を抜き、空を舞った。

「ようやく、ようやくだな！　黄金のヴァンブレイス……約束通り……僕がお前を殺してやるぞ！」

ヤツは左手で僕の剣を受け止め、それまでバカみたいに笑ってい

たのを止めて、顔を近づけて囁く。

『私のかわいいアルフレッドぉ。いけない子だ。私以外の者に心を奪われて……すっかりふにゃふにゃになってしまったねえ？』

「僕はお前の事を……片時も忘れたことは……ない！」

剣に力を込めて、ヤツの左手を弾き、もう一歩前に飛び出す。

『かわいい子だったよ？　ちょっと嫉妬しちゃうなぁ。アルフレッドちゃんは私だけのモノなのにぃ。だから、だから！　ね？　げひゃひゃはははは！』

右手に何か糸の様な物を垂らし、わざとらしく僕に見せ付ける。

『これ、な～にかなぁ？　ヒント、人の体の一部です』

青くて長い糸……さらさらと風になびいて、あの夜僕に芽生えた、淡い感情を思い起こさせる。

「カリンの……髪……？」

『ピンポーン』

さっきまで以上のバカ笑い。僕は頭からつま先まで、凍り付く。

『でも勘違いしないでよぉ？　ガイザーちゃんの依頼で仕方なく、なんだからねぇ？　あ、ばらしちゃった。ぐひゃ、げひゃ、あはっはははは！』

視界がかすむ。喉が渇く。息が荒い。

意識を集中する。終わり無き苦痛と、凄惨な最後をイメージして、ルーンを唱える。

黄金のヴァンブレイスが小さく息をもらした。あいつの為に作ったこの力だ。僕の負の感情を捧げてやる。

『今日は、これで失礼するねぇ』

ヤツは屋根から飛び降り、逃げ出そうとする。

「な……逃げるな！　お前は僕にここで殺されろ！」

その言葉でヤツは口元を歪ませ、舌を出し、よだれを撒き散らした。

『私のかわいいかわいい、アルフレッドぉ。もっともっと君は成長する。その時まで、心の闇をもっと育てておいでぇ、そして――』

左手を僕に向け、フードの中の赤い眼が僕を射抜く。

『早く闇においで』

そのセリフとともに、ヤツの姿は煙の様に消えてなくなり、僕達の前から姿を消した。

「逃げ……られた」

途方も無い、喪失感。そして、思い出すように湧き上がる、恐怖

と絶望。カリンの笑顔と、8年前のあの日の姉達の姿が交互に僕の頭に浮かんでは消えていく。

「カリン……！」

急いで家の中に入ると、あの日と同じ臭いがして、吐き気を覚えた。前世の最後の日。8年前のあの日。その時と同じ感覚に陥る。

リビングに向かうと、血の海ができていた。そこに浮かんでいるシャイドさんと伯母さんの体……。

「カリ……ン？」

カリンの姿はそこにはなかった。

「アル……フレッド君、か？」

「シャイドさん！？」

慌ててシャイドさんの下へ駆け寄り、うつ伏せになっていた体を抱き起こす。

「どうしたんですか！？」

「……ガイザー……だよ。あいつが、殺し屋を雇って……私達を……ガイザーは……戦術級クレストを私達の工房に密造させ、それを隣国『シャナール』に売りつけていた……5年前……私の工房は潰れる寸前だったが、ガイザーが戦術級クレストの密造を引き受ければ理事長にしてやると言ってきてね……。私は……悪魔の誘いに乗ってしまったんだ。しかし、家族の生活を守らなければいけない。

ずっと、ずっと……悩み続けていた」

「シャイドさん、これ以上は……」

「聞いてくれ。ガイザーは……この国を売るつもりだ。シャナールには、クレストだけでなく、この国の軍事拠点の情報や、機密を売り渡して、シャナールに寝返ろうとしている……このことを陛下にお伝えしようと手紙を書いたのだが……その手紙を託した者も殺され、私も口を封じられてしまった……」

「シャイドさん、やめてください！　早く治療を受けに行きましょう！」

「私は、ダメな父親だ……家族を守るどころか、こんな事に……カリン……カリンは、さっきの殺し屋がガイザーの所に連れて行くと言っていた……まだ無事な……はず、ぐほっゲホッ！」

「カリンは、無事なんですね！？」

「アルフレッド君……最後に言わせてくれないか……この一週間、楽しかったよ。まるで息子ができたみたいだった……私は、君が後継者になって、カリンと結ばれてくれたら……そう思っていたんだ。カリンも……君の事を……カリンを……助けてやって……くれ」

「シャイド……さん？」

「君のおかげなんだ。君のおかげで勇気が持てたんだ。ガイザーとの関係を清算して、罪を償って……」

僕が……きっかけ……だったの……か。

「最後に、君に言いたいことがある」

最後にシャイドさんは笑顔を作って言った。

「ありがとう」

その笑顔のまま、まるで眠ってしまったかのように……シャイドさんは逝った。

血にまみれてしまった両手……そこに僕の涙が落ちる。涙は血とまじり、僕の手の平からこぼれ落ちる。

「ガイザー……お前だけは絶対に」

殺す。

二十七話　ボクジャナイボク

ガイザーを殺す。

僕はそう決意を固めて立ち上がると、リビングを出た。しかし、急に誰かに肩をつかまれ、壁に叩きつけられる。

「何ですか、ルヴェルドさん」

ルヴェルドが僕の両肩をがっしりとつかみ、鋭い目で僕を見据えていた。

「どこに行くつもりだ」

目を逸らし、返事を返す。相手をするのも面倒くさい。

「ちょっと……散歩ですよ」

「気持ちイイくらい殺気振り巻きやがって……ずいぶん物騒な散歩だな、おい？　少し頭冷やしてから行きな」

「カリンが……さらわれて……ガイザーに捕まっているんです！早く行って助けてあげないと！」

「だから頭冷やせって言ってんだよ、このバカ野郎が！」

その怒気と、ルヴェルドの今まで見せた事のない真剣な表情に、僕は気圧され、踏み出そうとしていた足を止めた。

「アルちゃんよ。大人ってのは、ズルくて汚い生き物なんだよ。カリンちゃんだけ殺さずにさらったのは何でだと思う？　子供だからか？　あいつはそんな慈悲深い奴じゃねえ、考えろ」

「それは……」

「……エサなんだよ。ガイザーはこの一週間、ここに出入りしてるお前も怪しいと睨んでるんだろう。奴の……裏でやってるセコイ事は俺のほうでもネタはつかんでる。そこの扉の奥は……この臭いで想像がつく」

ルヴェルドはリビングの扉を見て、目を細めた。

「リトたんは今、セインちゃんに見てもらってる。扉の向こうは絶対に見せない方が良い」

「……はい」

父を失ったばかりのリトに……この惨状を見せたら……僕は胸が引き裂かれそうになった。

「いいか。覚悟しろよ」

「何を……ですか？」

「最悪の場合、カリンちゃんはもうこの世にいないかもしれない……ってことだ」

「え？」

「お前を釣るために、カリンちゃんは人質にされたとして、だ。こいつは対等な立場の交渉を前提にした誘拐じゃない。お前をおびき寄せるためだけのエサなんだよ。釣られたお前は敵の腹の中に潜り込んで、そこで始末されるだろう。そのエサに生死は関係ない。むしろ、生きてるほうが面倒になる。『カリンがガイザーの所にいる』という事実さえあれば……死体でも奴にとっちゃ問題ないのよ」

「だから、今すぐカリンの所に行って！」

壁に密着していた体を起こし、一歩踏み出したが、再びルヴェルドに壁に叩きつけられ、全身に衝撃が走る。

「だからガキなんだよ、テメーは！　ガイザーの所に行ってどうするんだ！？　あいつを殺すのか？　腐ってもルーンナイトだぞ。お前がそこそこ腕が立つのはさっきの戦いで解ってる。だが、仮に勝てたとしても、お前がルーンナイトを殺したという事実は、多くの敵を呼び寄せるだろう。ヘタこくと、他のルーンナイトがメンツを守るためにお前を殺しに来るぞ」

「じゃあ、どうしろって……言うんですか」

「俺がいる」

ルヴェルドは背中を向けて続ける。

「俺もガイザーに恨みを持ってててな……6年前、あいつにはめられたのよ。黄金のヴァンブレイスの情報を俺に流して、あいつに俺を始末させようとした、俺を第三席から引きずり落とす為に……。フィーナ達の仇を絶対に取りたい、ただそれだけの為に関係ない部下まで巻き込んで、あいつを殺そうとして返り討ちだ。ガイザーが黄

金のヴァンブレイスを雇って、俺を殺そうとしてやがったのに気付かずな。だから、俺は真実を確かめるためにヴィーグに来た。結果は当たりだったわけだがな」

振り向いたルヴェルドに先ほどまでの怒気はない。

「あいつの不正はつかんでる。あとは物的証拠を押さえれば、社会的に殺せる。そうすれば、直接手を下さなくてもあいつは死罪になるだろう。ルーンナイトだからこそ、反逆は許されない。いいか、間違っても殺すだなんて、考えるなよ」

「……」

「ガイザーの館に忍び込んだら、お前はカリンちゃんを探せ。俺は証拠を探す。もしガイザーに見つかったら、その時は全力で逃げろ、俺が食い止める。もし、逆に俺が見つかって殺された時は、俺に構わず全力で逃げろ……その後、俺の事は忘れてくれ。いいオトコがいたなって、胸に刻んでくれりゃそれでいいからよ」

「何で、自分の身を犠牲にするんですか？　僕なんか、放っておいて証拠を探すなり、仇を取るなりすればいいのに」

「義理の弟が心配でさ」

初めて見せた、ルヴェルドの優しい笑顔。

「知ってたんですか……僕の事」

「そりゃもう。顔を見れば一発で解るって。だって、お前。フィーナそっくりだもん。フィーナと初めてあった日。あいつとの会話の

９０％、お前の事ばっかりでさ。自分にはかわいい弟がいるんだって、そればっかりで……耳にタコができちまったよ。だからだよ、俺があいつを好きになったのは。家族思いの優しい女はポイント高いわ」

「フィーナ……姉さん」

「もし、殺意が抑えられなくなったら。その時は、自分の顔を鏡に映して見ろ。フィーナはお前のそんな顔、見たくないと思うぜ？」

ふと、窓に目を向ける。そこに映ったのは『僕じゃない僕』。子供の頃の無邪気な笑顔の僕はそこにはいない。今の僕を見たら姉達はどう思うか……。ふと、冷静になる。

「……解りました。ありがとう、ルヴェルドさん……」

「気にすんなよ、俺はいいオトコだからな」

負の感情だけで戦うな、か。もし、ルヴェルドの言う最悪の事態……カリンがもし……そうなっていたらと、考えるだけで身が震える。けれど今は前に進んで確かめなくちゃならない。

……覚悟は……できた。でも、自分を抑えられるかどうかはまだ自信がない。それでも、それでも僕は行かなければならない。ガイザーの元へ……。

カリン、待っていてくれ。

二十八話　ガイザー・ドルベン

ガイザーはこの街の中央に建つ館。領主館で執務と寝食をこなす。僕とルヴェルドはリトを師匠に任せ、領主館へと向かって歩いていた。

リトは偶然外出していて難を逃れたのだ。ガイザーの狙いがアルバーブ家の人間と僕なら、リトの命も危ない。もしかしたら、黄金のヴァンブレイスがまた来るかもしれない。しかし、リトを連れて行くわけにも行かなかったので、師匠と一緒にルヴェルドが泊まっていた宿に隠れてもらうことになった。

「ガイザーは欲深く、嫉妬深い最低クズヤロウだ。今までにも何人かルーンナイト候補に手をかけてきた。ライバルとなりうる者を闇討ちしたり、弱みを握って選定会を辞退させたりとか、な」

夕暮れの街の中、中央広場に続く道で隣を歩いていたルヴェルドが口を開いた。

「あいつは、自分の保身のためなら何でもやる。黄金のなんたらを使っているのもそうだ。何でも利用しやがる」

傾いた日の光がルヴェルドの顔を照らし、僕は目を細める。もちろん、目を細めたのは光のせいだけではない。それを感じ取ったのか、ルヴェルドが太目の釘を僕に刺す。

「抑えろよ。アルちゃん。仲間を持つことと復讐の両方を願うなら、負の感情だけで戦うな」

「もっと周りを頼れ、でしょ？　覚えてますよ、いいオトコのアドバイス」

目的地にたどり着いて、僕はルヴェルドより先に前に出て背中越しに続けた。

「頼らせてもらいますよ、ルヴェルドさん」

門の前で、警備の兵に止められ僕はルヴェルドを見た。

「ガイザー様は今お忙しい。誰も通すなと申し付けられている。用があるなら、明日にしてもらおうか」

僕は振り向いて小声で『どうするんです？』とルヴェルドに尋ねた。

ルヴェルドは『頭を使うんだよ』と言って僕にウィンクする。警備兵の前まで歩いて、空を見上げるルヴェルド。何か策があるのだろうか？

途端、ゴン！　と鈍い音がして警備兵が地面にのびていた。どうやら頭突きで気絶させたらしい。

「頭って……それですか」

「そ。いいオトコの頭は１０８の使い道があるのよ」

たぶん、１０８種類の頭突きがあるとかいうオチなんだろうけど。

「空中からのいいオトコヘッドドロップ。地中からのいいオトコラ

イジングサン。フ……かっこいいだろう」

案の定だ。しかも、地中から飛び出す技まであるとは、いいオトコはいつも期待を裏切らない。

「でも、どうするんですこの人？　ここに置いておいたらばれちゃいますよ？」

「それも考えてあるさ」

ルヴェルドは領主館の庭にある茂みまで男を引きずると、男の服を脱がし、自分のズボンをずり下ろした。

「って、何考えてんですあんたは！？」

やっぱりこの人、そっち系なんだ。僕はこんな人を義理の兄に持たなくてよかったと心底思った。

「違うって！　ちょっと服と兜を拝借するのよ。俺が変装して、アルちゃんを捕まえたフリして歩けば、警戒されないでしょ？」

「それ本当でしょうね？」

半裸になった警備兵を前に、ズボンを脱いで下半身をあらわにした状態でそう言われても、説得力が無い。

ルヴェルドは警備兵から脱がした服に着替えると、兜を装着し変装を完了させた。

「ん？　ちょっとこの服臭うな……」

「大丈夫ですよ、もともとルヴェルドさんも臭ってますから」
「そっか、それじゃ大丈夫だな」
「大丈夫です」
妙に納得したルヴェルドは、僕を伴い館の中へと足を踏み入れた。踏み入れてすぐ他の警備兵がやってきて、僕らを不審な目で見つめる。
「おい、なんだその子は？　なんかやらかしたのか？」
ルヴェルドは少々、上ずった声で目を逸らして言った。
「あ、ああ。ちょっとおいたをしたもんだからな。少し牢屋に入れて、反省させてやろうと思ってよ」
「ほう……そうか、地下牢を使うなら、ここに罪名と被害者名を記入してくれ」
ルヴェルドの顔から嫌な汗が出た。どうやら、そこまで頭が回っていなかったらしい。……大丈夫だろうか？　また頭突きが飛び出しそうな予感がする。
記入用紙を警備兵から手渡され、ルヴェルドはしばし熟考したあと、サラサラと何やら書き出す。
「これで、いいかい？」

「ん、ああ。え！？」

警備兵は目を丸くして、記入用紙と僕の顔を交互に見比べる。一体何なんだ？

僕は身を乗り出して、記入用紙を覗き込んだ。

罪名：窃盗　被害者：ルヴェルド・ジーン　男性：２６歳　被害物品：男性用下着６枚

「……」

言葉が出なかった。こともあろうに僕はルヴェルドの下着を盗んだ泥棒にされてしまっている。しかも、６枚も。……覚えてろよ、いいオトコ。

「お、そうそう。ほら、あの青い髪のかわいい女の子。どこだっけ？　確か、昼間くらいにここに誰かが連れて来たと思うんだが」

「ああ、あの子なら地下牢に閉じ込めてあるじゃないか。ガイザー様もまったく、何を考えておられるんだか……まさか、ああいう趣味なのかねえ。っと、絶対ガイザー様に言うなよ」

「言わねーよ。俺とお前の仲じゃんか」

警備兵から牢屋の鍵を受け取り、ルヴェルドと僕はその場を後にし地下牢へと向かう。その途中の廊下で、ふいにルヴェルドが立ち止まった。

「さてっと、こっから先はアルちゃん一人で行けるだろ？　俺はこ

の辺で失礼するぜ。なんとかガイザーの尻尾をつかんでくるからよ」
「解りました。カリンを見つけた後、僕もすぐに合流します」
「いやいや、先にカリンちゃんを連れて俺の宿に行ってろ。俺一人でなんとかするからよ。もし、一時間経って俺が宿に帰ってこなかったら……すぐにヴィーグから出ろよ」
「……はい」
「そんな悲しい顔すんなよ。それ、下着泥棒のする顔じゃないぜ？」
「絶対帰ってきてくださいよ、2，3発殴りたいんで」
「おーこわ。いいオトコは顔が命。手加減頼むわ」

ルヴェルドは僕に牢屋の鍵を手渡し、悠然とその場を去っていった。今までのバカなやりとりは、ルヴェルドなりに気を遣ってくれていたのだろうか？　買い被りかもしれないが。

とにかく僕は、カリンの捕らえられている地下牢へと続く階段に足を踏み入れた。湿った空気とカビ臭いにおいが僕を包み込む。ロウソクの火で頼りなく照らされたせまい室内には、合計６つの牢屋があった。
「アル、くん？」

声のした方に目をやる。一番奥の牢……うずくまるように丸まっていた影がむくりと起き上がり、鉄でできた格子の前までやってきた。

「カリン……よかった。無事だったんだね、ちょっと離れて、今、開けるから」

鍵を開けて、カリンをそこから連れ出す。扉を開けると同時、カリンの暖かな感触を感じて僕は戸惑った。

「アルくん……お父さんが……お母さ……んが……私……」

せまい地下の壁に重なる二つの影。しばらく、このままでいたかったが、悪魔の声が僕らを引き裂いた。

「最近のガキはけしからんなぁ。人の家に無断で入り込んだ挙句、女とヤっちまうなんてなぁ……親の顔を見てみたいわぁ……いや、もう死んでるだったか？　アルフレッド・エイドス？」

卑猥な笑い声。声の主の姿は階段の前にあった。こいつ、僕の名前を……。

「ガイザー……」

二十九話　イカリノホコサキ

「どうした？　もっとヤれよ。入場料代わりに見せてくれや、ワシの目の前でその小娘の痴態をよぉ」

ハゲた頭が激しく動いて笑い出す。僕はカリンを背中に隠し、ガイザーを突破できないか、方法を頭の中に巡らせた。

「あぁん？　早くヤれよ。ガキにゃ早かったか？　なんならワシがお手本見せてやるぞぉ」

一歩踏み出したガイザー。しかし、すぐにその足を止める。

「お前は相変わらずハゲ散らかしてんな、ガイザー」

階段から現れたルヴェルドがガイザーの後頭部に風のボウガンを突きつけて立っていた。

「……やはり、ルヴェルドだったか……まさか生きてやがるとは、あの時素直に殺されとけばよかったものを」

「残念、いいオトコは不死身なのよ」

ガイザーはルヴェルドの方に目を向けて、歪んだ笑みを浮かべる。

「っと、動くなよ。脳ミソぶちまけたかったら、振り向いても構わないけどな。おい、黄金のなんたらはどこ行きやがった？」

「あいつなら、もうここにはおらんよ。別の仕事があるらしいから

な、闇の世界じゃ中々売れっ子みたいだぜ？　かなり扱い辛い奴だけどよ」

「そうか、そいつは残念だが、今は助かるな。お前の不正もろもろ、告発させてもらうぜ？　ちゃーんとブツは抑えてんだ」

「ハハハハハハ！　やってみろよぉ？　もっともそれができるのは生きてここを出れればの話だけどなあ」

ガイザーは、なお笑いが止まらない様子でより一層顔を醜く歪ませた。

「オルビア！　連れて来い」

「は」

ルヴェルドの背後から、オルビアが現れ、その傍らには両手を縄で拘束された師匠とリトがいた。

「お前らはアホだなぁ？　ワシはルーンナイトにして、ヴィーグの領主だぞ。猿程度の知恵で動き回った所で、ワシを出し抜けるわけがねえだろう！」

「ごめんなさい、アルちゃん……宿の……他のお客さんを盾にされて……」

「……関係ない人まで巻き込んだのか……お前は！？」

「これがガイザーなんだよ。アルちゃん……ここまで腐ってるのは俺も予想外だったけどな」

ガイザーは一際甲高く笑い、ボウガンを突きつけていたルヴェルドを殴り飛ばした。

「おおっとぉ、動くなよ。すぐにお前らを殺してやりたいところだが、ただ殺すだけじゃつまらねえからなあ」

そう言って、ガイザーは縛られている師匠の前まで行き顔を近づけた。

「いい女じゃねえか……。殺すにゃあ惜しいなあ。後で楽しませてもらうとするか。先に――」

今度はこちらに振り向き、その巨体を一歩。また一歩とゆっくりと近づけてくる。

「こっちをいただくとするかな」

ガイザーの視線の先……僕の背中には、震えるカリンがいる。

「どけ、クソガキ！」

右の手の甲で払いのけられ、僕は鉄格子に叩きつけられた。

「嫌！　離してよ！」

カリンは懸命にガイザーから逃れようとするが、ガイザーに頬を打たれ、そのまま押し倒される。

「やめろ……！」

「よ〜く見とけよ、クソガキ。お前の女が目の前で汚されるのを、その後でお前もたっぷりかわいがって殺してやるからなぁヒャハハハ！　いや、お前も一緒にやるかぁ？　大人の階段昇っちゃうかぁ？」

「お……めく…い」

小さな声で……オルビアが震えていた。拳を握り、視線を下に落とし、わなわなと震えている。ずっと耐えてきたのだろうか。もしかしたら……これまでにも同じような事があったのかもしれない。

「お止め、ください！」

今度は大きな声で、前を向いて、ガイザーを見て、力強く叫んだ。

ガイザーは立ち上がり、憤怒そのものとも言える顔でオルビアに詰め寄り、オルビアの黒く長い髪をつかむ。

「何か、言ったか？」

「お止めください！　自分はもう……耐えられません……」

怒りか、悔しさか、髪をつかまれた痛みか、オルビアの瞳に大粒の涙が溢れかえる。

「お前もやはり、父親によく似てるなぁ。母親に似てるのは外見だけか。孤児になったお前を引き取って、これまで育ててやってきたというのに。バカが！」

髪をつかんだまま、ガイザーはオルビアの頬を打つ。

「お前の母親はいい女だったぞ。ワシはずっと惚れていた。だが、お前の父親がワシから奪い去った！　親友だと思っていた男に裏切られたこの気分はどうだ！？　おまけに、ワシがなるはずだったルーンナイトにまで上り詰めようとして……」

ガイザーは怒りに震えながら……顔を真っ赤にして叫び狂った。

「だからなぁ、あいつに頼んで……事故に見せかけ始末してもらったのよ。黄金のヴァンブレイスに……なあ！」

オルビアは呆気にとられた表情のまま、固まって動かない。

「本当は、ワシが殺したも同然なのよ！　お前は母親によく似ているからなぁ。将来に期待して育ててやってきたんだが……がっかりだよ！！　お前も両親の所へ送ってやるわ！」

オルビアの大きく見開いた瞳から、涙が数的零れた。僕が記憶しているのはそこまでだった。

意識を集中する。草原を走る疾風をイメージして、風のルーンを唱える。靴底に風を収束。音を置き去りにして疾駆する。

メキョっというコミカルな音がして、ガイザーの顔に僕の拳がめり込む。

「……もう、いいだろう。もう……」

よろめきながら立ち上がったガイザーに、僕は一歩踏み出す。

「勉強になったよ。人間って奴はここまで腐ることが出来るんだな。お前は許さない……絶対に」

「こ、このガキ。ワシの顔に……ルーンナイトの顔に！　このガイザー・ドルベンに膝を付けさせるとは……殺してやるぞ」

「ルヴェルドさん。師匠達を連れてここから離れてください。できれば、遠くに」

「アルちゃん。おい、一人でやるっていうのか！？」

「お願いします。……僕はもう、抑えられない」

「……解ってるだろうな？」

「解ってます。僕は……僕ですから」

「お前を……信じるぜ」

呆然としたままのオルビアとカリンを連れて、ルヴェルド達は階段の先へと姿を消した。

これで……気兼ねせずに戦える。

「来いよ、ゆでだこ。僕が遊んでやる」

その言葉で、ガイザーは顔を真っ赤にして突撃してきた。ガイザーが牢屋の前に立てかけていた槍を手に取り、突きの嵐を繰り出す。

「お前は串刺しだ、その後こんがり焼いてやるぞガキぃぃぃぃぃ！」

剣を抜き、間合いを取る。カリンが捕らえられていた牢屋の入り口でその時を待つ。

「逃げるんじゃねぇ、このブタがあ！！」

僕に向かってくるブタゴリラ。タイミングを計って奴の股の下をスライディングですり抜ける。予想通り、そのまま牢屋に突っ込んでくれたので、鍵をして閉じ込めた。

「ブタはお前だろ。そこで調理されるまで大人しくしてろ」

ガイザーはなお、顔を真っ赤にして鉄格子をガンゴン叩く。やがて、諦めたのかと思ったら、ルーンを唱え、アメ細工の様に鉄格子を溶かし脱出してきた。

「どこまでもコケにしやがって……灰も残さず焼いてやるわ」

ガイザーがルーンを唱える。右手に自転車の前輪ほどの炎を宿し、左手に小型の台風を宿す。――二重詠唱か。

「燃え死ね！　ガキぃ！！」

放たれた炎の嵐。僕は息を整え、前を見据える。

意識を集中する。荒れ狂う大海をイメージして、水のルーンを唱える。右手に力強い水流を宿す。

意識を集中する。吹き荒ぶ風をイメージして、風のルーンを唱える。左手に暴れまわる小さな台風を宿す。

両手を前に出し、炎の嵐に突き出す。炎の嵐は瞬く間に消し飛び、津波がガイザーを飲み込み、壁に叩きつけた。

「おい、ルーンナイトってのはガキの遊びなのか？　焼け死ぬんじゃなかったのか、僕は？　やってみせろよ」

口から水を吐いたタコは、さっきまでの威勢はどこへやら、まるで子供の様に身をすくませ、四つん這いになって逃げようとした。

「どこいくんだよ」

ガイザーのマントを踏みつけ、面白いように前のめりにずっこけた。

「な、何なんだ、お前は……ワシのルーンをかき消すほどの力……ワシは……『聞いてない』ぞ！？」

「お前が僕の何を知っていようが関係ない。お前は罰を受けろ。殺さない。生きて地獄を味わえ」

「アルくん、待って！　その人に聞きたいことがあるの！」

「カリン！？」

一瞬振り向いた。それが大きな過ちだった。

ガイザーの放った風のルーン。風の刃が僕に迫っていた。間に合

わない――防御も、回避も……。

青い髪がなびいて、ふわりと甘い香りが僕の鼻腔を突き抜けた。あの夜と同じ匂い。気が付くと目の前にカリンがいて……カリンが……。

風に貫かれて、前に倒れた。しかし、その風はカリンを貫いたのに飽き足らず、僕をも貫こうとした。

覚悟した。もう、ダメかなって。でも、カリンと一緒なら……それもいいかなと思った。

ごめん姉さん。仇……とれなかったよ。そっちに行ったら、また四人で暮らせるかな？　また、パンケーキ焼いてくれる？　セレーナ姉さんに全部取られちゃう前に僕の分、隠しといてね。

……頭の中で考えた。けれど、その時は未だやってこない。僕はおそるおそる目を開けた。

「あ……」

僕の体には硬い石が膜のように張り付いていて……無傷だった。

「よかった……私のクレスト。ちゃんとアルくんを守ってくれたね」

カリンが口から血を零し、笑顔のまま涙を浮かべて僕の頬をなでてくれた。

「カリン……しゃべらないで。すぐに手当てをするから……！」

「ごめんね、約束守れないかも……アルくんと……一緒に歩きたかったなぁ……アルくんのお給料で……色々おごらせちゃおうって計画してたのに……」

「何が欲しいの？　買ってあげるから！」

「ごめんね……リトの事……お願い……あの子、よく食べるから……ごめん……ね」

カリンの顔は安らかだった。僕の顔は……どんなだろうか？

「へ、へへへへ。いい気味だ。へへへへへ！」

「黙れよ」

僕は……津波を起こした時に出来た地面の水溜りに顔を映してみた。

「あ、ぁぁぁぁぁぁ、く、来るな、悪魔！」

そうか、悪魔なのか。僕は。それでいい。だって僕は……影だから。影に光はいらない。手を伸ばした結果がこれだ。僕は間違っていた。

「ガイザー……お前は……死ね」

三十話　イツカソノヒマデ

「待て、ワシと手を組もう！　こんな国はいずれシャナールに攻め込まれて滅びる。一緒にシャナールで貴族になろう！　欲しいものをやるから、な？　そうだ、お前の女。あんな女よりもっといい女を抱かせてやる！」

必死に僕の機嫌を取ろうとキタナイ笑顔で、僕を覗き込む。

「……」

「考えてくれたか？」

「ああ」

「そうか！　そうか！　お前は見所があるぞ、ワシの部下として、お前を――」

ガイザーの首を両手でつかんで、幼子をあやすようにたかいたかいをする。

「はひ！？」

「僕の答えはこれだ」

より一層恐怖で顔を引きつらせ、ガイザーは黄色い何かでズボンを汚した。僕はガイザーを地面に放り投げる。

「げふ、待て、ワシはルーンナイトだぞ！？　第七席だぞ！？　ワ

シを殺したら――」

「関係ない」

意識を集中する。終わり無き苦痛と、凄惨な最後をイメージして、ルーンを唱える。僕の右手に黒い霧が立ち上る。それは僕の意思なのか願望なのか……。

「お前は殺さない」

恐怖で歪んだ顔をガイザーは、一瞬ほっとして安堵の笑みを浮かべた。

「お前をカリンの所へは行かせない」

そしてすぐに疑問符で一杯の戸惑いの笑みを浮かべる。

「死すらもぬるい。輪廻の輪から外れて、永遠を彷徨え」

闇をガイザーに向ける。ガイザーは必死にそれを払おうとするが、ムダな事。魂を引きずり出すと、僕は躊躇いも無くそれを握りつぶした。

これで……よかったのか……。僕は……。

すごく悲しいはずなのに……涙が出ない。カリンの亡骸を前にしてただ立ち尽くしていた……。

数日後。

僕はヴィーグの郊外にある墓地へと足を運び、アルバーブ家の墓前で立ち尽くしていた。

ガイザーを失ったことで、ヴィーグは大混乱に陥っていた。領主が、それもルーンナイトが突然、死んでしまったのだから、当然か。僕とルヴェルドは領主館に不法侵入した事を咎められかけたが、オルビアの計らいで不問となった。

というよりも、ガイザーの件で僕らに構っている暇はないのだろう。ルヴェルドがガイザーに関する不正をすべてオルビアに伝え、オルビアはそれを国に報告した。

表向きには、ガイザーは謎の病死という事になっているらしい。闇のルーンで魂を壊した事は、誰にも気付かれていない。だが……。

「アルちゃんよ。お前……あいつに何をした？」

ルヴェルドは僕を疑っていた。

「……言えません。ただ、あいつを……許せなかった……だけです」

「……表向きの話。ガイザーは病死だけどよ。……はっきり言って、お前さん。狙われるぜ」

「他のルーンナイトにですか？」

「ああ。ルーンで心臓を止めたりとか、そんな技術を持った暗殺者ならいくらでもいるからな。その場に居合わせたアルちゃんが疑われるのは時間の問題だわ。これからどうするのよ？」

「僕が……ルーンナイトを殺したという事実があるなら。僕はルーンナイトと同等かそれ以上の力を持ってることに……なりますよね？」

「だな」

「だったら、ルーンナイトかそれと同等以上の力を持った奴が僕の前に現れる」

「かもな」

「暗殺者も……そうでしょ？」

「お前……」

「もう、鬼ごっこはやめにします。追いかけて捕まらないなら、向こうから来てもらいますよ」

「自分をエサにしようってか。面白れえ。アルちゃんにくっついてけば、いずれ黄金のなんたらに出くわす日が来るか！　良いね、お前に付いてくぜ」

そうだ。先の見えない鬼ごっこは終わりだ。僕を殺しに来い、黄金のヴァンブレイス。その時が……最後だ。

「アルちゃん」

「アルお兄ちゃんっ」

振り返ると、師匠と手をつないだリトがいた。

「リト……」

リトは……僕よりも辛いはずだった。伯父夫婦と姉の様に慕っていたカリンを失くして……それでも、懸命に墓の前に立っている。僕なんかよりも強い子だ。

リトは、肉親と呼べる人間を全て失った。これから彼女をどうすべきなのか。師匠と話し合って……決めた。

「リトは……村に帰るかい？　もし、そうなら送って行くよ。それとも……一緒に来るかい？」

カリンに頼まれた。というのもあった。でも、それ以上にリトを放っておくことはできない。この子は僕と同じだ。黄金のヴァンブレイスに肉親を殺され、一人孤独を彷徨っている。

師匠の様に……誰かが手を差し伸べてあげないと……。

「一緒に……いいの？」

「リトが……そうしたいなら」

あの日、僕にそうしてくれたように、僕もリトをそっと抱きしめた。

「少年。ここにいたのか」

「オルビア？」

「実は、ずっと君を探していた。……頼みがあるんだ」

オルビアは遠い目をして、空を見上げ、一呼吸置くと僕を見る。その目には何の迷いもなく、決意の光が宿っていた。

「自分も共に歩ませてくれないか？　君の道を」

「え？」

「黄金のヴァンブレイス……ガイザー様が……いや、ガイザーが奴に依頼して自分の両親を殺させたと言っていた……少年の目的も同じなら、自分も……やはり、自分の様な女は、迷惑……か？」

「別に迷惑ってわけじゃないけど……オルビアは騎士でしょ？　そっちはどうするの？」

「ああ、それならやめてきた」

あっけらかんとした表情でオルビアは爽やかに笑った。

「ええ？」

「主を信じることはもう、やめた。これからは自分を信じる。この筋肉をな」

オルビアは豊満な胸を張り、ぽんとそれを叩くと、波打った。ルヴェルドがそれを見て、よだれを垂らす。

「ま、まあ、いいけど……。えらく大所帯になったな……」

「けどよ、アルちゃん。これからどうすんだ？」

ルヴェルドの問いに僕は答える。

「旧エイドス領……僕の生まれた故郷に、一度帰ろうかなって思ってます」

「ん、旧エイドス領……って今は」

代わりにオルビアが答える。

「現ドルベン領……ガイザーの領地でもあった所だが……」

「シャナールに程近いあの土地なら……黄金のヴァンブレイスの事も何か解るかもしれない。それに、あそこの土地の事は知り尽くしているから、奴と戦うときは地の利を活かせる」

「戻るのね、アルちゃん……」

「ええ。もう、覚悟はできてますから。行きましょう」

僕らはこうして繋がった。黄金のヴァンブレイスという共通の敵を持つことによって。

４人が先を歩き、僕はふと墓地を振り返る。

カリンの事は……一生忘れる事はないだろう。僕は……それでも行かなきゃならない。進まなきゃならない。僕は影。誰の光もいらない。けれど。

僕は全てが終わったら……どうする？　解らない。けれど、一つ決めた事がある。それを、約束を口にする。

「カリン……全部が終わったら……戻ってくるよ。だから、それまで待っていて。もし僕が死んでしまったとしても天国（そっち）できっと会えるから……だから、それまで」

さようなら。

三十一話　ゼンセ

『他に好きな女ができた』。その言葉が私の頭を貫いた。一瞬思考が停止して、彼が去って行ったのに気付いたのは、玄関のドアが閉まった後だった。

また、捨てられてしまった。元々親に捨てられ、身寄りがなかった私だ。一人とか孤独にはなれきっていた。

けど……今回はさすがに堪えた。彼とは1月後に籍を入れて、新しい生活が始まるはずだったから……ショックは計り知れないくらい大きい。

「また、独りぼっちか……私にはそれがお似合いってわけ？」

マンションの玄関で、彼が去っていたドアのノブを見て一人呟く。勢いよく開け放った拍子に、小石か何かがドアに挟まってしまったのだろう。隙間風がドアから入り込んで、心だけでなく、体まで冷え切ってしまいそうになる。

リビングに戻り、彼ととるはずだった夕食を眺める。彼は人一倍食べるので、テーブルの上は料理で溢れかえっていた。

仕方が無く、私は一人でその大量の料理と格闘する事になったのだが、ご飯を口に入れてすぐに異変が起こった。

突然の吐き気。すぐにトイレに駆け込んだ。トイレから出た私の脳裏に一つの単語が閃いた。直感的な物だったが、考えてみれば、色々と条件はそろっている。

翌日、私は仕事の帰りに薬局で妊娠検査薬を買って、自宅で使い調べてみた。結果は……陽性だった。彼以外の男性と付き合ったことは無い。だから、このお腹の子は私と彼の赤ちゃんなのだ。

私の中に宿った新しい命。私の赤ちゃん。私の家族……。

彼にこの事を言うべきだろうか？　いや。絶対に言わない。私を捨てた男なんかに、この子は渡さない。一人で育ててみせる。私には、この子がいればそれでいい。

私は決心した。早速本屋に立ち寄って、育児本を買いあさり、ネットで色々と調べてみた。

名前も考えなきゃいけない。男の子だったらどうしようか。女の子だったらこんな名前がいいな。そんな風に楽しく想像を膨らませていたら、あっという間に月日が流れた。

初めての出産。それに、私には親もいない事もあって、周りに頼れる人はいない。苦労の連続だった。けど、きっとこの子と一緒ならどんな苦労も乗り越えて行ける。そんな気がして毎日を精一杯生きた。

妊娠7ヶ月になり、私はすっかり妊婦さんらしくなった。大きなお腹。期待で胸が一杯になる。

そんなある日の事だった。突然、玄関をせわしなくガンガンと叩く音が聞こえて、私は転ばないように細心の注意を払って玄関を目指した。

「よう。俺だよ、俺」

彼だった。

「金貸してくんね？　彼女と別れて仕事も失くしちゃってさあ。少しでいいんだよ、少しで」

もう二度と見たくないと思った顔だ。私はすぐにドアを閉めようとした。

「お前、妊娠してんだろ？　聞いたよ～俺とお前の子供だよな。ちょっと触らせろよ、いいだろ、なあ！」

強引に部屋に入ってくる彼を押し止める。冗談じゃない。今更あんたの顔なんか見たくも無い。こんな身勝手な奴だとは思わなかった。付き合い始めた頃は優しくて、気遣いのできる男だと思ったのに……。

しかし、女の力で男の力に敵うはずも無く、ドアは強引にこじ開けられ、彼が部屋に汚い足でずかずかとあがりこんだ。

「帰ってよ！　私を捨てておいて、今更なによ！」

「おい、調子こいてんじゃねーぞ。俺だって父親になるから、ケジメ付けに来ようと思ってたのによお、ざけんな、このアマ！」

わけのわからない事を言って、彼は私を思い切り突き飛ばした。

打ち所が悪かったのか、頭を下駄箱の角でぶつけてしまい、私の意識は一瞬でどこかへ飛んでしまう。

次に気が付いたのは、ベッドの上だった。朦朧とする意識の中、現状を把握しようと懸命に思考する。

たしか、私は……彼に突き飛ばされたんだっけ？　そうか、ここは病院。ベッドの上で四肢を少し動かし、体に異常が無いことを確認し、ほっと一息を付く。

突然扉が開いて私は驚いた。初老の医師が気の毒そうな顔をして、私のベッドの傍らにやってくる。

どうして？　私の体はなんともないのに。

「非常に言い辛いことなのですが……あなたは――」

医師が去った後も、私は途方に暮れていた。何も考える事も出来ない。どうして？　どうして？

私に宿った命は……もう、この世に生を受けることはない。そして、私も……大切なものを失ってしまった。

退院の日。生気が抜けた人形の様に自宅への道を歩いていた。夕方の住宅街。パトカーや、救急車がせわしなく走りまわり、何か事件があったのだと解った。

だが、そんなことはどうでもよかった。

すると、突然。彼が……あの男が私の前に飛び出してきた。右手には血に染まった赤い刃物……包丁が握られている。

血走った眼で私を睨む。逃げろ。頭の中で誰かが叫ぶ。その声に従い私は飛び出す。一切振り向かずに、闇が支配しつつあった住宅街を私は突っ走る。

道の途中で、ふと振り返り、男の姿を探すがどこにもない。ほっと安堵して前を見た瞬間。

眩しい二つの光が私に迫ってきて……ほどなくして、全身に衝撃が走り、私は空を飛ぶ。

様々なモノから開放される。重力から、肉体から、そして……私の意識は途絶えた。

暗闇の中で私は願った。『もう一度生を受けることがあるなら、あいつに復讐したい――と』。

私の意識は底の無い闇へと落ちて行く。やがて暖かい光に包まれたと思ったら、次の瞬間には暗い空間をさまよっていた。

その空間は私だけが支配する私だけの世界。暗いけどあたたかくて、でも恐れはない。誰かを感じて護られている。そんな安心感。ずっとここにいたい。そう思った。不意に光を感じ、私はここを離れなければいけない事を悟った。光の向こうへと私は押しやられる。

もう少しここにいたいと思う未練と、光の先への期待感。それらを胸に抱えたまま私は光を目指す。

光の先には、それよりも眩しい笑顔があった。赤毛の男性がまず目に入った。中年の女性が顔を近づけ、なにやら嬉しそうに話しているが、その言葉は日本語ではない。英語でもなく、私の知らない

言葉だった。

私は、一体どうなってしまったの？　その時の私は理解が追いつかなかったが、やがてそれが新たな生を受け、新しい家族を手に入れたのだと知る。

私は、生まれ変わったのだ。

三十二話　ハナシタクナイヌクモリ

桶いっぱいに汲んだ井戸の水。その水面に赤い髪の女の子が映る。くたびれた服。つぎはぎだらけのスカート。……紛れも無い私自身だった。

私は、生まれ変わったらしい。しかも、地球じゃない異世界みたいで、ルーンだなんて魔法のあるなんともファンタジーな世界だ。

新しい人生。ご丁寧に前世の記憶が残っているだなんて、神様も残酷な事をしてくれた。絶望の記憶は何年経っても色あせず、目を瞑ったら思い出してしまいそうになる。

5年経った今は……まだ、マシか。代わりに新しい問題が生まれたが。

「おい、ロッテ！　水を汲むのに何もたついてやがる！　さっさとしねえか！」

「……ごめんなさい、お父さん」

声の主は私の父親だ。生まれ変わった私の家はとてつもなく貧乏だった。母は私を産んで1，2年して父から逃げたらしい。原因は父の暴力だ。

それは程なくして、ターゲットを私へと変えた。ずっと憧れていた父親と母親。私の夢はあっさり打ち砕かれてしまったわけだ。

あざだらけの体にムチ打って、重い桶を家まで運ぶ。まったく、

こんな重労働を5歳の子供にさせるなんて……現代日本じゃ幼児虐待もいいところだ。

水道の蛇口をひねって水が出てくるっていうのは、何て幸運なことなんだろうか。文明って素晴らしい。

家に帰ると、父親は昼間から酒を飲んで寝転んでいた。仕事は何をやっているのか知らないが、一応稼ぎはあるらしい。やがて大きないびきをかいて、そのまま寝静まった。

鼻と口をつまんでやろうかと思いたくなる、憎たらしい寝顔を飛び越えて、私は外に出る。

川原までやってきて、子供達がるーんないとごっこをしているのが目に映った。木の棒でチャンバラごっこ。男の子らしい遊びだ。ほどなくして彼らは飽きてしまったのか、棒を放り投げて家へ帰って行った。

ルーンナイト。この国で7人しかいないという、国の誉れ。最高の剣術とルーンの技術を持った騎士……。実力さえあれば、身分、性別を問わず誰にだってなれる。

女性ルーンナイトは未だ存在しないらしいが……もし、私がルーンナイトになることができたら……こんなゴミ箱生活から抜け出せるだろうか？

木の棒を手に取り、上下、左右に振ってみる。

私にはルーンの才能があった。けれど、それを父親に見せた事はない。きっと私の才能を利用したがるだろうから。

もう一つ、私には特別な力がある。……魂を見ることが出来るのだ。人によってはその輝きは様々で、傷が付いたり、小さかったり……特に傷付いた魂の持ち主はルーンに関する才能と前世の記憶をもっているらしかった。

といっても、年とともに忘れていってしまうみたいだが。

私の魂は……ひどいものだった。

前世の記憶が関係しているのか？　解らないが、とにかく私にルーンの才能があることは確かだ。

せっかく生まれ変わったのだ。この世界で……誰にも裏切られない、誰にも頼らなくて済む自分になりたい。ルーンナイトっていうのに……なってやる。

再び、上下左右に木の棒を振る。すると目の端に人影を捉え、ちらりと盗み見た。

幼い男の子だった。年は私と同じくらい……？　金色の髪と青い瞳のかわいらしい男の子だった。上等な服に身を包み、分厚い本を持って川原にやってきた。

私は自分の姿に目をやる。いかにも、貧乏な家の汚い子供らしくて泣けてくる。私だって……せめて生まれる家さえ間違わなければ……。

彼を見ていると、少し腹が立ってしまった。何の苦労も無く、家族に愛され育ってきたんだろう。少し、いじめちゃおうか。

一心不乱に読みふけっている彼から本を奪い取る。すぐに彼は反応して私を見上げた。

「殴っていい？」

半分本気だ。

「はあ？」

まあ、初対面の相手にいきなり殴っていい？　と聞かれて『いいよ！』と笑顔で返されても私はドン引きするけど。

けれども……すぐに私の気持ちは変わった。彼の魂は……ひどかった。傷だらけ……ううん。キレイな所が無い。私と同じくらいに……。

興味を持った。本当は追いかけるつもりはなかったのに……彼の事を知りたくなった。

彼を引きとめ、少し話をして……それからすぐの事。異形が私達を襲った。私達は逃げた。けれど、結局追いつかれてダメかなと思った時。

彼はなんと、異形をルーンで焼き払ったのだ。その背中はとても幼い子供のものじゃない。とても、大きくてかっこよかった。

そしてそのルーン……子供があそこまでの力を持っているだなんて……信じろといわれても信じられない。

彼は、ルーンナイトになりたい。と言った。私と同じ目標を持ち、似たように魂に傷を持つもの同士……。

もっと……彼の事を知りたくなった。そっと右手を差し出し、彼は私の手を握り返してくれた。

小さいけど、暖かい。久しぶりに感じたぬくもり。離したくない、また、会いたい。

だから、友達になろうって切り出した。彼は笑顔で『よろしく』と答えた。

アルフレッド・エイドス。それが彼の名前。

私がこの世界で孤独から開放された瞬間だった。

三十三話　ワタシノヤボウ

私は思わず息を飲んだ。大きな屋敷……庭の物置なんか、私の家と同じ広さがあった。綺麗な花がいっぱい咲いていて……とても同じ町の風景とは思えない。

それもそのはず。ここは領主様のお屋敷。私のような庶民が来るようなところではない。

「ロッテ、こっちだよ」

「あ、待ってよアル！」

アルに手を引かれ、私は屋敷の門をくぐる。程なくして、使用人のお爺さんが駆け寄り、『お帰りなさいませ、お坊ちゃま』と頭を恭しく下げる。

『うわあ』だ。正直な感想、それしか出てこない。

いつもの様に川原で私達は遊んだ。アルと童心になって遊ぶのもまた楽しくてしょうがなかった。意外と子供の遊びもあなどれない。

そんなある日、アルが『僕の家においでよ！　一緒におやつ食べよう』と無邪気な笑顔で私の袖を引っ張るので、付いてきてみたが……。

『うわあ』だ。色んな意味で。アルの家がお金持ちなのはそれとなく解っていた。でも、それが……まさか領主の息子だなんて……木の棒で叩かなくてよかったと、私はホッと胸をなでおろした。

アルが玄関の前で立ち止まり、ふと振り返った。

「どうしたの？」

「ん、あんたの家大きいな～って気後れしてたのよ。猫型ロボットのアニメに出てくるお坊ちゃんを、一瞬想像しちゃったわ」

「あはは。懐かしいね。ロッテは今、前世の物で何が一番欲しい？」

「んー」

私は一瞬考える。

「ヘアアイロンかな。あたしの髪って、けっこうクセ毛なのよね。朝がタイヘンで困ってるの、アルのサラサラした金髪が羨ましい」

わしゃわしゃとアルの頭を両手でごねてやる。アルは特に抵抗せずに苦笑いを浮かべて、私の手に弄ばれて『やめてよ、ロッテ』と言った。

「僕はやっぱりパソコンかな。ゲームもだけど、あんまり娯楽がないよね。ネットですぐに調べられたりしたのが懐かしいよ。他には？」

「焼酎かな」

「ロッテって、お酒飲めるんだ……」

「うん。やっぱ芋をお湯で割るのが一番よ。冬はそれに限るわよね」

アルは目をパチパチ動かして、返答に詰まった。その様子は小動物を連想させて、非常に可愛らしい。

あれ、ところでアルって前世でお酒とか飲まなかったのかな？前世に関しては暗黙の了解というか、互いに聞かないことにしていたので、アルの前世については何も知らない。

今回、アルに初めて聞かれたのでそれに答えたのだけど……もしかして、アルって未成年だったのかな？　女の子だったりして？ていうか、もしかして私、前世がおっさんだとか勘違いされてない？

そう私が思いを巡らせていると、アルの後ろの扉が開いて、中から女の子が出てきた。

「アル、お帰りー。お、その子がロッテちゃんかー。かわいい子じゃない。友達第一号がこんなかわいい女の子なんて、セレーナお姉ちゃん、アルの将来が怖いわ」

お姉ちゃん、アルのお姉さんか。なるほど、確かによく似ている。年は１０代の半ばくらいだけど、どことなく幼い印象を受けた。容姿ではなく、おそらく纏っている空気。内面的な物のせいかもしれない。

「ただいま、セレーナお姉ちゃん。レイナお姉ちゃんも、フィーナお姉ちゃんもいるの？」

レイナお姉ちゃん、フィーナお姉ちゃん……他に二人も姉がいるのか。これだけ年の離れた姉が３人もいれば、かなり可愛がられてそうだ。

前世でもそうだったけど、姉を持った男性はどことなくその雰囲気で解る。なんというか、直感的に。親和的というか、そんな空気を漂わせている。アルも多分にもれず、そうだった。

セレーナさんに案内され、私とアルは大きなテーブルのあるリビングへと案内される。

『うわあ』だ。またしても。何もかもが昔、夢の中に描いたお家のようで……またしても気後れしそうになる。これが金持ちか！

「はじめまして、ロッテちゃん。アルの姉のフィーナです。よろしくね」

髪の長い女性……おそらく、長女だ。フィーナさんが優しく微笑んでかがみこみ、目線を合わせてくれた。5歳の子供にここまで丁寧に接するあたり、やはり親のしつけがしっかりしているんだろう。

「ロッテちゃん。お目が高いわね、アルは優良物件よ。あ、私レイナね、よろしく」

同じようにして、セミロングの女の子が私と目線を合わせて、手を握る。この子は次女かな？　じゃあ、セレーナさんは三女か。

自己紹介を済ませると、テーブルの上においしそうなお菓子がたくさん並べられ、いい香りの紅茶が丁寧に私のカップに注がれる。

メイドさんが一礼して去っていくと、さっそくティータイムが始まる。が――。

「アル、こっちおいで」

「ちょっと、アルはこっちよ！」

「やめなさい、アルが痛そうじゃないの」

「フィーナ姉さん、どさくさ紛れてアルを持っていかないでよ！」

『うわあ』だった。姉バカ×３の構図に私は気圧される。リビングではアル争奪戦が始まり、アルはあっちへ行ったり、こっちへ行ったりと急がしそうだ。

私は今のうちに、クッキーを手に取り、頬張った。なんともいない甘さ。もう、涙が出るくらいにおいしい。アルめ、羨ましすぎる。

右手と左手を左右からお姉さんに引っ張られるアルを見て、ちょっと噴出しそうになった。アルは苦笑いのままそれに逆らおうとはしない。きっと、いつもの事なんだろう。

やがて、アルはフィーナさんの膝の上に納まることになり、事態にようやく収拾がついた。

……いいな、アル。こんなに素敵な家族と、こんなに立派なお家があって……。

「ロッテちゃん。遠慮しないで、一杯食べていいのよ」

無論、そのつもりだ。一杯食べて食いだめしておこう。……下品に思われない程度に。

「あなたは未来の義理の妹なんだから、いつでもここに来ていいんだからねっ！」

セレーナさんが私の隣に座って、私の肩を抱く。不思議な気持ち。

義理の妹……アルが私の旦那さん……？　ふと、クッキーを食べる手を休めて想像を巡らせて見る。

この広いお屋敷でアルの帰りを待つ私。使用人たちに『奥様』と敬われ、かっこよく成長したアルに愛され、二人の間に可愛い子供が出来て……上が女の子で、下が男の子で……女の子は私に似てて……あ、髪はアルに似ていたほうが良いかな。一緒に料理作ったり……オシャレさせてあげたいな。

「……いいかも」

思わず口に出してしまった。けど、私は物置みたいな家に住んでる物置娘だ。そんな低所得の私と時期領主のアルが吊り合うだろうか？　きっとアルにも許婚みたいな人がいるんじゃないだろうか？

いやいや、そこはあれだ。既成事実を作ってしまおう。そしてこのお姉さん達を味方に付けて外堀を埋めていけば……。

ルーンナイトになるよりも、こっちのほうが幸せかもしれない。アルとこのまま……一緒にいたい。

私は家に帰る途中。ポケットに忍ばせていたクッキーを頬張って、野望に思いを馳せた。

三十四話　ユルセナイ

耳障りな音がして私は眼を覚ます。父親のいびきが目覚まし代わりだ。今日も夜遅くまで飲んできたらしい。アルコールの臭いをぷんぷんさせて、横たわっている。

目が冴えてしまったので、仕方なく外に出て、星を見上げた。夜空には恐ろしいくらいの星々が煌いており、鳥肌が立つ。綺麗といえば綺麗だが、それ以上に恐ろしく感じた。

東京の空はいつも人工の光に照らされ、こんな大量の星を映し出したことは無い。田舎に行った時に見た、満天の星空。それ以上にひしめく星々。いかに自分がちっぽけな存在なのかを思い知る。

そして、いつも独りの恐怖に怯えていた。けど……ポケットに残っていたクッキーのかけら。それが私に勇気をくれた。この世界で生きていく勇気。

私はここで生きていく。きっとこれが、神様に与えられた運命ならば……前世の忌まわしい記憶を消さずに残していたのも今を生きる試練だというなら、乗り越えて見せよう。

私は生きていく。

東から昇る太陽に背を向け、私は水を汲みに井戸へ向かった。

アルの家族と知り合って数日が経ったある日。私はアルに内緒でエイドス家にお邪魔していた。目的はあのおいしいお菓子……ではない。フィーナさん達と会う約束をしていたからだ。

「アルのお誕生日会ですか？」

例のリビングで、３人のお姉さんとお茶をしながら話を聞いていた。どうやら、もうすぐアルの６歳の誕生日らしい。アルは妙に鋭い所があるが、どうも自分自身の事に関しては鈍い所がある。誕生日についても、アルの事だから忘れていたんだろう。

「アルってば、子供のクセにみょーに遠慮しちゃう所があるのよねー。欲しい物とかあんまり言わないし」

「けど、男の子って何が欲しいのか私達には解らないよね」

「だから、一緒に遊んでるロッテちゃんなら、何か知ってるかなって思って」

なるほど。アルの欲しい物……か。この前、パソコンかゲームって言ってたけど……そんな物はこの世界にはないし……。

「ごめんなさい、解らないです……」

「うーん。そっかあ、しょうがないね。今度のお出かけの時に、私が直接選ばせちゃうかな」

「それしかないわね……お願いできる、セレーナ？」

「まっかしといてー。無理矢理吐かせるから！」

腕まくりしてセレーナさんが、力強く頷いた。

「あの、アルの誕生日っていつなんですか？」
「明後日なの。明日、皆でお出かけするから、チャンスはその時しかないんだよね」
明後日……明後日は私にとっても特別な日だ。
「どうしたの？　ロッテちゃん、なんかボーっとしちゃって」
「あ、あの……明後日は……私も……誕生日なんです」
エイドス3姉妹はいっせいに声を上げる。『じゃあ、ロッテちゃんも一緒に』。『プレゼント用意しなくちゃ』。『むしろ、ロッテちゃんが主役で』。
そして気が付いた時には、明後日は私もお誕生日会で祝ってもらうことになっていた。
誕生日……6年目にして初めて誰かに生まれてきた事を祝ってもらえる。それだけでもなんだか胸が熱くなる。プレゼントなんかなくったって、その気持ちだけで十分にありがたかった。
「じゃあ、明後日の晩に家に着てね。楽しみにしてて！　素敵なパーティーにするからね！」
「えっと……ありがとうございます」
明後日。楽しみだ。次の日が来るのをこんなに楽しくて、待ちきれないだなんて事、いつ以来の事か……。

その日も父親のいびきがうるさかったが、私は安らかな眠りにつくことができた。

そして、その日が来た。前日に聞いた話によると、アルはクマのぬいぐるみが欲しいと言ったらしい。ベッドで抱いて一緒に寝るのだろうか？　想像したらアルがより愛しく思えた。

一番傷んでないマシな服を選んで、暗くなった外に出る。どんな風にアルにお祝いの言葉をかけようか？　私の頭の中はそれでいっぱいだった。これから始まるであろう、楽しい時間に心が躍る。

大きな屋敷が見えてきた。幸せな時間はすぐそこにある。少し速度を上げて、小走りになる。わくわくとドキドキが私の足を加速させる。

「あれ……？」

妙だった。明かりがない。そして、何故か台風でも過ぎ去ったように木々が薙ぎ倒されている。

途端に私の中の幸せな心は吹き飛ぶ。変わりに嫌な予感が全身に駆け巡って、寒気がする。

「何？」

暗闇の中を目を凝らすと、二つの人影があった。

赤いローブに身を包み、不気味な笑みを浮かべている謎の人物。そしてその右手はアルを……アルを締め上げていた。

「アルから離れろぉ！」

近くに落ちていた棒切れを拾い、アルを締め付けていた右手に叩きつける。

アルが危ない。アルを守らなくちゃ……。謎の人物からアルを守るように私は立ちはだかった。

そして、すぐに違和感に気付く。

――魂が無い。

赤いローブの人物には……魂が無い。一体こいつ……何なの？

目が合う。フードの中の目は……どこかで見たような気がした。

そうか。と私は気付く。

私を殺したあの男の目……あれと……一緒だ。

「やめて、ロッテ。僕なんかほっといてよ！」

背中でアルが叫んだ。

私は振り向いて、元気付ける為に笑う。

「あたし達、友達じゃん」

友達……いや、違う。今の私にとって彼はそれ以上の存在になりつつある。

たかが5歳の男の子にこんな感情を抱くのもなんだけど、アルは他の子とは違う。アルは色んな意味で特別だ。

だから、守る。決意を固め、前に向き直るが、すでにそこに奴の姿は無かった。

「ちぇ、逃げられた～。命拾いしたわね、あのヘンタイフード」

「うん、命拾いしたよ……」

「それより、どうしたの、えらく散らかってるし、馬車がなんか……」

「近づくな！」

今までに聞いたことの無い、アルの激昂した声。その声に一瞬たじろぐ。

「え、う、うん」

「あいつが、そうなんだ」

「え？　どうしたの、アル？」

「あいつが『黄金のヴァンブレイス』……。あいつは絶対に僕がこの手で……」

アルが……アルじゃなかった。お日様みたいに眩しい笑顔のアルがいない。

「ちょっと、アル。どこへ行くのよ！　お家は？」
「僕は、家を捨てる。もう、ここには何もないから」
背中を見せ、そのまま立ち去ろうとするアルに私は追いすがる。
「捨てるって、どこいくのよ！？　あたしと一緒にルーンナイトになるんじゃなかったの！？」
「そんなものはもう興味ない。守る人ももう、いないから」
「……あたし達、友達でしょ！！　友達を置いていくの！？」
行かないで……アル。私、独りになるのは……嫌だよ。
「わかった」
アルは振り向いて、一瞬微笑んだ。
私はその笑顔にどれだけ救われたか。しかし――。
「もう僕たちは友達じゃない。絶交だ」
ゼッコウ……？　トモダチジャナイ？　意味が……解らない。
遠ざかっていく小さな背中。玄関のドアノブを見つめていたあの時の私が蘇る。熱い雫が私の膝を濡らす。
また……また、捨てれてしまった。

「フィーナぁぁぁぁぁぁ！　おい誰だよ、畜生！」

不意に後ろで若い男の声がした。それはあの馬車の向こう。アルが近づくなと言った場所だ。

そっと近づいてみて、私はすぐに後悔した。

ひどいものだった。二日前まで一緒にお茶を飲んで……笑い合っていたエイドス3姉妹……。血にまみれて……綺麗な顔が苦痛に歪んでいる。

アルは……これを……見たんだ。『黄金のヴァンブレイス』……さっきの奴がこれを……やったの？

目を逸らすと、そこにはかわいらしいクマのぬいぐるみがあった。きっと、アルが欲しいとおねだりしたぬいぐるみ。それはごく普通のぬいぐるみ……真っ赤である事を除けば。

もう一人、男がやってきてフィーナさんにすがり付いて、服を真っ赤にしていた少年にそっと語りかけた。

「ルヴェルド様、黄金の左手を見たという目撃情報が……」

「……わかった」

少年の目は狂気に満ちていた。やがてその場を去っていき、私一人が取り残される。

私は……家族を殺されたアルを引き止める事もできなかった。

私では……お姉さん達の代わりには……家族にはなりえないのか。

アルから家族を奪った『黄金のヴァンブレイス』……あいつが全ての元凶。……許せない。

アルを引き止められなかった無力な私。……許せない。

私を捨てて一人行ってしまったアル。……許せない。

許せない。許せない。許せない。

全てが許せない。

三十五話　センテイカイ

勝敗はすでに決していた。誰の目にも映ったであろう、私の完全なまでの勝利。しかし、男はそれに不服であったのか、なおも私に剣を向け間合いを詰めて斬りかかってきた。

男のハゲた頭が逆光になり、一瞬視力を奪われる。……便利な頭だ。気が付くと、すでに剣は私の喉元を捉えていた。

――殺すつもりだったのか。

「やめい！　ガイザーよ、これ以上恥を上塗るか！」

その声で切っ先は一瞬動きを止める。

「……構いません。私もまだ、動き足りないと思っていたところです」

視線だけ動かし、審査員……ルーンナイト第二席。ドルイド・ハーケン卿に意思を伝える。

ルーンナイト選定会、最終戦。私は現第六席ガイザー・ドルベンとその席を賭け、戦いを挑んだ。特別に設営された会場には、エルドアの国民が所狭しと詰め掛けている。

一年に一度開かれるこの大会は、国民に取っても大きなイベントでもある。騎士に名を連ねる者からルーンナイトを選出する恒例行事。通称、『選定会』。

賓客の中には諸外国の首脳が出席しており、この選定会自体がエルドアのルーン技術と騎士の質の高さを内外に知らしめる、重要な戦略でもある。

その場で、だ。勝敗が決しているのにもかかわらず、今なおヒステリックに叫び狂うこの男の姿はどうか？

顔を真っ赤にし、タコの様な頭から湯気を出してみっともない事この上ない。

「……よかろう。続行を許可する」

ハーケン卿のその言葉を待っていましたとばかりに、ガイザーが再び剣を私に突き立てる。

「女がルーンナイトになるだと！？　笑わせるな、女如きにルーンナイトが務まるものかよ！」

私は顔をしかめる。

「ガイザー様、呼吸をお止めください」

「何だと？」

「あなたの息は臭い」

すでに噴火したガイザー。こんな安い挑発にのっているようでは、ただの小物か。踏み台にすらならない。

大きく振りかぶったガイザー。スキだらけの見本の様な動きで、

私に迫る。私は長く伸びた赤い髪を翻し、斬撃を見切ると、額に迫った剣の横っ腹に、一撃を加える。

見事に真っ二つになった剣を唖然と見つめ、ガイザーは後ずさるが、すぐに次の行動に出た。

――ルーンか。それもどうやら二重詠唱。

「ワシのルーンはなア！　ガルダクラスの異形でも、こんがりローストチキンにする威力なのよぉ！　終わったなあ、赤毛猿！」

臭い息を撒き散らし、ムダな説明を垂れ流す。自分の力を大きく誇示しようとする愚かな犬。その遠吠えを聞き流して、私はルーンを唱える。

常に私に付きまとう『女のクセに』という、言葉。それはこの男に限った事ではなく、他の騎士達からも言葉にしてかけられた事はないが、ひしひしと伝わっていた。

それを今日ここで、吹き飛ばす。この男はその宣伝になってもらおう。第六席がこんな小娘に力負けしたとなれば、周囲の視線も変わる。

意識を集中する。大地の壁。早き逆風。私の周りに土の壁と風の壁。二重の障壁が発生し、ガイザーのルーンを受け止める。

受け止めたルーンは、しっかりと利子を付けてお返しする。私は義理堅い性分だ。受けた恩も傷みも倍にして返す。

障壁で受け止めた炎の嵐を、ガイザーに向けて放つ。ガイザーは

微動だにしない。ガイザーを炎の嵐が包み込む……つもりだったが、あえて直撃を避け、ギリギリの所でかすらせた。

「ご満足いただけましたか？」

ガイザーは息を飲んで、汗をだらだらと垂れ流し、青い顔のまま、固まった。……殺してしまうと、失格にこそならないが、民衆への心象が悪い。それに宣伝目的なら、これで十分だ。

「見事だ。ロッテ・ルーインズ。これからはお前が第六席を名乗るがよい」

ハーケン卿のその言葉。ついにこの時が来た。

「ありがとうございます。ルーンナイトとして、陛下の盾となり、槍となり、国の守護者となる事を……誓います」

一斉に歓声が上がる。私の名前を高々に叫ぶ人々。惜しみない賞賛。祝福。それらを一身に受ける。

8年……長かった。ついに、ついにここまで来た。6歳になって、すぐ父は亡くなった。酒の飲みすぎで酔って頭をぶつけてしまったらしい。家族を失ったというのに、その時は不思議と何も感じなかった。

それから私は孤児となり、王都の孤児院で6年を過ごす。騎士団には見習いとして12歳から入団できる。私はそれまでずっと研鑽（けんさん）を重ねてきた。

『女のクセに』。その言葉が私に付きまとう。その言葉と付き合

い始めて早2年。だが、それも今日この瞬間までの事。

私はルーンナイトになった。だが、私の野望はここで終わらない。

ふと、視線を感じて一番高い席……王族席を見上げる。

第一王子ジェラールが私を見ていた。ジェラールは今年18歳。あと二年もすれば、彼が王位を継ぐ。私の野望はその隣の席……。彼の后となる事。

国を守る聖女として数々の武勲を挙げ……彼と結ばれる。貧困層から這い上がり、女性初のルーンナイトとなった私……話題性も人気も十分に得て、王の后に相応しい女になる。

そして、やがては彼を政治の席から排除し、私がこの国を手に入れる。それが、野望。

誰にも頼らない。誰にも裏切られない。誰にも捨てられない。今度は、私が裏切ってやる番。私が捨てる側。ジェラールを傀儡(くぐつ)とし、この国の母となる。

アルに捨てられて、私は決心した。もっともっと上を目指してやると。だから、これは通過点。喜ぶにはまだ早い。

私は観客席の民衆達に、最高の笑顔で手を振る。……練習した甲斐あって、反応は上々だ。

そして、本命のジェラールに向けて熱い視線を送る。ジェラールは頬を赤く染め、少し視線を逸らした。

まずはこんなものか。……けれど、必ずあなたを手に入れてみせる。そして、裸の王様にして捨ててやるわ。

私は民にとっての光になる。この国を照らす光。それがこの世界に生を受けた私の運命。成り上がってみせる。

そしてその日。私はルーンナイト第六席ロッテ・ルーインズとなった。

三十六話　ツノルオモイ、ハツシゴト

私がルーンナイトになって数日……突然、緊急招集がかかった。私は登城する準備を済ませ、城下街に出る。ルーンナイトになれば希望する領地を与えられるのだが、選定会の事後処理やら、引継ぎでまだ騎士団時代の宿舎に寝泊りしていた。

エルドア王国。王都エルディアは中央に王城がそびえ立ち、その周りを強固な城壁と深い堀で囲っている。そしてその周りを囲むように４つの区画が整備され、商業区、工業区、農業区、住宅区が存在し、またその４区画を取り囲むように高い石の壁で覆われている。

私の宿舎も、住宅街の一番外れ……王都の入り口近くにあった。整備された道を歩き、城を目指す。緊急召集とはいえ、戦いに行くわけではないので軽装だ。

胸当てとマント……下は膝丈くらいの紺色のスカートという出で立ち。もちろん、左腰に剣を帯びている。

腰まで伸びた私の赤く長い髪が王都の風に揺られ、スカートがふわりとなびく。街を歩けば行く人全てに声をかけられ、握手やサインを求められてしまった。

どうやら巷ではちょっとしたアイドル扱いらしい。中には息子の嫁になってくれなんて、頼んでくる人もいるから困った。

でも、これはこれで悪くない。着実に私という存在が民衆に定着して行っている。私の野望に一歩近づいている。

ふと、住宅街の真ん中でめかしこんで緊張した面持ちの少女が目に映った。あたりをせわしなく見回し、誰かを待っている……恋人を待っているのだろうか？

私は少し気になったので、そっとその様子を観察してみた。

少女が私を見つめ、安堵と喜びの混じった表情で見つめる。すると、後ろから足音がして私の脇をすり抜け、金髪の少年が少女の元へ駆けつけた。

その少年の横顔を見て私は凍りつく。そして、その名前を口にした。

「アル！」

少年は振り返り、非常に驚いた様子で私を凝視する。

「は、はい。確かに僕はアルフォンスですけど……」

アル違いだった。それによく見てみればアルとはぜんぜん顔のつくりが違う。平々凡々を絵に描いたような顔だ。アルは……もっと愛らしく笑う。もっと……。

私の悪いクセだった。同年代の金髪の少年を見ると、全てアルに見えてしまう。そして、その度にアルへの思いを募らせ、絶望し、暗い感情を胸の奥に力いっぱい押し込む。

愛情、絶望、憎しみのサイクルを8年間頭の中で繰り返してきた。その度に私は、自分の野望を思い出し、アルへの思いを頭から排除する。

落ち着きを取りもどし、前を見ると、少年は少女と手をつなぎ、商業区へと歩き出していた。きっとこれからデートなんだろう。

あれが……私とアルだったなら……？　あったかもしれない、夢の様な日々。しばしその背中を呆然と眺めていると、悲鳴と共に中年の男が少女の荷物を奪い取って、こちらに向かってきた。

「どけ！　ぶっ殺すぞ！」

ご希望通りに体をどかす、ただし、左足をそこに残したままで。私の左足に引っかかり、男は前のめりに倒れこみ気を失っていた。奪われた荷物を男から取り上げ、怯えていた少女に手渡す。

少女は涙ながらに私に感謝の言葉を述べる。その横で少年は、尻餅をついたまま目に涙を浮かべていた。

やっぱり、違う。アルはこんな風に腰を抜かしたりしない。アルなら……私を助けてくれる。手を取って私を引っ張ってくれる。優しく、力強く。そう、初めて出会ったあの時の様に。

アル……アルは今……どうしているだろうか？　いいや、だめだ思いを募らせては。私は野望を思い起こし、引ったくりの男を近くにいた兵士に任せ、城を目指した。

「あ～ら、ルーインズちゃんじゃなあい。感心感心。ちゃんと遅れずに時間通りだわね。おネエさん、関心しちゃう」

会議室の扉を開けるなり、声をかけられた。

「おはようございます、ファイゼル卿」

「ルーンナイトの女子は私達二人、力を合わせて頑張りましょうネ」

野太い声でルーンナイト第三席。ベルゼリオ・ファイゼルが私の両手をがっしりとつかむ。長髪とヒゲ……そしてヘソ出しスタイルの服装。私は『彼』が苦手だった。

「気持ちワリイんだよ、ベルゼリオのカマ野郎。いつまで生きてやがる。脳天ブチ抜いてブタのエサにすんぞ、アア？」

「やめないか、ブランディッシュ。見苦しい所をお見せしました、ファイゼル卿。ルーインズ卿。朝早くから申し訳ありません」

「バルディッシュの兄貴……。てめえ！　よくも兄貴に頭下げさせやがったな！　脳天ブチ抜いてブタのエサにすんぞ、アア？」

バルディッシュ・ハーンとブランディッシュ・ハーン。彼らは双子で、兄のブランディッシュが第四席。弟のバルディッシュが第五席……。

よくキレるほうが兄のブランディッシュ。聡明で知的な方が弟のバルディッシュ。しかし、何故か彼らの間では兄と弟が逆転している。

戦場では共に『銀の悪魔』と呼ばれ、普段は『双天使』と呼ばれている。天使は戦いになると、その皮を内側から食い破り悪魔の本性をさらけ出す。

美しい外見と銀髪。戦場での残虐さから、彼らは敵味方問わず恐

れられ、その名が付いた。

「ふむ、これで全員だな」

第二席、ドルイド・ハーケンが私達に目を向け、席に着くよう促す。誰も皆、ドルイドの覇気に圧され、『双天使』もオネエさんも、沈黙して席に着く。

顔にX字の傷……百獣の王が如き双眸で、見るものを威圧するドルイド。

「第一席……エリオ・ハーケン様は王命で動かれている。これで全員がそろった」

狭い会議室に5人のルーンナイトが集められ、『全員』となった。内一人、ドルイドの身内、エリオは別命で出ている。これで全員？

「質問質問～ガイザーちゃんが見当たりませ～ん」

「ハゲ過ぎて死んだんじゃねえ？」

「失礼だよ、ブランディッシュ。彼だって好きでハゲているわけではないんだから、ね？」

お前も失礼だろ、バルディッシュ。

「第七席ガイザー・ドルベンは先日死亡した。何者かによって殺された可能性がある」

途端に笑い出す、バルディッシュとブランディッシュ。

「きひゃはははは！　あいつマジで死んだのー？　やべえ、腹いってええ」

「ダメだよ、ブランディッシュ。そんなに笑っちゃ、彼だって精一杯戦って虫けらの様に死んだんだから、ね？　くひゃはははは！」

『双天使』は『銀の悪魔』へと豹変する。

「けどまあ、問題じゃないの？　ルーンナイトが一人殺されちゃうなんて。彼の代わりなんていくらでもいるけど、末席とはいえ、ルーンナイトだし」

ガイザーが殺された。一体誰に？

「ガイザーはシャナールの一部とつながっていた。我々の情報を流していた事実がある。といっても、ニセモノだがな。あやつを泳がせてしっぽをつかむつもりだったが……」

「生簀（いけす）の中の魚は、急に空から現れた鳥に食われた……という事ですね？」

「そうだ、ルーインズ卿。どこの誰だか知らんが余計な事をしてくれた。ガイザー如きの命など、取るに足らないものだが、ルーンナイトの面にドロを塗ってくれた礼はせねばならん」

そう言って、ドルイドは立ち上がり一言冷たくいい放った。

「第二席、ドルイド・ハーケンの名の下に命ずる。ガイザーを殺し、ルーンナイトの名を辱めた者を探し出して……殺せ」

全員に戦慄が走った。ドルイドの目は殺気に満ちていて、まるで私達全員を殺すと言っているように聞こえてしまう。

いや、殺さねば、代わりにお前らを殺すという脅しでもあるのだろう。それほどまでにガイザーを失った事はルーンナイトにとって、屈辱なのだった。

「首謀者は、一体どのような者なのですか？」

私は気になって聞いてみた。

「うむ。ヴィーグにて目撃された情報を照らし合わせると面白い人物が浮かび上がってな」

「面白い？」

「8年前、ずっと行方不明になっていたエイドス家の長男。アルフレッド・エイドス」

「アル……エイド……ス？」

どうして、ここでアルの名前が？

「そやつの犯行に間違いあるまい。しかも、情報によると奴は旧エイドス領……お前が希望した領地に向かっておるとの事だ」

「あらん。じゃあ、ルーインズちゃんの初仕事かしらん？」

「は！　代わりに俺がやってやろうかあ？」

「ルーンナイト第六席ロッテ・ルーインズ卿」

気が付くと、皆の視線が私に集まり、ドルイドと目が合った。

「はい」

「アルフレッド・エイドスを殺せ」

三十七話　キンイロノカゼ

私が旧エイドス領を領地として希望したのには、二つの理由があった。

一つは、私の出身地であること。これは大きい。地元出身の私がルーンナイトになって帰ってくる。きっと他の領地よりも仕事がやりやすいだろう。

もう一つは、エイドス領はシャナールに一番近い領地である事だ。両国との国境では小競り合いが耐えない。実際、２０年近く前に侵攻を受けた際にもエイドス領が真っ先に攻められ、それを撃退したのがエイドス家の先々代当主であり、当時ルーンナイト第１席であったロイド・エイドス……つまり、アルのおじいさんだ。

戦争の機運は高まっている。シャナールとの戦いが始まるのは時間の問題であった。おそらく、２、３年以内……いや、もしかしたら比較的早い内に……だからだ、私は早く戦場で武勲を立てたい。シャナールから領地とそこに住まう人々を守り、敵を撃退する。私の株も上がるだろう。

しかし、それがまさか……アルと……戦う事になるとは思いもしなかった。ガイザーを殺したアル……一体、何故そんなバカな事をしたのか。最後に見せたあの時のアルの顔を思い出す。あれはアルじゃない別のアル。きっと……８年経った今は、私の知らない恐ろしいアルになってしまったんだ。

風と一つになって駆ける馬。私は馬上で色々な思いを巡らせていた。荷物はすでに馬車で運んでもらい、私は一人自分の領地に向か

っていた。

最低限の荷物と身一つ。一人を選んだのは、この道中で気持ちに整理をつけたかったからだ。

それに、お忍びで自分の領地を見ておきたかった。派手な迎えも歓迎会もいらない。８年経ったあの土地を肌で感じ目で見て、ありのままを受け入れたい。

夕暮れの林を駆けながら、もう一度アルの事を考える。

……今の私達が街中で出会っても、おそらくお互い気付かないだろう。ルーンナイトになった私。野望の為に仮面を被り、自分の心を誤魔化してきた。そんな私を私だと解るはずもない。

復讐に取りつかれ、醜い殺人者となってしまったアル……。

ガイザーは下衆とはいえ、アルは人を殺したのだ。しかし、これは運命なのかもしれない。誰か他の者の手に掛かる前に……私の手でアルを……私の知っているアルのままで……殺す。

あまりに深く自分の世界に入り込んでいたせいか、私はそれに気が付かなかった。わずか数メートル先にはられたロープ。地上から５０ＣＭくらいの高さに張られている。

まずい。そう思った時には遅かった。必死に手綱を握り減速させようとしたが、時すでに遅し。馬はロープに足を取られ、その上に乗っていた私も転倒してしまった。

林の湿った土の上を転がり、しゃりしゃりとした物が口内に侵入

する。

とっさに受け身を取ったおかげで軽い打撲程度で済んだが、馬は頭を打ったのか動かない。呆けている暇も無く、風を切る音が聞こえ、剣を抜いてその方向に振るう。

死角から飛んできた矢を切り落とし、精神を集中させる。木々の影に隠れて気配を殺しているが、間違いない。

「……出てきなさい。私はここよ、逃げも隠れもしないわ」

その声で隠れていても無駄と悟ったのか、十数人の男が姿を現した。

「騎士様よお、哀れな俺たちに恵んでくれや。有り金と、荷物と後……」

男の一人が私のスカートの下を見て嫌らしい笑みを浮かべた。まったく。この類の輩はこの世界に吐いて捨てるほどいるらしい。

たぶん、こうしてここを通る商人や旅人を襲っているのだろう。手際のよさと、簡単に姿を現した事から場慣れしているようだ。

男達は皆、薄汚れたボロを身に纏い、剣を手にして私を見て舌なめずりをする。私を食ってみろ。食中毒じゃ済まさないぞ。

「久しぶりの上物じゃねえか。今日は俺から楽しませてもらうぜ？」

再び剣を構え、戦闘状態に思考と体をシフトさせる。斬りかかろうとした瞬間。いきなりだ。いきなり金色の風が私の前をかすめて

いった。

男の体から腕が無くなり、他の男も次々倒れていく。

金色の風の正体は少年だった。長い金色の髪は肩まで伸びており、それが少年の動きに合わせてふわりとなびく。サラサラした金のカーテン、そんな印象だった。

呆気に取られていた私を他の男が襲いかかってきた。咄嗟に剣を繰り出し、男の腹を横に斬る。少年もまた、剣を男の肩に突きつけ戦闘力を奪う。

容赦のない太刀筋。殺すことに慣れている。年は私と同じくらいなのに、相当な数の『殺し』を重ねてきたのだろう。その足運び、間合いの取り方、構え……。

どこかで見覚えがある。カウフ流双剣術――。ただし、彼は両手に剣を持っていない、一刀流だった。おそらく、自己流にアレンジしているのだろう。

剣術としてでなく、純粋な殺人技術(しょうばいどうぐ)として。

圧倒的な強さ――。もしかしたら剣術は私を上回るかもしれない。あるいは他のルーンナイトと比べても、遜色ない戦闘力か。

気が付くと、彼は全ての賊を切り伏せ私の前まで来ていた。

目が合う。

――アル！？　いや、違うこれもまた、いつもの私の悪いクセだ。

金髪の少年を見るたびそう思ってしまうのは、私の中のアルへの愛情からなのか、憎しみなのか、あるいはその両方からなのか。

「大丈夫ですか？」

少年は優しく微笑んだ。辺りはすでに暗くなっているというのに、彼の笑顔は暗くなっていた私の心を照らした。

デジャブ。言ってみれば、真夜中の太陽。金色の光。けれどこれも私の悪いクセが招いた幻覚だろう。

「ありがとう。大丈夫です、あなたこそ、お怪我は？」

「ありません。それより、早くここを離れたほうがいいでしょう。村が近いとはいえ、いつまでもこんな暗がりにいるのは危険だ。よかったら僕が送りましょうか？」

紳士的でとても好感が持てる少年だ。私の事をかなり気にしているらしい。

「私なら、大丈夫。これでも騎士ですから。あなたこそ、早くお行きなさい」

少年は名残惜しそうだったが、やがて背中を向けると去って行った。ふと、遠くで声がした。

「少年、そんなに急いで一体、どこへ行っていたんだ？　まさか、秘密の筋トレか！？　自分に黙って……これは負けていられないな」

少女の声が暗闇の向こうから聞こえてくる。きっと少年の連れな

んだろう。もしかしたら、恋人なのかもしれない。

「オルビアさん……僕の事は名前で呼んでって、言ったでしょ？」

「む……そうだったか？　では、どこの筋肉で呼んで欲しい？　僧坊筋か？　腹斜筋か？」

「だから、僕の名前はアルフレッド・エイドスですってば」

三十八話　シンジダイノヤドヤ（前書き）

登場人物紹介

ロッテ・ルーインズ

１４歳。ルーンナイト第六席。
アルと同じく転生し、前世の記憶を持って生まれ変わった。
前世で恵まれなかった彼女の人生は、生まれ変わっても変わらなかった。
５歳の時に偶然アルと出会い、自分に近いものを感じ惹かれる。
エイドス家と交流を深めるに連れて、アルとその家族に心を開き、自分の居場所を手に入れたと思った矢先、黄金のヴァンブレイスが引き起こした事件でアルは彼女の元を去ってしまい、心の拠り所を失くしてしまう。
以降は、アルに対して愛憎入り混じった感情を強く抱き、捨てられた事に対する反発からか、ルーンナイトになるという以上の野望を抱いた。
そして彼女がルーンナイトになってはじめて与えられた仕事はアルを殺す事……二人が刃を交えるその時は近い。

三十八話　シンジダイノヤドヤ

僕は働いていた。旧エイドス領に向かう途中、立ち寄った村の宿屋兼食堂で。

「いらっしゃいませ、こちらにどうぞ」

僕と師匠がウェイターをして注文を取る。リトが厨房にいるルヴェルドに注文を伝え、ルヴェルドが料理を作る。

オルビアが鉛を仕込んだトレイに料理をのせ、それを上下運動しながら配膳する（たぶん筋トレ兼ねてる）。しかし、たまに食器の上の料理の量が少なかったりする（たぶんリトのつまみ食い）。そして、オーダーと料理が違う事もザラだった（たぶん師匠の聞き間違い）。

そんな時は大丈夫。3人を呼んで頭を下げさせる。男性客の場合はそれで轟沈する。むしろ、ごめんなさいと謝ってくる。女性客の場合は僕が出向く。これで乗り切れるところがまたすごい。ルヴェルドの作った料理がどれもうまいというのもあるだろうけど。とにかく、僕らがここで働き出してからここの利益も倍になったというのだから、開放される日も近いだろう。

何故こうなったか？　理由は一つだ。お金がない。

もっと砕いて言うと、出費がかさみすぎて宿代が払えなくなった。かな？　少し記憶を巻き戻そう。

赤い髪の女の子を助けた後、僕らはこの村に到着した。

「5名様ですか……申し訳ありません。ただいま空いているお部屋は、二人部屋が2つしかありませんでして……」

「そうですか……どうしよっか？」

僕ら5人は宿屋の入り口で腕を組んで考える。二人部屋が二つ。ようするに4人しか寝泊りできない。すると唐突に、オルビアが何かを閃いた。

「自分は別に外でも構わないぞ。屋根の上で腹筋をしながら見上げる星空もオツなものだ」

頼むから絶対しないでね。やらせないよ？

「ふふ。じゃあ、俺とセインちゃんとリトたんが同じ部屋でアルちゃんは別の部屋ってのはどうだ？　もちろん、リトたんは俺のベッドにカモンだけどな。いや、セインちゃんもカモンだぜ？」

ルヴェルドの脳内がピンク色になった。

「どうやったらそんな思考になるの？　脳ミソ、ヨーグルトに入れ替えた方がいいんじゃない？　きっと1＋1は2っていう答えがすぐ出るよ」

リトがざっくり言った。

「リトたん……1＋1は8だろう？　こんな簡単な算数解らないなんて……いいオトコになれないぜ？」

ルヴェルドがイタイ。ルーンナイトは全員こんな脳筋野郎ばかりなのだろうか？　というか、リトは女の子だから違うでしょ。とりあえず僕は頭の端にそれをおいて、当初の問題を考え直す。

「まあ、そうだな。オルビアさんとリトで一部屋使うとして……うーん」

「私とアルちゃんでいいじゃない？　ほら、昔は毎日一つのベッドで寝てたじゃない。お風呂も一緒に入ってたし、あの頃のアルちゃんはかわいかったなあ」

「ギャあああああああああああああ！　師匠、昔の事をほじくらないでください！」

あれは、違う。決して僕に下心があったわけじゃない。宿泊費を浮かせるためだ。お風呂だって、背中を流しっこして師匠とコミニケーションを図るためであって、幼児である事をいいわけに女湯にどうどうと入りたかったわけじゃない！　……ウソだけど。

「アルちゃん。オレ、生まれ変わるならアルちゃんになりたいわ」

ルヴェルドの目はマジだった。

「ふむ。しかし、そうなるとルヴェルド殿の部屋がないな。そうだ。廊下で空気イスというのはどうだろうか？　鍛えれて室内にも止まれる。素晴らしい案だと思うが」

ルヴェルドは高速で首をフルフルと振る。確かに、これ以上脳筋化が進んでもらっても困るが。

「じゃあさ、ルヴェルドのお部屋はあそこでいいんじゃない？」

リトの指差したドア……そこは。

「……トイレ？」

「だって、ルヴェルド臭いしー。ちょうどいいかなって、お水もあるし、友達（ごきぶ○）も一杯いるから寂しくないよ！」

明るい笑顔でリトが残酷な事を言った。天使が悪魔の様に笑うというのはこの事か。

「あら、ちょうどよかったじゃないですか、なんか、ルヴェルドさんのイメージにぴったりで」

師匠は邪気の無い笑顔でそれに同意する。おそらく、最大級の天然だ。トイレが自分のイメージにぴったりだなんて言われたら、僕でも一年くらいへコむ。

ルヴェルドは涙を流しながらトイレに駆け込み、出てこなくなった。おやすみ、ルヴェルド。

結局、その日は僕と師匠。リトとオルビアの組み合わせで部屋割りが決まり、床についた。

翌朝。問題が起こったのはそれからだ。

僕は朝、起きると剣の素振りを日課としている。鳥のさえずりをＢＧＭにして、宿の前で１０００回の素振りを終えて、宿に戻るとすでにそれが始まっていた。

宿の一階はフロント兼食堂だ。唐突に宿の主人に請求書を叩きつけられて唖然とする。

「あの……これは？」

「おたくのとこのお嬢ちゃんが食べた朝食代だよ。払えるんだろうね？」

食堂のテーブルを見ると、すでに食器の山がそびえたち、見るものを圧倒させる。食器連峰だ。そしてその中心にリトがいた。

「ああ、ここにいたのか少年。ご主人、この宿はもう少し強度を考え直した方がいいな。少しスクワットをしたら床が抜けてしまったぞ。壁だって、ほら。少し触っただけで崩れてしまう」

と言って、オルビアが食堂の壁を押すと、見事に壁がすっぽりと前に倒れ、風通しがよくなって冷たい風が吹き抜けた。

「はっはっは。これはいい。見ろ少年。隣の山が見えるぞ。なんという絶景。それにこの開放感。新時代の宿屋だな、これは。感動のあまり声も出ないか、ご主人。そうだろうそうだろう。礼はいいぞ。いい事をすると気持ちがいいものだ」

宿の主人は顔を真っ赤にして肩を震わせていた。冷たい風が僕の背中をひんやりとさせる。

「アルちゃ～ん」

今度は師匠が壁だった場所からひょっこり顔を出した。やはり、

嫌な予感がする。

「な、何ですか、師匠？」

「ほら見て！　これ！　かわいいでしょ～？」

師匠が羽の生えた不気味な魚の骨の冠を頭に乗せて、走り回った。はっきり言って不気味以外何物でもない。装備したら二度と外せないであろう呪いのアイテムである事は間違いないだろう。そしてそこについてあったままの値札に視線が釘付けになる。

「これだけ使っちゃったあ、えへ」

師匠の満面の笑み、そう。これがでたら危険信号だ。このとろけるような上目遣いの視線と、艶のある唇にだまされてはいけない。

おそるおそる師匠の請求書を見て、僕はもう……現実逃避したくなった。

というわけで。僕らは宿代を支払わない代わりに、ここでしばらく働く事になった。

以外にルヴェルドは料理がうまい。神様も人間一つくらい取柄が無いとかわいそうだと思ったのか、出荷の際に料理の才能を与えたようだ。

師匠は注文をかなりの確率で間違うが、そこは師匠のスマイルでなんとかなる。どこで覚えたのかはしらないが、スマイルにもバリエーションがあった。……保護者として将来が心配である。

リトはあいかわらず料理をつまみ食いしてしまうが、たくみな話術で再調理する時間を稼ぐのがうまい。といってもその料理をまたつまみ食いしてたりするけど。

オルビアは配膳の瞬間まで筋トレに余念がない。鉛を仕込んだフォークやスプーンを手渡して、客の腕が骨折してしまった事件は記憶に新しい。骨折を無理矢理力で治してしまうオルビアにも驚かされる。

そんな問題だらけのメンツなのに、一躍この宿は有名になり、売り上げも確実に伸びている。

ぽっかりと開いた宿の壁も、客に好評だった。『新時代の宿屋だ』と。今度王都に二号店をオープンするらしい。そこの店長にと頼まれたが、僕にそんな暇は無い。

ずいぶんと宿の主人に引き止められたが、多額の退職金を無理矢理手渡され、ようやく旅立つことが出来た。

そして、僕は帰ってきた。旧エイドス領――僕の産まれた町。すべてが始まったあの場所へ。

三十九話　キャッチボール（前書き）

登場人物紹介

オルビア・ガーランド

１５歳。元騎士。筋トレをこよなく愛するマッスルガール。
破壊的な力を持っているが、外見は年相応の女性の体つきで
決して筋肉ムキムキというわけではない。
ガイザーに仕えていたが、彼の重ねてきた悪行を以前から黙認して
きており
自分の両親を黄金のヴァンブレイスに依頼して殺害させていた事か
ら離反。
アルと行動を共にするようになった。
アルの大腿四頭筋がお気に入りらしい。

三十九話　キャッチボール

８年経ったらきっと浦島太郎の様な感覚に陥って、右も左も解らないんじゃないかと不安もあった。けれど、全然そんな事はなくて、僕の中の記憶そのものの風景が広がっており、まったく変わり映えしなかった。

「帰ってきたんだ……」

僕の前には、大きな家があった。僕が生まれて、６年間父や姉達と過ごした思い出の場所だ。そして、ここから僕の旅が始まった。

寂れた様子は無い、きっと新しい領主が今もここに住んでいるのだろう。ちゃんと庭は手入れされていて、大輪のリリアンの花を花壇一杯に咲かせている。僕がリリアンの花を知っていたのは、姉達がこの花が好きで、花壇で育てていたからだ。

父は厳しい人だったから、姉達もよく怒られていた。そんな時、ここから一輪花を摘んで落ち込んで泣いている姉に手渡す。すごく喜んでくれたものだ。

……あとで他の姉が、『ひいきだ』とふて腐れるので、必ず残りの二人にも渡しておくのは忘れない。……食べれるのだという事は最近知った事実だ。

僕は、家を背にして墓地へと向かう。墓地の一番奥にはエイドス家代々の墓があり、そこに姉達も埋葬されているらしい。

ルヴェルドが『姉さん達に顔を見せて来い』というので、他のみ

んなと別れ、一人墓参りに出向いていた。

一際大きな墓の前には老人が一人、祈りを捧げていた。

「おや？」

彼は僕に気付き、顔を向ける。その顔には見覚えがあった。執事のアイクだった。８年経った今は白髪交じりだった髪も、完全に白一色になり、それだけの歳月を経たのだという事を再び実感する。

「こんにちは」

「こんにちは、あなたも、先代領主様ご一家のお墓参りですかな？」

アイクは僕の事を覚えていないらしい。いや、幼少期の僕から今の僕を連想し、僕だとわかるほうが難しいか。

「はい」

「とても、むごい事件でしてね……旦那様と３人のお嬢様が亡くなられて……まだ６歳になったばかりのぼっちゃんも行方不明になってしまわれて……」

アイクは墓を見つめ、泣いていた。

「３人のお嬢様はぼっちゃんをとても可愛がっておられてね、３番目のセレーナお嬢様はぼっちゃんが産まれた日。それまで嫌いだったピーマンとニンジンを残さず食べて、『今日からはお姉さんになるから』と言ってわがままだったところを少しづつ直されたんですよ」

セレーナ姉さん……。

「2番目のレイナお嬢様はよく泣く子だったんですがね、早くにお母様を失くしたぼっちゃんを悲しませないために、泣くのをぴたりとやめて、元気に笑う子になったんです」

レイナ姉さん……。

「一番上のフィーナお嬢様は、母親を失くした兄弟達の母親代わりになるために、色々と我慢なされました。本当はもっと、外に出て遊んだり、年相応に恋もしたかったでしょうなあ」

僕はただ黙ってアイクの言葉に耳を傾けた。

「きっとぼっちゃんが今もお元気にされていたら、あなたの様な立派な少年に育っているのでしょうが……悲しいですな。先に逝くのはこの老いぼれの私のはずですのに……」

「大丈夫。その子は今も生きていますよ。悲しいこともあるけど……きっと元気です」

本当は『アルフレッドだよ』と言いたかった。でも、言えないんだ。すべてを終わらせる時まで、僕は……。

アイクは僕の言葉で笑顔を見せ、その場を去って行った。ごめんね、アイク。

しばらくその場で黙って立ち尽くした後、墓地を出ようとした。その時だった。

風を切る音。まっすぐに僕目掛けて飛んでくる。もう来たのか？
僕を殺すために来たルーンナイト。

そっと腰の剣に手を添える。思考を戦闘へとシフトさせ、僕に迫る物体に振り向く。

「ごめんなさーーーい！」

飛んで来たのは、矢でもなければ、ルーンでもなく……ボールだった。皮でできた掌サイズのボールを右手でキャッチし、声のしたほうに目を向ける。

小柄な少年が息を切らして僕のところに駆け寄ってきた。

「それ、ぼくのです！」

リトと同い年くらいの少年が、僕の目の前にやってきて、右手を前に出した。これは彼の物らしい。

そっとその小さな手に、ボールを握らせる。少年は満面の笑みを浮かべて僕に頭を下げた。なんだか、子犬のような子だ。黒い髪と半袖と半ズボン。元気印という言葉が似合いそうな少年。

「お兄さんはこんな所で何をしているの？」

「お墓参りだよ。君こそ、こんな所で遊んでたら危ないよ。川原とか、他に友達と遊べるところあるでしょ？」

「ぼく、友達いないから……お父さんの仕事の都合で最近ここに来

たんだ。だから、一人で遊んでたの」

友達……一人……ふと、ロッテと出会った時の事を思い出す。あの時の僕も一人だった。でも、ロッテと友達になって二人で楽しく遊んだっけ。

「ねー。お兄さんヒマでしょ？　絶対ヒマだよね？　ううん、ヒマな顔してる！　だから、ぼくと遊ぼうよ！」

「え？」

答える間もなく、少年に手を引かれ、墓地から少し離れた原っぱでキャッチボールをする事になった。

「いくよー！」

「いいよー」

少年が投げる。僕がそれを受け取る。僕が投げる。少年がそれを受け取る。何年ぶりだろうか？　キャッチボールをして遊んだのは。前世では弟とよくキャッチボールをして遊んだっけ。

ひとしきり遊び疲れた僕らは、原っぱの上で寝転がる。

「ぼくね、昔のこと覚えてるんだ」

唐突に少年が口を開いた。昔を覚えている？　そりゃ、１０年生きていれば、小さかった頃の事も覚えているだろう。

「あ、違うよ！　ぼくがちっちゃかったころの話じゃないよ！　も

っと前の話なの」

「もっと前って？」

「うん。たぶん、前世っていうのかなー。はっきりと覚えてるわけじゃないんだけど、お兄ちゃんがいてね、よく遊んでもらったんだ。さっきみたいに」

「そうなの？」

驚いた。ロッテ以外に前世の記憶を持つ人間に出会ったのは初めてだったからだ。

「でもね、ぼく。知らない男の人に……殺されちゃったんだと思う。お母さんのアイジンだとか言ってた。妊娠してた女の人をケガさせて逃げてるとか言って……その日はお兄ちゃんの誕生日だったのに……。ぼく、すごく怖かった」

少年はそこで口をつぐんだ。そして立ち上がる。

「お兄さんが初めてだよ！　ぼく、誰にも言ったことがないから」

「どうして僕に言ってくれたの？」

「お兄さんも、ぼくと一緒だったから」

「え？」

そう言って少年は僕の鳩尾あたりを指差す。

「お兄さんの魂。かわいそうな位、傷だらけだね。ぼくには見えるんだよ人の魂が」

言葉が出てこなかった。

「あ、ぼくそろそろ行かなきゃ！　大事な用事があるんだ！　またね！」

「待って、君。名前は？」

「エリオだよ！　またね、アルフレッドさん！」

四十話　ボーイミーツガール

エリオは元気よく風のように去って行った。その後姿をしばし眺め、僕は思い出す。そういえば、まだ立ち寄っていない思い出の場所があった。

ロッテと出会ったあの思い出の川原。僕の足は誘われるように川原へと足を運んだ。

この町に着いたのが比較的早い時間だった為、今はまだ昼過ぎ。もう少しでお茶の時間といったところか。そうだ、あの日も昼過ぎだったかな。

やがて僕は川原に着き、人影を見つける。赤く長い髪。川面を見つめている、あの後姿には見覚えがある。この前の騎士の子だ。

偶然もあるものだ。僕はその後姿にゆっくりと近づく。

「お久しぶりですね、この町で働いていた騎士さんだったんですか？」

少女は振り返らず、背中を向けたまま答える。

「ええ。先日着任したばかりです。あなたこそ、どうしてここに？」

「僕の思い出の場所なんです。初めてできた友達との思い出の場所……かな？　どうしても、見ておきたくて」

「そのお友達。今はどうしているの？」

「解りません。けど……」

一呼吸おいて、ロッテの笑顔を思い浮かべる。

「きっと、念願が叶って今は楽しく暮らしてるんじゃないかな。僕なんかと違って」

「そうかしら？」

「え？」

少女の肩が震えた。

「その子はきっと、今も泣いているわ。だって、捨てられたんですもの。あなたに」

「僕は……捨ててなんか……いないよ。僕と一緒にいると彼女に迷惑を掛ける。彼女には僕がいない方が、いい。だって、彼女は……ロッテは、いつでも輝いてたから」

「いつでも？　そう、じゃあ今の私は何なのかしら」

「君は……」

少女は震えを止め、こちらに振り返る。

「私は今も泣いている。あなたに捨てられた8年前から、ずっと、ずっと、ずっとよ！　輝いて見えるのは、光を受けていたから。私一人では輝けない。私は月なの。アルフレッド・エイドスの、太陽

の光を受けてしか輝けない」
「ロッテ……なの？」
「太陽は沈んだまま、昇ってこない。だから、私は輝けない。一人暗闇で静かに生きている。こうしてね……」
ロッテは左腰の剣を抜いて僕に向ける。
「ちょっと……待ってよ！　どうして、どうしてそんなこと、ロッテ――」
「気安く私の名を呼ぶな！」
殺気を感じた。ロッテから。僕は信じられなかった。
「今の私は、ルーンナイト第六席ロッテ・ルーインズ。お前の……敵だ」
斬撃。初めて出会った時とは違う。本物の剣で。僕の肩すれすれにそれが振り下ろされる。
「あんたはガイザー・ドルベンを殺した。この薄汚い人殺しが！せめて私の知っている優しいアルのままで……私の手で殺してやる！」
横からの一薙ぎ。僕はそれを後ろに下がって、回避する。太刀筋にまったく迷いが無い。完全に僕を殺す気でいるのだ。ロッテは……。

「聞いてくれ、ロッテ！　ガイザーはヴィーグの街で――」

今度は刺突。無数の銀色の光の残滓が静寂に包まれた川原に生まれる。

「ガイザーがシャナールと繋がっている？　戦術級クレストを密造していた？　知っているのよ、そんな事は！　あんたのした事はムダなのよ！　シナリオが用意されていたのに、それをブチ壊してくれた！　あんたがアルバーブの人間に接触さえしなければ、あんな悲劇が起こる前にカタをつけれたのに……あんたが殺したも同然なのよ！」

喉がカラカラに渇く。僕が現れなければ、カリンもシャイドさんも死ぬことは……無かった？

その一瞬の戸惑いが、ロッテの突きを左腰に受け、腰に帯びていた剣を弾かれる。

そして距離を一瞬で詰められ、ロッテの……14歳になって大人びた顔になった少女の顔が僕の鼻先にあった。

熱い。

斬られた？

いや、違う。

僕はどこも斬られていない。

熱さを感じているのは……唇――。

ロッテと目が合う。目が離せない。初めて感じた柔らかい女性の唇……しかし、その悦楽に浸る間もなく、僕は仰向けに倒され、腹部を踏みつけられる。

「こんな関係にさえならなければ、いくらでも続きができたのにね。愛してるわ、アル。殺したいほど……だから、死んで――」

死ぬ？　ロッテの剣が僕に迫った。僕にはそれを受け止める術はない。かわそうにも、ロッテの足が僕の腹を押さえており、逃げることも敵わなかった。

死んだら……どうなるのだろうか？　また生まれ変わるのだろうか？　それとも、輪廻の輪から外れて僕も永遠をさまようのだろうか？

アイクの言葉を思い出す。姉達は僕を愛してくれた。とても、とても。僕はそんな姉達に何の恩も返していない。

僕に出来ることは何だろうか？　仇を討つこと。そうだ。僕は黄金のヴァンブレイスを殺さなきゃいけない。その為には何を犠牲にしてでも、とあの日決めたはずだ。

何を犠牲にしてでも。それが友達であろうと。何であろうと。

気が付くと、ロッテの剣が折れて、後ろに下がっていた。

僕はゆっくりと起き上がり、二つの剣を構える。

「ロッテ。引いてくれ。僕は死ねない。やらないといけない事があ

るから」

覚悟を決めよう。カリンの墓前でも覚悟したのだ。いずれこうなる時が来ることを。ロッテがルーンナイトになったのならば、可能性の一つとして十分考えられたじゃないか。

僕は無意識の間に除外してしまっていたのだ。ロッテが僕の敵になるなんて事ないって。

甘さは弱さ。右手の風の剣と左手の石の剣をクロスさせるように構える。ルヴェルドのモノマネだ。風と大地のルーンの武器化……二振りのルーンソード。

「アル……！」

ロッテの目が容赦なく僕を睨む。どうやら、もう、引き返すことはできないらしい。

「いくよ……ロッテ」

四十一話　ガールミーツボーイ

アルは私を拒んだ。せめて苦しまないよう、楽に逝かせてあげようと思っていたのに……その最後の私の愛情さえも拒んだのだ。

アルが構えているのはルーンを武器化した物。それによって私の剣は折れ、使い物にならなくなってしまった。だが、剣が折れても私の心が折れることは無い。

ルーンの武器化。高等技術だ。前第三席ルヴェルド・ジーンですら、その習得に数年を費やしたという。やはり、アルには才能がある。昔はそれが我が事の様に誇らしかった。

でも、今は――妬ましい。

「ロッテ……僕の望みは一つなんだ」

望み。一体何だというのか？　８年前からやり直したい？　それとも、キスの続きがしたい？　さあ、言ってご覧なさい。

「あいつを、殺さなきゃいけない」

違うのか。アル、愛情の裏返しは憎しみだけどね、憎しみの裏返しは所詮、憎しみなのよ。

「そんな事、私にはどうでもいいのよ！」

アルの感触が残ったままの唇で、アルを威嚇する。命令？　任務？　同僚の仇討ち？　どれも違う。今私がアルに牙を剥いている理

由は大義名分でもなんでもない。ただの……私怨だ。

けれど本当は……自分でも解らない。憎んでいるのか、愛しているのかも。ただ、独りよがりだっていう事はわかっている。けれど、私の中のアルへの8年分の思いが心を暴走させる。

そもそもが……これは私のアルへの一方通行の思いなのだ。アルからすれば……私はただの友達だったのかもしれない。けれども、5歳の私にとって世界の全てはアルで、アルが世界の全てだった。せめて、この世界で幸せになりたかっただけなのに、神様は私に永遠に孤独をさまよえと言うのか。

……幸せになりたい。

今すぐこんな戦いをやめて、この手を取ってどこか遠い所へ連れて行って欲しかった。2人だけでいられればよかった。そうすれば、ルーンナイトになんて未練はないし、王の后なんて野望もいらない。でも、それは叶わないのだ。アルの目がはっきりとそれを物語っている。

だから、私は。

風のルーンを唱え、それを地面に向けて放つ。

風が舞い、アルの視界を奪う。私はその隙に左から回りこんだ。狙いは――アルが腰にさしていた剣。

アルの死角をついてその脇をすり抜ける。そして、転がるように走り、川原に落ちていた剣を手に入れ、引き抜きアルの元へ向かう。

アルの剣でアルを殺す。

私はアルの背後、右上から袈裟懸けに斬りかかる。

瞬間、石の剣に阻まれてアルには届かなかった。アルの右手が動く。今のアルは二刀流。先日の賊との戦いを見て、分析したデータが役にたたない。――クソ。

一刀と二刀。明らかに不利だ。片方を防御に使い、一度攻勢に転じれば左右両方からの斬撃が私を襲う。

「ロッテ。僕は嫌だ。君を殺したくない。だから、解って」

殺したくない。その言葉で私の頭の中は真っ白になる。手加減されているのだ。この期に及んで。かわいくない奴――。

再びアルの双剣が私に迫る。

意識を集中する。大地の壁。早き逆風。私の周りに土の壁と風の壁。二重の障壁が発生し、アルの双剣を受け止める。

「アル、そんな『おもちゃ』じゃね、乙女の柔肌には傷一つ付けられないのよ」

だが、アルは怯まない。まっすぐに私に視線を向け、障壁に阻まれていた双剣に力を入れる。風の刃がうなり、土の壁がひび割れる。

アルは一歩前へ踏み出す。そして、とうとう風の壁が石の剣に裂かれ、アルが私に迫った。

想像以上に――強い。

再び私は斬りかかる。しかし、使い慣れた剣では無い為か、思うように動かせない。

「ムダだよ、ロッテ」

アルは二つの剣をハサミのようにして私の剣を受け止める。そして、気が付くとアルの顔が目の前にあった。腹部にアルの肘が入る。

私はその場に崩れ落ち、アルを見上げるかっこうになった。

「もう、僕を追ってこないって約束してくれないか？　そうすればこの場は見逃すよ。もちろん、他のルーンナイトの場合は容赦しないけど」

「ふざけないでよ」

やっぱり、アルはすごい子だ。私にはもう打つ手が一つしかない。これまで実戦で試したことは一度も無かった。出たとこ勝負。それも、悪くない。分の悪い賭けだ。

アル、どうなっても……知らないわよ。

意識を集中する。高き岩山。青き大海。春の嵐……確固たる強大な自然の記憶を掘り起こす。

ルーンはイメージ。そのイメージが強ければ強いほど、威力は上がり、扱いが難しくなる。

そして、今私は3属性のルーンを唱えた。

――三重詠唱（トライキャスト）。こんな形で……それも、アルに対して使うことになるとは……。

石と風と水の防御幕を全て左手に収束。左手の感覚が無くなりかける。体にかなりの負担を強いているのだ。気を抜けば私の左手は吹き飛ぶだろう。后になる女が傷物では、私の野望はここで終わりだ。だから分の悪い賭けなのだ、これは。

さらにイメージを加え、盾にする。ビジュアル的には、美麗なデザインの石の盾の中央部に、青色の宝石――水の塊が形成され、盾の周りを絶え間なく風が渦巻いている。と言った感じか。

これは『イージスの盾』。敵から、色んな嫌な物から私を守ってくれる盾。私を拒む全ての物から私を守ってくれる盾。

「いくわよ、アル……」

アルの剣を右手に、盾を左手に構えた私は左半身を前に出す。

盾を前面に押し出し、そのままアルにぶつける。アルは、双剣でこれを受け止める。

受け止めた瞬間。アルの体は面白いくらいに吹き飛んだ。そうだ。これは、攻撃を防ぐ盾ではなく。跳ね返す、鏡。

「いい気味ね、アル。私はルーンナイトなの。そして、いずれこの国を動かす女になるのよ。その私が、こんな所で倒れるわけには行かないの。あんたとの繋がりも今日ここで全て断ち切って、私は前

に進むわ」

アルは立ち上がる。その目には何の迷いもなかった。いいわ、何度でも来なさい。

アルが跳躍する。空中から迫るアルに盾を向ける。石の剣が盾に直撃した瞬間、間髪空けずに風の剣をさらに打ち込んでくる。

私の障壁を破った時とは逆だ。石の剣は土くれになり、風の剣は大気となって霧散する。アルはその反動を受けて体を地面に横たわらせる。すぐにまた立ち上がろうとするが、膝を付いたまま動かない。

「終りね、アル。楽しかったわよ、最後にステキな時間をありがとう。今度は来世で……また会いましょう」

最後の瞬間。私の視界がかすんだ。何故かは解らない。

ああ、そうか。泣いてるんだ、私。

でもこれは、嬉し涙？　悲し涙？　一体何の涙なの？

かすんでいた視界を元に戻し、アルを見る。

「ロッテ……逃げろ」

「何を言っているの？　理解できないわ」

アルの体が小刻みに震えている。そして、右手が黒く変色……いや、右手に黒い霧が集まっている。

「逃げろ！　僕の中の闇が這い出てくる前に！　闇のルーンが……ロッテの心に反応してる……のか？　くそ、抑えられない！　早く逃げろ、ロッテ！！」

その言葉を最後に、アルは気を失い、地面に横たわる。一体何が起こっているのか？

膝が震えた。

私の中の憎しみとも愛情ともつかない感情は、それを見た瞬間に恐怖へと一瞬で切り替わる。

倒れたままのアルの右手から黒い何かが這い出て、それが昼間にもかかわらず黒く光っていた。

なんというおぞましさ。周囲の動物も恐れをなしたのか、水のみをしていた鳥達が一斉に飛び立った。

この感覚には覚えがある。

8年前――あの赤いローブの人物。黄金のヴァンブレイスと対峙した時に感じた、あれだ。

恐怖で私の頭はいっぱいになる。

闇が――来る。

四十二話　クリティカルヒット

見られていた。そいつは確かに私を見ている。どこかに目がある訳ではない。そんな気がしただけだが。

闇が蠢き、真っ黒な手に変化した。５本の指を持つそれは、私に引き寄せられるように伸びて来る。

「何なのよ、これ！？」

迫る闇に向けて盾を差し出す。闇を受け止めるが、それは一瞬の事。あっけなく盾が崩れ去り、危険を感じた私は後ろへ跳躍する。

ルーンを跳ね返すイージスの盾をいとも簡単に……あれは一体何なのか？　生物ではない事は確かだし、異形の類でもない。

再び迫る闇。私は火のルーンを放ち、闇に直撃させる。しかし、闇に吸い込まれ、闇はその体積を増した。

闇に向けて剣を振るうが、霧のように散らばっては再び集まり、すぐに再生する。

「あれは、彼の心そのものだな」

後ろから唐突に声を掛けられるが、振り向かない。闇と対峙したまま私は答えた。

「ハーケン卿……どうしてここに？」

「私の事より、目の前のアレをなんとかするほうが先だろう。おそらく、あの闇は彼が抱え込んでいる負の感情だ。ルーインズ卿の心があれを呼び覚ましてしまったのかもしれないな」

私が……あれを？　いや、それよりも……アルは……アルはあんなものを抱えて生きていたのか？　どす黒く、暗く、光さえ飲み込む果てしない闇。

私は……アルの事、どれだけ考えた？　あの時、悲しかったのも悔しかったのも私だけ？　違う。

アルは目の前で家族を殺されたんだ。惜しみない愛情をたくさんくれた家族を。優しい姉と、厳しい父を。私は……アルの事、どれだけ考えた？

考えていないじゃないか。自分一人が悲劇のヒロインを気取って、自分一人が一番不幸な顔してる。

私は……嫌な女だ。

「ハーケン卿……どうすれば、あの闇を抑えられますか？」

「おそらく、彼の意識から離れて暴走しているんだろう。彼の意識が呼び戻されれば、或いは」

「お手数をお掛けしますが、あれの注意を引き付けていただけませんか？　その間に、彼の目を覚まさせます」

「まあ……いいだろう。あれを放置しておくのは危険だ。ここは任せて、そっちを頼む」

「はい！」

今更、何がどうなるわけでもない。こじれてしまった私達の関係は元に戻せないかもしれない。けれど。

あんなの……アルじゃない。あれはアルには似合わない。私は月。太陽の光がなければ輝けない。太陽が沈んだままなら――。

私が太陽を引きずり出す！

目の端に、木の棒を捉える。きっと、子供が遊んでいたんだろう。あの時もこれを拾って、振り回したっけ。そして、アルに出会ったんだ。

こんな棒切れ一つが、私の運命を変えたんだ。そう考えると、バカバカしくなる。

考え方一つじゃないか。アルが復讐に囚われているなら、私がそこから解き放つ。そして、私に振り向かせてやる。だから、アル。目を覚ましなさい！

木の棒を構え、アルに振り下ろす。

『殴っていい？』

『はあ？』

そんなセリフが脳裏に浮かぶ。８年前は未遂に終わった木の棒で叩く行為。今度は、クリティカルヒットした。

＊＊＊＊＊

急激に世界が揺れた感覚に陥る。そして、目を覚ますと何故か頭が痛い。かなり痛い。けっこう痛い。

「目が覚めたようだな」

「ハーケン卿。お下がりください、彼は――」

「ああ、それならもういいんだ。それどころじゃなくなったからね」

「は？」

目の前には、ロッテともう一人……。

「おはよう、お兄さん。こんな所でお昼寝したら、風邪引くよ？」

「……エリオ？」

エリオが僕の顔を覗き込んで微笑む。

「ハーケン卿。『それどころじゃなくなった』とは、どういう事ですか！？」

「エリオ。離れて、危ないから。ロッテ、まだやるつもりなら――」

「だからさ、もういいの！　今お兄さんに構っていられるほど時間ないし」

「何を言ってるの、エリオ？」

「ぼくは、ルーンナイト第一席エリオ・ハーケン。ルーインズ卿を呼びに来たんだ。もうすぐ、始まるからさ」

エリオはキャッチボールをしていた時とは違う、影のある暗い表情になって言った。

「シャナールとの戦争が、ね」

四十三話　カイセン

シャナール……。今まで幾度と無く耳にし、口にしてきた国名だ。正式には、神聖シャナール帝国。

僕は、アイクに昔教えてもらったこの世界の歴史を思い出す。数百年前、この世界に原初の統一国家が存在した。しかし、当時の支配者が急逝すると、あっけなく瓦解。

５人の息子たちはそれぞれが自分を正当な後継者だとし、５つに別れた領地を互いに奪い合った。その結果が今の世界の状況であり、５つの国の始まりだ。

次男だったエルドが現在のエルドア王国を興し、長男だったシャナイルが神聖シャナール帝国を。三男、四男、五男もまた、同じ様に。今の仮初の平和はたくさんの血肉の上に成り立っている。

５つの国が互いに争っていたのは、遥か昔の事。敵は人間ばかりではない、異形の存在もある。次第に戦いの波は引き始めるが、シャナールだけは違った。

他の４国に対して今もなお、侵攻する機会を窺っている。というのも、シャナールは５国の中で一番大きな国土を有し、世界最大の人口を誇る。しかし、国土の大半は痩せた土地で、砂漠化が進んでいるためか、作物にも恵まれない。

それに対し、隣接するエルドアは肥沃な土地で、緑あふれ、自然に満ちている。だからだ。シャナールとエルドアの戦いは常に国境地帯で繰り広げられていた。エルドアの緑を、自然を手にいれるた

めに。

それが、祖父の代に大規模な侵攻があったのだが、祖父がそれを少数の部下と共に撃退した。自国にはルーンナイト第一席ロイド・エイドスの名は英雄として語り継がれ、敵国には畏怖の対象として当時の軍人の間では有名になった。

……祖父の事を話している時の父は、厳しい表情をどこかに置き忘れたのか、少年の様に目を輝かせ、誇らしげに祖父の武勇伝を語ってくれた。

その祖父のお陰か、この十数年は比較的平和であった。だが、それも今日までの事。

「すでに国境では先遣隊との戦いが始まっている頃だろう。ルーインズ卿には現地に急行してもらいたい。騎士たちの士気も上がるだろうしね」

「わかりました。すぐに向かいます」

「うん。といっても、君はまだルーンナイトになりたてだし、大規模な戦は今回が初めてだろう？　指揮を執るのも未経験だし」

「はい」

「だから、新しい第七席を君に付ける事にした」

新しい第七席？

「こんなご時勢だ。臨時の選定会を開いている暇はない。それに、

現存の騎士達じゃドングリの背比べもいいところだ。期待はできない。だから」

そう言って、エリオは僕を見る。

「あなたにお願いしたいんだ、第七席を」

「え？」

「これまでの事は全て水に流そう。現状、実戦の経験が豊富でシャナールのあしらい方を知っているのはあなたくらいでしょ？」

ロッテも僕を見る。

「敵部隊の指揮官はバイエル・シャウター。恐ろしいくらいズル賢い奴で有名だよ。こっちも双天使あたりをぶつけたい所だけど、彼らも持ち場を離れるわけには行かないからね」

「あなたなら……」

二人の視線が僕に集まる。

「しょうがねーなあ。いいオトコは一時休止かねえ」

「え？」

二人の視線は僕ではなく……いつの間にか、背後に立っていたルヴェルドに向けられていた。

「バイエル・シャウターはケツの穴まで腐ったクソヤローだ。今思

い出しても吐き気がするぜ。お上品にお相手してたら、即全滅だ」

「現時点で頼めるのはあなたしかいない。復帰、お願いできますね。元第三席？」

「エリオちゃんに頼まれたら、断れないでしょーよ。それに、ロッテ様とお近づきになれそうだしな」

「ぼくがここに来た理由はルーインズ卿に開戦の事を告げに来ただけじゃない。ルヴェルド・ジーンのルーンナイトへの復帰要請。陛下の命だ」

「宿に来たときは驚いたぜ。俺にも黄金のなんたらをぶっ殺す目的があったが、戦争が始まったんじゃそれ所じゃねーからなあ。ルーンナイトが一人欠けたこの状況。攻め込むにはうってつけの時期だったわけだ」

「僕がガイザーを……殺したせい……ですね？」

「アルちゃんよ。思い上がるんじゃねーぞ」

「ルヴェルドさん？」

「お前さんのやった事が引き金かもしれねえが、それはきっかけの一つに過ぎない。あらゆる要素が折り重なって今の状況を作ってんだ。それに、その論法でいくと……一番悪いのは俺だよ。弟を止められなかった俺が、一番悪い」

ルヴェルドは僕に顔を近づける。

「早くここを離れろ。セインちゃんと、リトたんとオルビアちゃんを連れて、出来るだけ遠くにな。へたをこくと……この町が戦場になる。俺はフィーナの生まれた家を守ってやりたい。もちろん、弟もな」

「逃げなさい、アル。あなたは民間人。私は騎士、ルーンナイト。……この国を守る義務がある」

ロッテは、少し間を空けて僕を見た。

「もちろん、そこに住む人々の命も。でも、あなたには望みがあるんでしょう？　ここにいると戦闘に巻き込まれるわよ」

「わかったかな？　お兄さんの命にもう用はないの。だから、さっさと逃げちゃいなよ。死なないうちにさ、じゃあ行こうか二人とも」

ロッテとルヴェルド……それにエリオが僕に背を向けて歩き出した。何か……できる事はないのだろうか？

ルヴェルドだけがその場に止まり背中を向けたまま、僕に語りかける。

「アルちゃんよ。三人を守ってくれや。そんで、できるなら俺の分も黄金のなんたらの顔面に何発かパンチ、ブチ込んでくれ。短い間だったけど、楽しかったぜ？　ここにフィーナがいたら……いや。こればっかりはしょうがねーよな。そんじゃ、行ってくるわ」

ルヴェルドは今度こそ去っていき、川原には僕一人が取り残された。

四十三話　カイセン（後書き）

体調を崩してしまったので当分、連載休止します。
来週月曜にでも再開できればいいのですが……季節の変わり目。
たまっていた疲労が出てしまったんでしょうね。
皆様もお気を付けください。

四十四話　シュウライ（前書き）

復活しました。

四十四話　シュウライ

しばらく僕はその場に立ち尽くした。だってそうだ。ロッテとの再会。そして、戦い。シャナールとの開戦。ルヴェルドのルーンナイト復帰。

あまりにも短時間で多くの事が起きすぎた。わずか数時間前。この町にたどり着いたばかりの僕に、今のこの状況が想像できただろうか？

できるわけがない。ロッテにまた会えた事は嬉しかった。でも、僕を殺すと言って刃を交えた時は、やはり悲しいものがった。シャナールの侵攻によってそれは無くなったものの、今まで通りにロッテと言葉をかわす事はもうできない。

８年はとても長かったんだ。知らないうちに僕はロッテを傷つけてしまっていたのか。あの時……僕は背中越しにロッテの泣き声を聞いた。けれど、それを振り切った。きっと……ロッテに辛い思いをさせてしまったんだろうな。

そこに後悔はなかった。なによりも僕の心は怒りに燃えていたから。しかし、ロッテをあそこまで歪ませてしまったのはやはり、僕の責任なのか……。

ロッテの家庭について聞いた事は無かった。ロッテが川にあやまって落ちてしまった時、彼女の素肌を見た。あれは今でも覚えている。

服で隠れる場所にはアザというアザがあって……思わず目を背け

た。ロッテはいつも川原にいて、僕を待っていた。雨の日も風の日も。そこがまるで自分の家みたいに、いるのが当たり前の様に川原にいつもいた。

どんな家庭かだなんて、想像するまでもない。僕にとってロッテが太陽だったように、ロッテにとっても僕が太陽だったのかも……知れない。

あの時ああしておけばよかった。人はそう思って人生がやり直せるなら、と願う。けれども人生にやり直しはきかない。ありのままを受け入れて、それを教訓にし、前に進むしかない。

前に進もう。今はとにかく、ここを離れることが先決だ。そして、いつか全て終わったらロッテに……。

そこまで考えをまとめるのに一時間くらいが経ってしまった。いけない。早くここから離れなければいけないのに。

川原を背にして、みんなの待つ宿に向かおうとした時。

臭いがした。これは……血の臭い。そして耳を澄ませば、鉄と鉄のこすれあう音が聞こえる。

「……何だ？」

まさか。こんなに早く国境を突破したのか？　ロッテ達は一体何をしているんだ！？

僕は駆ける。町に急いで戻ると、我が目を疑った。

「シャナール軍……」

町に待機していたのであろう、騎士達は無残に切り裂かれていた。そして、数人のシャナールの兵士が町の人々に剣を向け、どこかに連れて行こうとしていた。その中にはアイクや、幼少時に見知った町の人々の姿があった。

「クソ！」

駆け出そうとした時、急に背中を引っ張られ裏路地へと体を引っ張られる。

「少年。軽卒だな」

オルビアだった。オルビアが右手で僕のエリをつかんで、まるで仔猫の首をつかむようにして僕を路地の奥へと連れて行く。

「まずは落ち着くことだ。ここで君が飛び出しても、町の人々が盾にされる。シャナール人とはそういう奴らだ。一応国際条約では、非戦闘員の命を奪う事は禁止されているが、民間人の命もいざとなれば平気で奪う。この世界で一番優れているのは自分達だと思い込んでる、困った連中だよ」

「オルビア？」

「……自分の母はシャナール人の奴隷でな。ガイザーが己の欲を満たすために『買った』のだ。だが、父が母を連れ出し……まあそういうわけだ。だから、人並み以上にシャナールの知識はある。どんな筋トレが流行っているのか、とかな」

ここは筋トレに突っ込まないほうがいい。

「じゃあ、オルビアはハーフなのか。エルドアとシャナールの」

「そうなるな。意識した事は無いが」

「ところで、一体何が起こっているんだ？　それにどこに……ていうか、降ろしてくれない？」

「ん？　自分は筋トレになるし、構わないんだが」

こんな時でも筋トレとは恐れ入る。

「アルちゃん！」

「アルお兄ちゃん！」

路地の奥には師匠とリトが座り込んでいた。

「表で腕立て伏せをしていたら、妙な気配がしたのでな。急に男に剣を向けられたので、ヘシ追ってやったら肉弾戦に持ち込もうとしてきた。やはり、鍛えていてよかった。その男をダンベル拷問してやったらシャナール兵だと言うではないか」

ダンベル拷問が気になる。

「とりあえず手足を縛って、肥溜めに沈めて来たから他の兵士にばれる事はないだろうが、迂闊な行動は取るなよ、少年」

「その兵士さんに色々お尋ねしたら、数十人規模の部隊で国境を迂

回して、誰も通らない森の中を進んできたんですって。えらいわよね」

「敵の狙いは……国境に目を向けさせ、手薄になったここを抑える事……か。進軍ルートが確保できたなら、後続の部隊がやってきてロッテ達が挟み撃ちにされる」

「そうだな。叩くなら今しかないが、相手は人質を取った上にこちらよりも数が多い。全員で乗り込んでも結果は見えている。ならば……」

「誰かが陽動に出て、敵の目をひきつけその間に人質を救出する……かな？　問題は誰がやるかだけど」

「ふ。自分に考えがある。こんなこともあろうかと、秘蔵の筋トレグッズを用意してきた。これをみれば、連中もこぞって筋トレを始めるに違いない。自分で言ってなんだが、この知略、末恐ろしいな」

言葉が出ない。

「ま、まあ。とにかく、陽動はオルビアに任せるよ。リトはどこかに隠れていて。師匠、行きましょう」

「アルちゃん。人質さん達の場所、わかるの？」

「この町で人質を一箇所に集めてかつ、立てこもるのに最適な場所は一箇所しかありません」

そうだ。僕の思い出が詰まった場所。僕の産まれた家……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1902w/

黄金のヴァンブレイス

2011年10月9日21時52分発行